



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	道南浜ことばにおける共通語化のパターン類
Author(s)	井上, 史雄
Citation	北海道大学人文科学論集, 13, 1-123
Issue Date	1976-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34322
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_PL1-123.pdf



道南浜ことばにおける共通語化のパターン分類

イノ ウエ フミ オ
井 上 史 雄

は じ め に

北海道西南部の漁村で、語彙と語法の共通語化に関する調査を行なった。「ふだん家の中で使うことば」と「校長先生に話す時に使うことば」との二場面に分けて尋ねることにより、地元民にとっての方言と共通語とを判別できた。「共通語化」といっても事情は単純でない。わずかの調査語彙であったが、林の数量化理論第3類といわれる多変量解析法を適用することにより、得られた語形を「全国共通語」「地方共通語」「新方言」「中興方言」「古方言」に分類することができた。またこれらの語形の使用合計点数と社会的条件（個人の属性）との関係を見ることにより、共通語化の進行・語形の伝播過程についても知見が得られた。文体的に高くとも衰える一方でしかも全国共通語と一致しない「地方共通語」の存在を、具体的に証明できたし、新しい語形が必ずしも文体的に高くなくとも拡散・伝播しうることもわかった。また、極小のグロットグラム（地理×年齢図）を作成することにより更に考察を進めることができた。

1. 島野調査の概要

調査地は、北海道後志支庁岩内郡岩内町^{シリベシ}島野^{イワナイナヨシマノ}の七・八区である。道南の西海岸、積丹半島^{シヤコタン}の南に位置する。岩内が町になったのは明治33年7月、当時1万5千近くの人口があった。昭和50年5月1日の住民基本台帳による人口は25,862である。国鉄岩内線の終点で漁港があり、水産業従事者が多い。

島野は岩内町南西端に当り、国道229号の走る海岸ぞいに約3.5kmにわたって街村状に連なる。（図1-1）。昭和30年に岩内町と合併するまでは島野村。島野の名は合成名で、明治34年版の「北海道庁管内全図」には野東・敷島内の二つが載る。現在も大字としては野東^{ノツカ}・敷島^{シキシマ}内にわかれているが、支所・郵便局・小学校・駐在所等の公的機関の管轄は「島野」であり、住民の自治会組織も島野地区を1～8区に分割している。昭和50年8月現在の世帯と人口は、野東（1～4区）492世帯1,759人、敷島内（5～8区）166世帯702人。昭和初年までのニシン漁全盛期には典型的な漁村で、大きな網元もあった。現在も漁業従事者が多いが、水産加工場に働きに行ったり、土木労働、商業、事務等に従事する者も増えつつある。

小樽・岩内・寿都を結ぶバスが一日12往復し、停留所の数が多い。

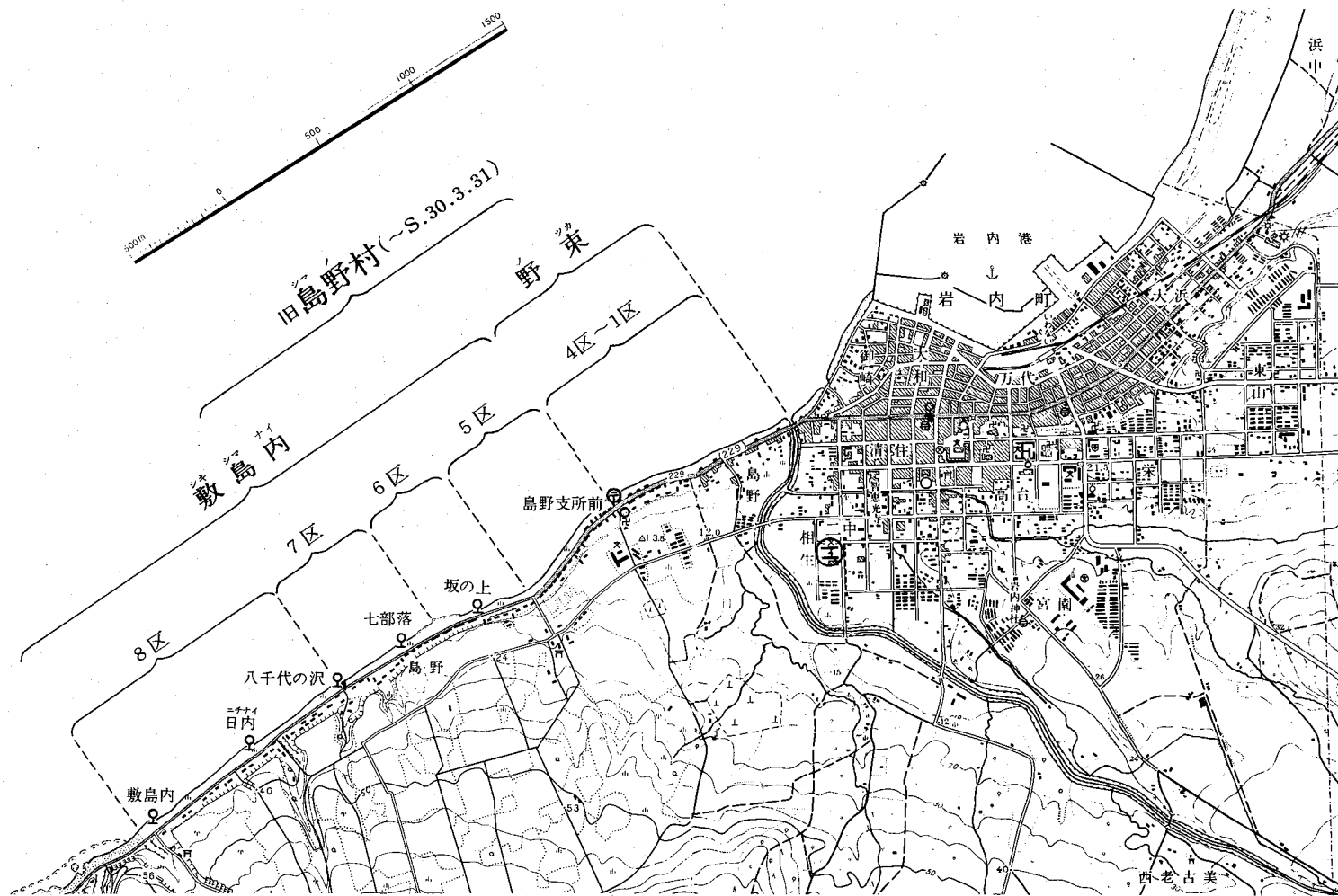


図1-1 島野付近概要(二万五千分の一地図「岩内」「雷電」による)

1751年（宝暦元年）に運上屋がおかれたのが岩内の開基とされるが、出稼ぎのみで永住者がなく、1825年（文政8年）島野に道南から和人38戸移住し、1830年には110余戸移住という記録が定住のはじまりとされる。大正初年島野は約400戸で、津軽・南部から来た者が多かったそうであるが、ニシン漁の盛衰と共に住民にも変動があった模様である。

小学校は（郵便局や支所・駐在所と同じく）島野のほぼ中央（野東・敷島内の境界付近）にある。昭和29年の岩内大火後市街地に近い方に団地が出来たりしてマチの子も混るようになった。中学校は市街地の第2中学校に通う。島野には雑貨、食糧品店が数軒あるのみで、買物は岩内の市街地に依存する。更に大きい買物だと小樽か札幌に出る。出稼ぎ先などはほぼ道内に限られ、東京との結びつきはそう強くないようである。

調査員の数と日数等を考え、調査は七・八区住民の全数調査とした。七・八区は島野の西南端で、昭和38年10月の雷電国道開通までは行き止まりになっていた所である（山中を通る細い道は通じており、ニシン漁全盛期にはかなり使われていたという。）市街地からは最も遠く、島野の中央部とはやや言葉が違うという人もあった。

住民票により、小学校三年以上の全員を対象とした。しかし転出・長期不在者（3人）、病気等による調査不能（5人）があった。更に1975年11月22日と1976年3月13・14日の調査期間中に勤務・旅行・留守等の事情で不能になった者（30名）もあり、結局調査できたのは225名であった。調査期間を延長すれば調査可能と思われる30名の性と生年は次のようである。若年層が大幅に欠けた。

	明治	大正	戦前	戦後	小中学生	計
男	1	4	5	5	1	16
女	2	3	3	6	0	14
計	3	7	8	11	1	30

調査項目は次のように選定した。日本言語地図（LAJ）¹⁾や岩手県零石²⁾、下北半島³⁾、『共通語化の過程』⁴⁾等の調査票と岩内町の小方言集⁵⁾をもとに老若数人の言葉を調べ、三つ以上の語形の出て来そうな語彙を選んだ。（文法項目では二形のものも含めた。）方言形と全国共通

1) 国立国語研究所『日本言語地図Ⅰ～Ⅵ』（大蔵省印刷局、昭和41～昭和49）。

2) 昭和48・49年に東大言語学研究室で行なった合同調査。

3) 昭和38・39年に九学会連合同調査で言語地理学班の行なった調査。cf.『下北——自然・文化・社会——』（平凡社、昭和42）

4) 国立国語研究所報告27『共通語化の過程——北海道における親子三代のことは——』（秀英出版、昭和40）

5) 「岩内地方漁家方言集」（『創立七十周年記念誌』、岩内郡漁業協同組合、昭和48）

語形の二形の交代では、わかりきった関係しか出て来ないと考えたからである。

また住民は改まった場面ではふだんと別の語形を使うこともあり、ふだんの言葉だけを尋ねるのではレパートリーを尽くしていないし、変化、共通語化という観点からも重要な局面を見逃すことになる。かくて「校長先生と話す時に使う言葉」をも調べた。

語彙9項目はナゾナゾ式で聞いた。文法5項目は困難を慮って、いわゆる Yes-No 式(場面毎に予想形をあげ、使うか否かを聞く)を採用した。なお3月の調査ではイカ・ヒシガタという音韻項目も追加した。他に方言意識、コミュニケーション行動、社会的属性等に関する項目も入れた。調査所要時間は平均 21.4 分(最頻値 20 分)であった。末尾に第2回目(3月)の調査票を示す。番号の下のエとはさし絵使用を示す。

調査員は井上および北大文学部の学生(阿部嘉隆、石川奈保子、大久保貴栄、切替英雄、小森陽一、斎藤昌子、須田敏彦、千船茂樹、椿原俊幸、東谷篤、橋場幸市、長谷川美代子、Gregg Pringle、向井美子)および札幌大学女子短大部の学生(高瀬悦子、中村美雪)である。1975 年 11 月 22 日は小・中学生の集合面接調査の後、父兄の訪問面接調査を行ない、1976 年 3 月 13・14 日はその他の家庭の訪問面接調査を行なった。

得られた結果は北大大型計算機センターにおいてプログラムパッケージ SPSS により処理した。また荻野綱男氏提供の GLAPS をも利用した(後述)。

2. 被調査者の非言語的条件

まず調査できた 225 名の非言語的条件を明らかにしておこう。生年と性の関係を見ると次のようである。(図 2-1)。この稿では年齢層を、小中学生、戦後生れ、戦前生れ、大正生れ、明治生れに五分した。(小中学生とは便宜上の名で、実際には生年を基準にしたため、卒業した者を一人含む。)年齢層の幅が 8 年、14 年、19 年、14 年、22 年と一定しない欠点はあるが、機械的に 10 年(15 年)間隔にすると、人数にバラつきが出て信頼できない層が出て来る恐れがあったからである。第 4 章以下のグラフ化に際しては、戦後生れと小中学生の間隔を半分にした。

以下に他の社会的属性を示すが、島野では言葉の年齢差がかなり大きく、一方社会的属性の中にも年齢と強く関係するものがあるので、上記五年齢層で区分したクロス集計を示す。

- (1) 性 戦前生れはやや女性が多いが、大して違いはない。
- (2) 生地 合計で島野生れが 2/3 を占める。他も道南(小樽以南)出身である。その他の出身(多くは青森等東北地方)は 1 割にも満たない。
- (3) 小学校 小学校を過ぎた場所だと、更に島野に固まる。
- (4) 上級学校 7 年以上の教育を受けた者の通った所は島野以外(「道南」)が大部分であるが、

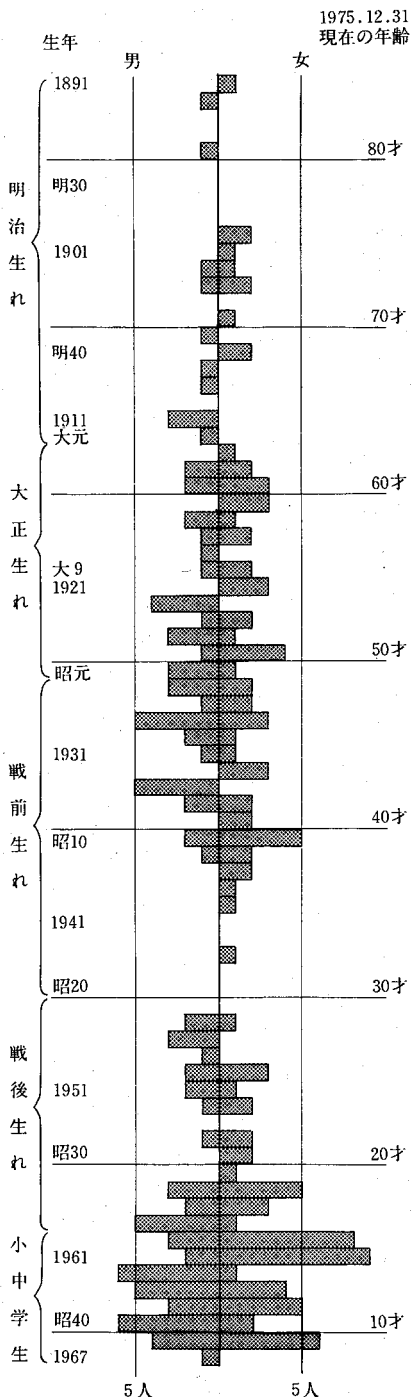


図2-1 被調査者の年齢構成

実はその大部分は岩内町内である。進学しない者（「島野」の項）もあり、全体としては島野の外に余り出ていないことになる。

(5) 父 父親の出身地は約 2/3 が島野。年長者ほど道南以外が増える。それでも明治生れの者の道南以外出身の父親は約 2/5 に過ぎない。道南以外の大部分は東北地方である。

(6) 母 母の出身地は半数近くが道南である。岩内町内が圧倒的に多く、倶知安・京極・長万部・積丹半島方面がそれに次ぐ。その他とは大部分が東北地方である。

(7) つれあい(妻) 男性側の答を見る。妻は半数以上が道南である。

(8) つれあい(夫) 女性側の答を見る。夫はほとんどが島野出身である。お嫁さんは少ない。(第6・7章の集計ではつれあいの性別を区別しない。)

(9) 島野世代 島野を基準にした世代である。本人が小学校卒業以降島野に来て、父母はよそ出身というのが一世、生地か小学校かが島野なのは一・五世、本人の生地、小学校とも島野で、両親は島野以外出身（来住）というのが二世、片親が島野出身なら二・五世、本人も両親も島野出身というのが三世とした。三世と二・五世の中には数代続いて島野という者も含まれる。お嫁さんが多いせいで、年長者には一世の割合が多い。二・五世はことに若い者に多い。(なお二世の大部分は男である。)

道南浜ことばにおける共通語化のパターン分類 井上

人数 列% (横) 行% (縦)	計	(1) 性		(2) 生 地			(3) 小 学 校			島 野
		男	女	島 野	道 南	その他	島 野	道 南	その他	
明治生れ 1 1891—1912	21 9.4	11 52.4 10.4	10 47.6 8.4	14 66.7 9.1	6 28.6 12.2	1 4.8 4.8	15 71.4 9.1	5 23.8 10.9	1 4.8 7.1	20 95.2 14.8
大正生れ 2 1913—1926	46 20.5	21 45.7 19.8	25 56.5 21.0	25 54.3 16.2	16 34.8 32.7	5 10.9 23.8	25 54.3 15.2	17 37.0 37.0	4 8.7 28.6	43 93.5 31.9
戦前生れ 3 1927—1945	50 22.3	22 44.0 20.8	28 56.0 23.5	23 46.9 14.9	16 32.7 32.7	10 20.4 47.6	23 46.0 13.9	18 36.0 39.1	9 18.0 64.3	30 60.0 22.2
戦後生れ 4 1946—1959	43 19.2	22 51.2 20.8	21 48.8 17.6	37 86.0 24.0	5 11.6 10.2	1 2.3 4.8	37 86.0 22.4	6 14.0 13.0	— — —	2 4.7 1.5
小中学生 5 1960—1967	65 29.0	30 46.2 28.3	35 53.8 29.4	55 84.6 35.7	6 9.2 12.2	4 6.2 19.0	65 100.0 39.4	— — —	— — —	40 61.5 29.6
計	225 100.0	106 47.1	119 52.9	154 68.7	49 21.9	21 9.4	165 73.3	46 20.4	14 6.2	135 60.0
無 記 入		0		1			0			

人数 列% (横) 行% (縦)	計	(8) つれあい(夫)			(9) 島 野 世 代					
		島 野	道 南	その他	一 世	一・五世	二 世	二・五世	三 世	一 世
明治生れ 1 1891—1912	21 9.4	8 80.0 13.1	2 20.0 28.6	— — —	6 28.6 10.5	1 4.8 6.2	5 23.8 38.5	6 28.6 5.6	3 14.3 10.0	1 4.8 10.0
大正生れ 2 1913—1926	46 20.5	20 80.0 32.8	4 16.0 57.1	1 4.0 100.0	20 43.5 35.1	2 4.3 12.5	4 8.7 30.8	13 28.3 12.0	7 15.2 23.3	3 6.5 30.0
戦前生れ 3 1927—1945	50 22.3	28 100.0 45.9	— — —	— — —	26 53.1 45.6	1 2.0 6.2	1 2.0 7.7	15 30.6 13.9	6 12.2 20.0	6 12.2 60.0
戦後生れ 4 1946—1959	43 19.2	5 100.0 8.2	— — —	— — —	5 11.6 8.8	2 4.7 12.5	— — —	28 65.1 25.9	8 18.6 26.7	— — —
小中学生 5 1960—1967	65 29.0	— — —	— — —	— — —	— — —	10 15.4 62.5	3 4.6 23.1	46 70.8 42.6	6 9.2 20.2	— — —
計	225 100.0	61 89.7	6 8.8	1 1.5	57 25.4	16 7.1	13 5.8	108 48.2	30 13.4	10 4.5
無 記 入		157			1					

(4)上級学校		(5) 父			(6) 母			(7)つれあい(妻)		
道 南	その他	島 野	道 南	その他	島 野	道 南	その他	島 野	道 南	その他
1	—	8	5	8	4	7	10	4	4	3
4.8	—	38.1	23.8	38.1	19.0	33.3	47.6	36.4	36.4	27.3
1.2	—	5.8	15.2	16.0	8.7	5.9	17.9	26.7	11.4	30.0
3	—	18	12	15	13	19	14	4	12	4
6.5	—	40.0	26.7	33.3	28.3	41.3	30.4	20.0	60.0	20.0
33.5	—	12.9	36.4	30.0	28.3	16.0	25.0	26.7	34.3	40.0
17	3	25	7	17	7	26	15	7	12	3
34.0	6.0	51.0	14.3	34.7	14.6	54.7	31.2	31.8	54.5	13.6
19.8	75.0	18.0	21.2	34.0	15.2	21.8	26.8	46.7	34.3	30.0
40	1	34	5	4	13	25	4	—	6	—
93.0	2.3	79.1	11.6	9.3	31.3	59.5	9.5	—	100.0	—
46.5	25.0	24.5	15.2	8.0	28.3	21.0	7.1	—	17.1	—
25	—	54	4	6	9	42	13	—	—	—
38.5	—	84.4	6.2	9.4	14.1	65.6	20.3	—	—	—
29.1	—	38.8	12.1	12.0	19.6	35.3	23.2	—	—	—
86	4	139	33	50	46	119	56	15	34	10
38.2	1.8	62.6	14.9	22.5	20.8	53.8	25.3	25.4	57.6	16.9
0		3			4			166		

(10) 道 南 世 代				(11) 学 歴			(12) 学 歴 × 学 制			
一・五世	二 世	二・五世	三 世	6年以下	7～9年	10年以上	旧制低	旧制高	新制低	新制高
—	4	8	8	11	9	—	11	10	—	—
—	19.0	38.1	38.1	55.0	45.0	—	52.4	47.6	—	—
—	25.0	16.0	5.9	15.3	7.2	—	28.9	15.6	—	—
3	5	12	23	17	28	1	17	29	—	—
6.5	10.9	26.9	50.0	37.0	60.9	2.2	37.0	63.0	—	—
25.0	31.2	24.0	16.9	23.6	22.4	3.7	44.7	45.3	—	—
4	4	12	23	11	37	2	10	25	14	1
8.2	8.2	24.5	46.9	22.0	74.0	4.0	20.0	50.0	28.0	2.0
33.3	25.0	24.0	16.9	15.3	29.6	7.4	26.3	39.1	41.2	4.2
1	—	8	34	—	20	23	—	—	20	23
2.3	—	18.6	79.1	—	46.5	53.5	—	—	46.5	53.5
8.3	—	16.0	25.0	—	16.0	85.2	—	—	58.8	95.8
4	3	10	48	33	31	1	—	—	—	—
6.2	4.6	15.4	73.8	50.8	47.7	1.5	—	—	—	—
33.3	18.7	20.0	35.3	45.8	24.8	3.7	—	—	—	—
12	16	50	136	72	125	27	38	64	34	24
5.4	7.1	22.3	60.7	32.1	55.8	12.1	16.9	28.4	15.1	10.7
1				1						

道南浜ことばにおける共通語化のパターン分類 井上

人数 列% (横) 行% (縦)	計	(12)学歴×学制		(13) 職 業						(14)役員 無
		在・低 小学生	在・高 中学生	漁 業	農 業	二・三 次産業	ホワイ カラー	在学中	主 婦	
明治生れ 1 1891—1912	21 9.4	— — —	— — —	14 66.7 23.3	1 4.8 7.7	— — —	— — —	— — —	6 28.6 16.7	9 45.0 7.0
大正生れ 2 1913—1926	46 20.5	— — —	— — —	18 40.9 30.0	7 15.9 53.8	2 4.5 9.1	3 6.8 20.0	— — —	14 31.8 38.9	24 52.2 18.6
戦前生れ 3 1927—1945	50 22.3	— — —	— — —	22 44.9 36.7	5 10.2 38.5	8 16.3 36.4	2 4.1 13.3	— — —	12 24.5 33.3	24 48.0 18.6
戦後生れ 4 1946—1959	43 19.2	— — —	— — —	6 14.0 10.0	— — —	11 25.6 50.0	10 23.3 66.7	12 27.9 15.8	4 9.3 11.1	32 74.4 24.8
小中学生 5 1960—1967	65 29.0	33 50.8 100.0	32 49.2 100.0	— — —	— — —	1 1.5 4.5	— — —	64 98.5 84.2	— — —	40 70.2 31.0
計	225 100.0	33 14.7	32 14.2	60 27.0	13 5.9	22 9.9	15 6.8	76 34.2	36 16.2	129 59.7
無 記 入			0						3	

人数 列% (横) 行% (縦)	計	(18) 他 出 年 数			(19) 区	
		1 年未満	1～3 年	4 年以上	7 区	8 区
明治生れ 1 1891—1912	21 9.4	12 57.1 8.4	1 4.8 3.0	8 38.1 16.3	13 11.8 61.9	8 7.0 38.1
大正生れ 2 1913—1926	46 20.5	12 26.1 8.4	13 28.3 39.4	21 45.7 42.9	23 20.9 50.0	23 20.0 50.0
戦前生れ 3 1927—1945	50 22.3	25 50.0 17.5	10 20.0 30.3	15 30.0 30.6	20 18.2 40.0	30 26.1 60.0
戦後生れ 4 1946—1959	43 19.2	31 72.1 21.7	9 20.9 27.3	3 7.0 6.1	23 20.9 53.5	20 17.4 46.5
小中学生 5 1960—1967	65 29.0	63 96.9 44.1	— — —	2 3.1 4.1	31 28.2 47.7	34 29.6 52.3
計	225 100.0	143 63.6	33 14.7	49 21.8	110 48.9	115 51.1
無 記 入			0		0	

経 験	(15) 岩内への行き来 (月に)				(16) 岩内以外の人との話 (月に)			(17) 他 出 経 験		
有	0～9回	10回台	20回台	30回以上	1回未満	1～3回	4回以上	なし	道 南	その他
11	9	4	1	5	7	5	8	9	2	10
55.0	47.4	21.1	5.3	26.3	33.3	23.8	38.1	42.9	9.5	47.6
12.6	20.5	7.4	2.4	6.1	11.3	6.2	10.8	6.6	5.4	21.7
22	6	15	6	19	12	18	14	11	20	15
47.8	13.0	32.6	13.0	41.3	26.1	39.1	30.4	23.9	43.5	32.6
25.3	13.6	27.8	14.6	23.2	19.4	22.2	18.9	8.0	54.1	32.6
26	11	14	8	16	17	16	15	24	10	12
52.0	22.4	28.6	16.3	32.7	34.0	32.0	30.0	52.2	21.7	26.1
29.9	25.0	25.9	19.5	19.5	27.4	19.8	20.3	17.5	27.0	26.1
11	2	6	8	27	11	11	20	32	4	6
25.6	4.7	14.0	18.6	62.8	25.6	25.6	46.5	76.2	9.5	14.3
12.6	4.5	11.1	19.5	32.9	17.7	13.6	27.0	23.4	10.8	13.0
17	16	15	18	15	15	31	17	61	1	3
29.8	25.0	23.4	28.1	23.4	23.8	49.2	27.0	93.8	1.5	4.6
19.5	36.4	27.8	43.9	18.3	24.2	38.3	23.0	44.5	2.7	6.5
87	44	54	41	82	62	81	74	137	37	46
40.3	19.9	24.4	18.6	37.1	27.8	36.3	33.2	62.3	16.8	20.9
9				4			8			5

	(20) 職 業 × 学 歴 (× 学 制)									計
	漁 業	農 業	製造業	店 員	ホワイト カ ラ ー	在学中	洋裁等	主 婦	無回答	
旧制低	12	7	3	1	—	—	11	3	1	38
	31.6	18.4	7.9	2.6	—	—	28.9	7.9	2.6	
	20.0	53.8	18.7	16.7	—	—	50.0	21.4	33.3	16.9
旧制高	37	5	3	1	4	—	9	4	1	64
	57.8	7.8	4.7	1.6	6.2	—	14.1	6.2	1.6	
	61.7	38.5	18.7	16.7	26.7	—	40.9	28.6	33.3	28.4
新制低	11	1	10	3	2	—	1	5	1	34
	32.4	2.9	29.4	8.8	5.9	—	2.9	14.7	2.9	
	18.3	7.7	62.5	50.0	13.3	—	4.5	35.7	33.3	15.1
新制高	—	—	—	—	9	12	1	2	—	24
	—	—	—	—	37.5	50.0	4.2	8.3	—	
	—	—	—	—	60.0	15.8	4.5	14.3	—	10.7
小学生	—	—	—	—	—	33	—	—	—	33
	—	—	—	—	—	100.0	—	—	—	
	—	—	—	—	—	43.4	—	—	—	14.7
中学生	—	—	—	1	—	31	—	—	—	32
	—	—	—	3.1	—	96.9	—	—	—	
	—	—	—	16.7	—	40.8	—	—	—	14.2
計	60	13	16	6	15	76	22	14	3	225
	26.7	5.8	7.1	2.7	6.7	33.8	9.8	6.2	1.3	100.0

- (10) 道南世代 上の「島野」を「道南」とひろげた時の世代。いわゆる「北海道～世」というのに近い考え方だが「浜ことば」の範囲内を基準にした。道南はの場合小樽以南とした。今度は一世は大変少ない。大部分が三世である。北海道内陸部にくらべ定住の歴史の古さがかがわれる。
- (11) 学歴 単純に6年以下、7～9年、10年以上とわけると、最近になるほど高学歴になることがわかる（「小中学生」の層に一人高校（一年）生が入っている。）
- (12) 学歴×学制 新制中学校を卒業できたかどうかで1935年以前出生の者を別枠にし更に小中学生（1960年以降出生）も別にして集計すると表のようになる。1935年以前出生の者（「旧制」と呼ぶ）は6年以下（低学歴）と7年以上（高学歴）に分けた。1936～1959年出生の者（「新制」と呼ぶ）は9年以下（低）と10年以上（高）に分けた。新制の高学歴とは高校在学中または高校卒であり、大部分が戦後生れである。1960年以降出生の者は6年以下（低学歴）と7年以上（高学歴）に分けたが、実質は低学歴とは小学生、高学歴とは中学生である。
- (13) 職業 これも年齢層と大いに関係がある。農業は大正生れに、二・三次産業やホワイトカラーは戦後生れに多い。漁業と主婦は中年以上の世代に万遍なく散らばる。職業の分類は、余り数の少ないカテゴリーがあつては後の社会的属性毎の分析でかたよった結果を生む恐れがある。島野での実情にあわせ、第二次産業と第三次産業の一部を統合する一方、ホワイトカラーを別にし、漁業と農業は分離した。
- (14) 役員経験 表では役員経験の有無で二分した。学校での役員は原則として「長」の経験者に限った。若者は学校時代の役員経験に言及しないので、役員経験が少なくなってしまう。
- (15) 行き来 1ヶ月に岩内の市街地に行く平均回数を聞いた。0～9回、10回台、20回台、30回以上にわけた。老人は余り町に出ない。高校生を含む戦後生れの者はひんばんに町に出る。なお、冬はほぼ毎日加工場に行くという主婦等は一年にならした回数を答えてもらった。
- (16) 話 岩内町以外の人と話す機会の多さを見た。個人差が大きい。1ヶ月平均1回未満、1～3回、4回以上に分けた。後に見るように、共通語化と余り高い相関を示さない。相手により共通語を使うか否かは、岩内町の人か否かでなく、島野（または顔見知り）の人か否かである。この設問はむしろ「島野以外の人と話す機会」についてにすべきだった。
- (17) 他出経験 3ヶ月以上よその土地に住んだことがあるか否かを尋ね、その地域を道南とその他に分けた。出稼ぎなどもしない人が多い。
- (18) 他出年数 他出した年数である。1年未満、1～3年、4年以上に分けた。4年以上の長期にわたる者が大正生れの者に多い。
- (19) 区 区による年齢構成の違いがある。他の違いについては後述する。
- (20) なお末尾に示すように職業と学歴も大いにからみ合う。職業分類はまとめる前のを示す。学歴は学制とクロスさせたものを用いる。

3. 島野の言語意識

島野で話されているのは、いわゆる「浜ことば」である¹⁾。つまり、音韻・アクセント・文法・語彙のすべての点から東北方言の区画に入れるべき方言である。自然会話の観察によれば、若い世代の者が改まった場面で口にする場合を除き、母音〔i, e, u〕が用いられ、カ行タ行の子音は一定環境で有声化する。また東北的な文法的特徴も多く現われる。しかし若い層（ことに女性）のふだんの言葉や老人の外来者への言葉では、上記の母音や有声化は残るが、鼻音化がなく、連母音の融合もなく、文法的にも語彙的にもかなり〔北海道〕共通語的になる。

以下では語彙・文法現象が考察対象なので、音声記号の使用は避け、ただ、必要に応じカ行鼻音を[・]印つきのカ行のカタカナで表わすこともある。

まず、住民が自分たちの言葉をどうとらえているかを、考察しよう。

(1) 方言評価

島野のことばの改新にあるいは影響があるかと思い、周囲の方言の評価を求めた。質問文は「日本のあちこちのことば（方言）のうち、標準語を使うものに10点、標準語から一番遠いことば（方言）に0点をやると、次のことばは何点位ですか」。点数を視覚化した付図を見せた。なお「共通語」はまだ耳慣れない用語なので、使わなかった。図3-1の地名の上の番号は、調査においてあげた地名の順序である（平均点によって地名の順序を入れかえた。）かなり調査時間のかかった人も居た。NR（無回答）の数も多い。難しかったようだ。地名をカード化して、順に並べさせるとか、ペアを作っておいて「どちらの言葉がいいか」尋ねるという方法がよかったかもしれない。

NRを除いた回答者について、層別に平均点を算出した。東京－札幌、倶知安－岩内を除き、ほとんどの人の評価の順序は一致している。倶知安は「山ことば」で、「浜ことば」より良いと

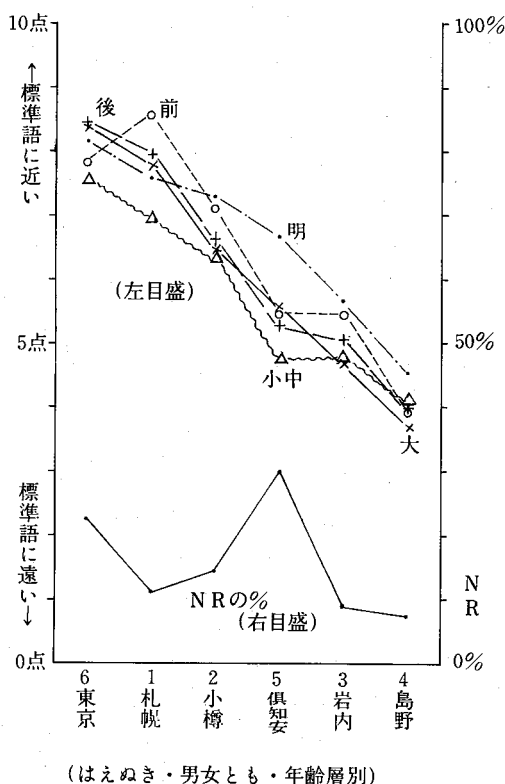


図3-1 方言評価

1) 石垣福雄『日本語と北海道方言』（北海道新聞社、昭51）が手頃な入門、概説書である。

されることが多い。岩内は「マチ」の言葉で島野より良い。小樽は漁師が多いから札幌より乱暴だとの説明があった。島野の言葉の平均点数は東京や札幌の半分にしかすぎない。このような評価意識はかなりの人が共通して持っているようである。

興味深いのは東京と札幌の関係である。(図3-2)。東京より札幌の方が標準語に近いと答えた人が40人、同じ点を与えた人が50人も居る。

いわゆる標準語への近さが東京弁と同じかそれ以上と評価されるような方言は、全国にそう多くはないはずである。北海道の特殊性とも言えようか。(なお、別に調査した札幌の短大生の評価の平均点では、標準語に近い側に東京と札幌があり遠い側には京都≡大阪>浜言葉>東北弁の順に並ぶ。)[北海道では標準語が使われている]とか「札幌のことばは東京よりも良い」というような説は、一時道内に流布したものらしい。

(2) 使いわけ意識

話者自身が場面によって標準語と方言をどう使いわけてい
るかを尋ねた。質問文は「自分のふだんのことば使いを標準語だけ〔5〕から方言だけ〔1〕まで五つ(の段階)に分けるとしたらどのへんになりますか」。家の中、近所の知り合い(友達)、島野でもよく知らない人、旅の人・よその人、校長先生と校長室で話す時、テレビスタジオでアナウンサーと話す時、札幌で道をきく時の七場面毎に段階を答えてもらった。「3と4の中間」とか、「もう少し4に近い」などと答えた者もあり、3.5とか3.7の点数を与えた。

図3-3と図3-4は、使いわけ意識を平均点に直さず、直接、回答者の割合を図化した。

場面1、2(家と顔見知り)の点数はほぼ同じで、「3島野でもよく知らない人」の場面でぐんとはねあがる。方言を使うか使わないかは、相手にわかるか否かではなくて、相手との心理的距離によって規制されると考えられる。つまり文体差、ひいてはていねいさと結びつくもので、敬語とも非常に近い関係にあるのだろう。

使いわけ意識については先行の調査結果があるが²⁾、四場面(図3-3、3-4の点線より上の

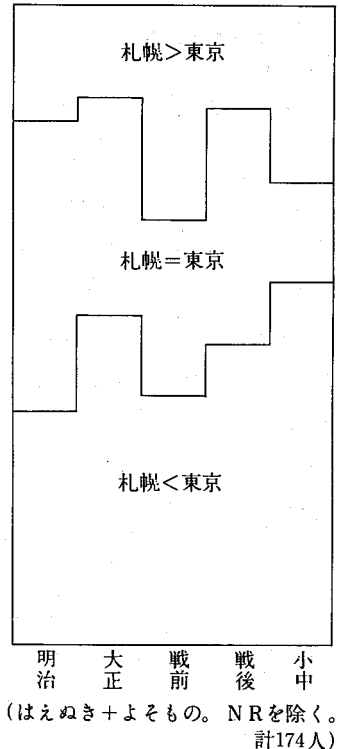


図3-2 方言評価(札幌と東京)

2) 国立国語研究所報告52『地域社会の言語生活——鶴岡における20年前との比較——』(秀英出版、昭49) p. 160

小野米一「相手によることばの使い分け——北海道の集団入植地での調査から——」国語の研究9号(昭50)

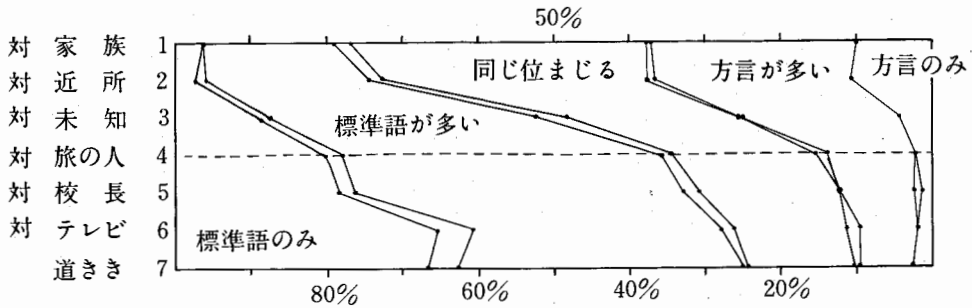


図3-3 使いわけ意識 (はえぬき)

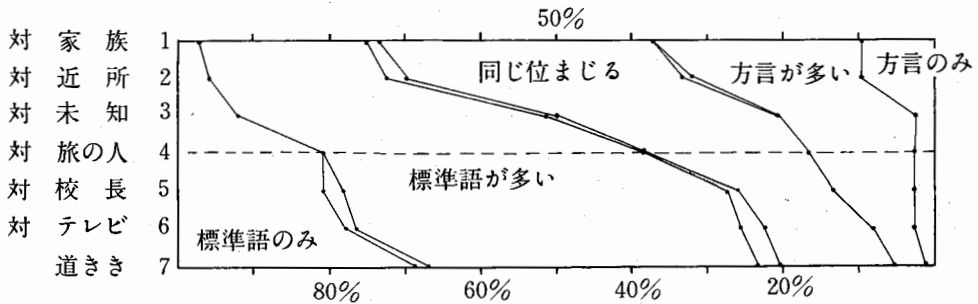


図3-4 使いわけ意識 (よそもの)

部分), 三段階のものであり, 単純な比較はできない。仮に「標準語」を使うと意識する者の割合をくらべると, 豊頃村二宮>鶴岡 1972>鶴岡 1950>島野となり, 「方言のみ」の割合をくらべると豊頃村二宮≒島野<鶴岡 1972<鶴岡 1950 となる。島野の自己評価としては東北地方の中都市よりは共通語化しているが, 北海道内陸部ほどではない, となろうか。

平均点を年齢層別に見ると (図3-5), 大体1~7の場面の順に並ぶ。校長での場面が旅の人よりさがるのは明治・大正生れの者に多い。これは校長をどう見るか (地元出身の, 年下の者) が関係するのだろう。(後の語彙項目で, 家と校長の二場面で聞いたのは, この点では不十分だった。調査はしにくいがテレビに出演する時という質問法も可能である。) また札幌での道ききの点数は小中学生や戦後生れでやや低くなる。札幌の言葉への評価が関わるのだろう。

五年齢層の平均点は, 1~4の場面では, 戦後>小中>大正>明治>戦前に順に並び, 上位と下位とで1点近い開きが出る。この内省=自己評価は, 後 (第7章) の語彙の (全国) 共通語化の点数とかなりよく一致する。話し手は自分の言葉の共通語化の程度を案外よく位置づけているようだ。また5~7の場面では小中学生・戦後のかたまりと, 戦前・大正・明治のかたまりに二分される。改まった場面での使いわけでは若い世代に自信があるようである。(これも後の分析と一致する。) なお性別をかみ合わせると (図3-6), 全場面 (ことに1, 2の場面)

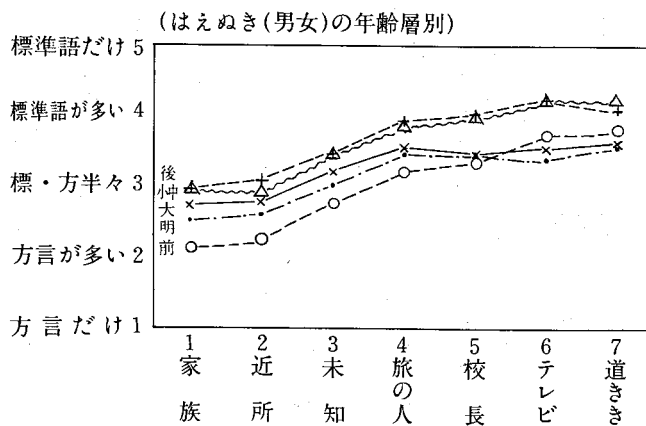


図3-5 使いわけ意識平均点

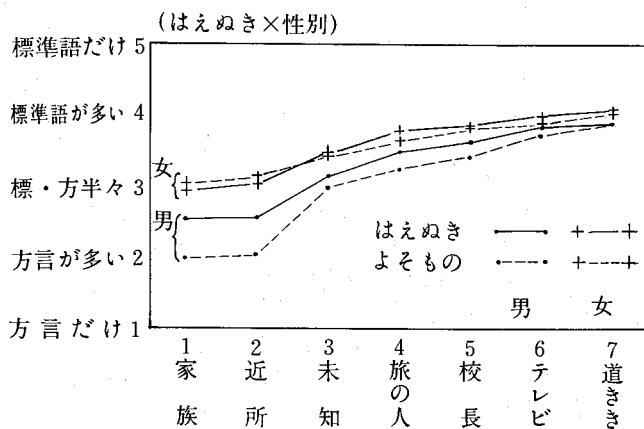


図3-6 使いわけ意識平均点

で女性の点数が高い。これも後の分析結果と一致する。

以上のほかに、七場面五段階の使いわけ意識を林の数量化理論第3類(後述)にかけて分析してみたが、ここでは略す。

4. 五場面による使いわけ

以上七場面に分けて住民の主観的な評価を分析してみた。そのうち五場面については、文体差・場面差のはっきりしていそうな「ごはんを食べた」と文末助詞「ナー・ネー」の具体例の使いわけを聞いている。まずこれについて考察しよう。

以下のグラフではすべて、話者をはえぬきの男(92名)、はえぬきの女(59名)、よその(男女)(74名)の三グループに分け、その中を前述の五年齢層にわけて図示する。はえぬきとは出生地も小学校も島野という者、よそのはそれ以外である(よそのは男が少ないため、性で細分しなかった。)1カテゴリーあたりの人数が小さくなる欠点はあるが、はえぬき、よそのでやや使用語の違うことが考えられるし、男女差もかなりありそうなので、統合した集計結果は示さない。

「ナー・ネー」と「ごはんを食べた」では、答の種類毎に五場面の答の割合を一枚の図に示した。また一人が二形(以上)を併用する時は、一形に0.5人(0.33人、0.25人)ずつ使用者が居ると見なして平均点を出した(第5章でも同様。)便宜上場面1, 2(家族, 近所)を低い場面(文体), 場面4, 5(旅の人, 校長)を高い場面(文体)と呼ぶことにする。

図4-1 a～d ナーとネー

調査の際付図に選択肢を示して、「ナーだけ使う」「ネーだけ使う」「両方使う」「どちらも使わない」の四つに分けて、各場面毎に答えてもらった。まず図4-1 a ナーのみ使用を見る。女はどの場面でも全く使用しない。男は、小中学生を除き低い場面でもかなり使うが、校長との場面ではほとんど使わない。ナーには男性語的かつ方言的ニュアンスがあるらしい。

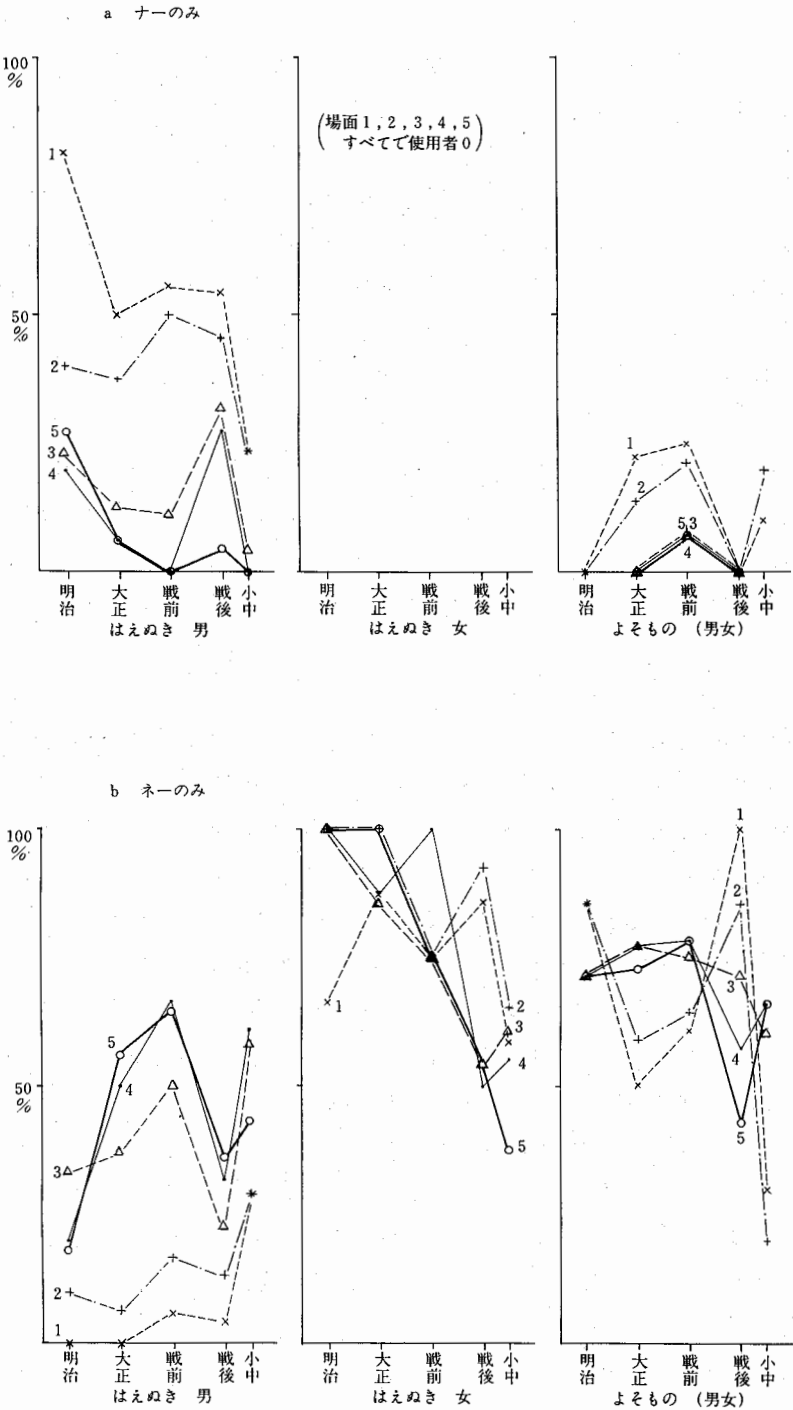
図4-1 b. ネーのみ使用というのは、反対に女性に非常に多い。男は高い場面ほどよく使うが、1, 2の低い場面では余り使わない。女性語的共通語的な語形らしい。

図4-1 c. ナーネー両方使うと答えた人も居る。男に多い。女も低い場面だと「両方使う」こともあるらしい。図4-1 d. 両方とも使わないという答は、高い場面に卓越する。また、若い女性に目立つ。共通語的な固苦しい場面で現われている。

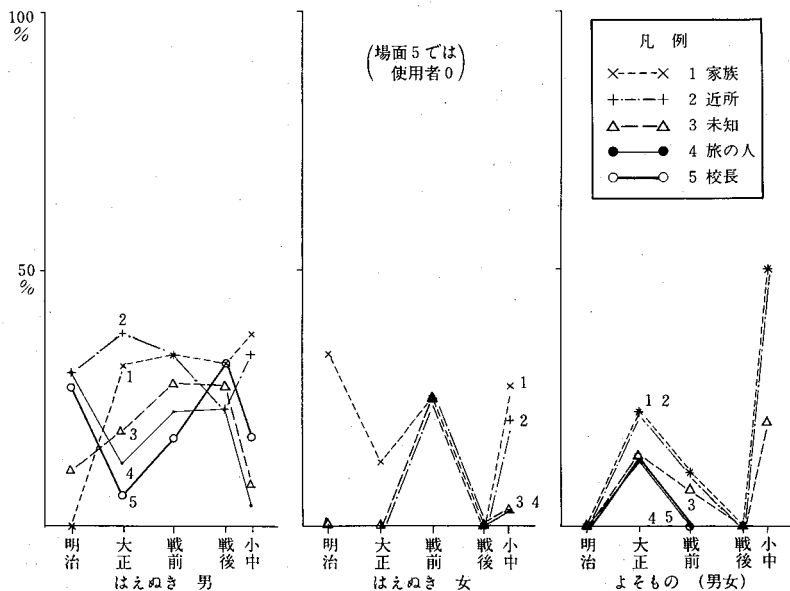
よその(図4-1 a～dの右端)は、はえぬきの男女をつきまぜたような傾向である。「ナーは津軽から来た人がよく使う」というコメントもあったが、ここでは必ずしもそうとは言えないようだ。なお、かつては「ノー」も使われたらしい。「^{フル}古宇郡の人はノーと言う」という情報もあった。島野ではほとんど使わないというので、選択肢から省いた。

全体を通じ、場面1, 2と3, 4, 5に分かれる傾向があった。そして、1と5とが極端な値を取るようである。

図 4-1 ナー・ネー



c ナー・ネー両方使う



d ナー・ネーを使わない

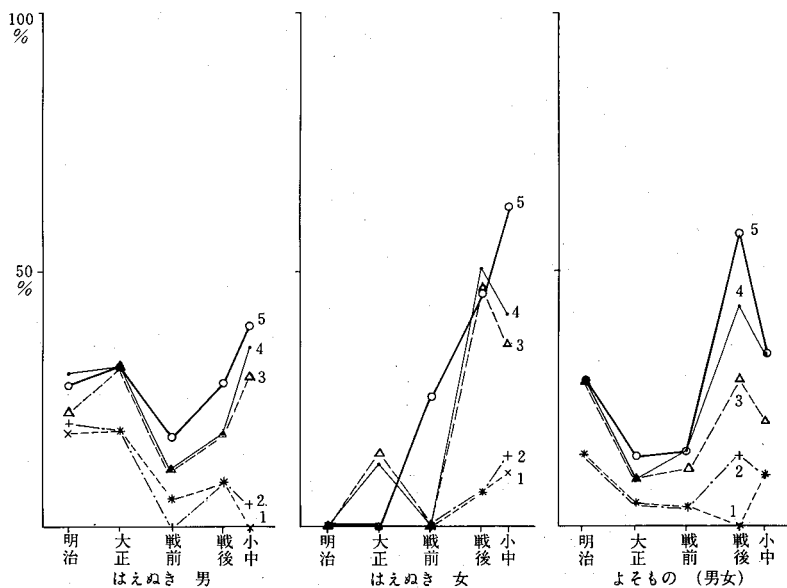
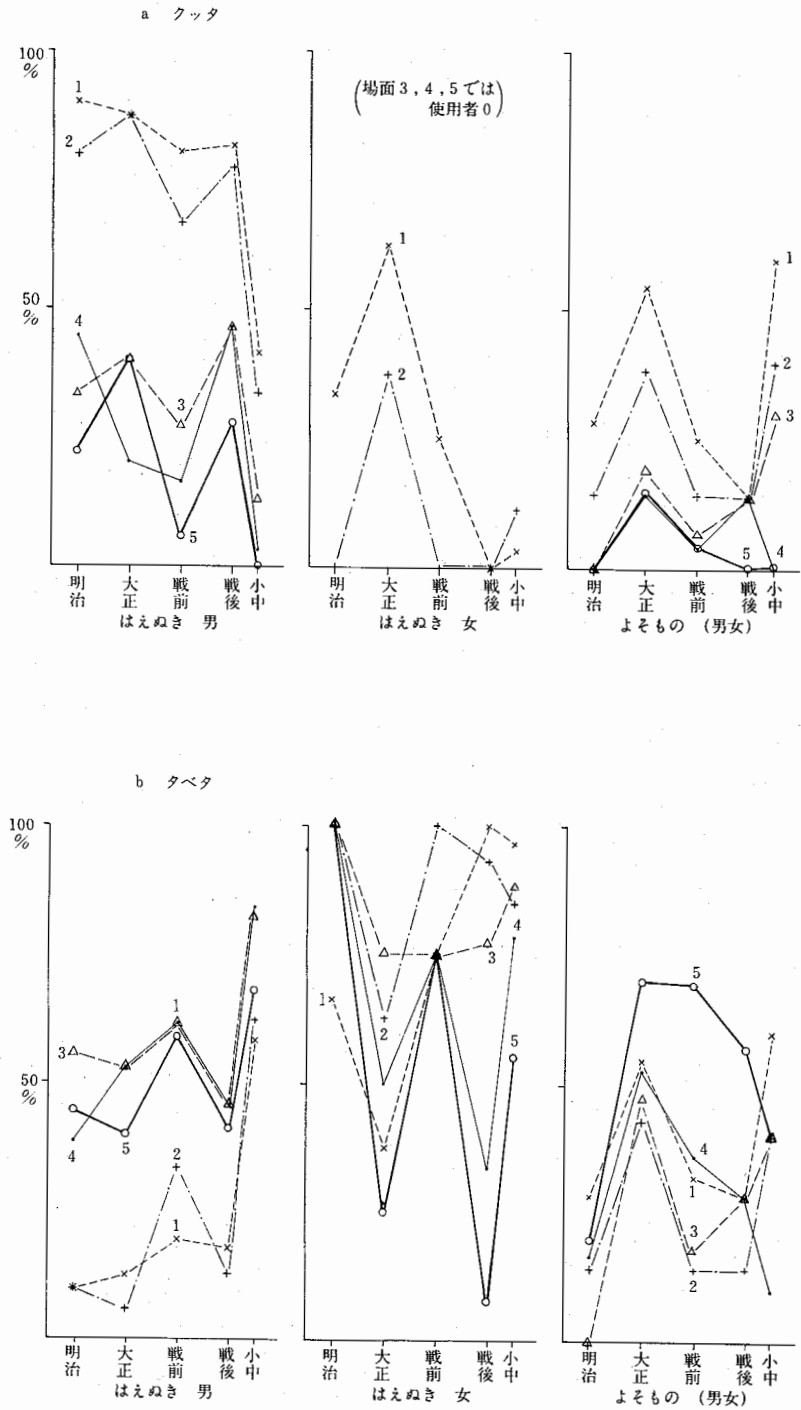


図 4-2 (ごはんを) 食べた



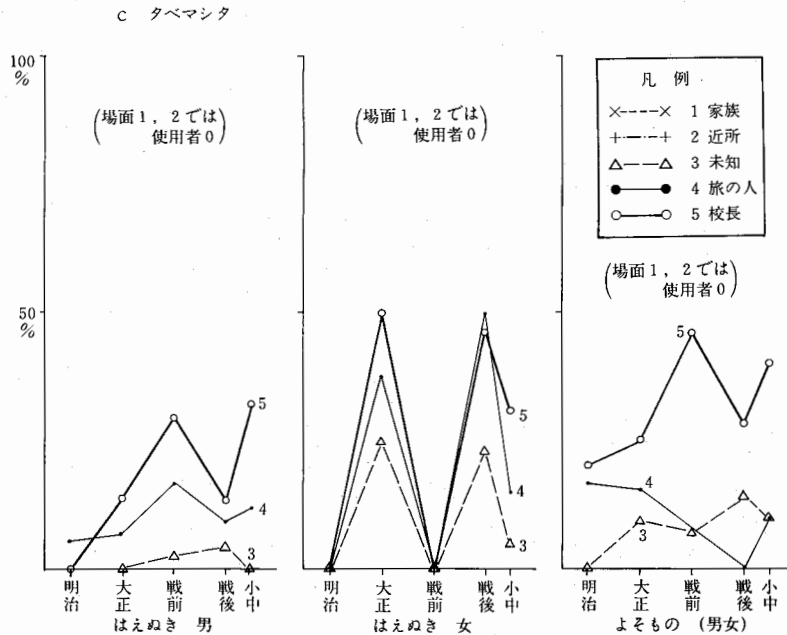


図4-2 a～c 食べた

次に「ごはんを食べた」の動詞部分を見よう。

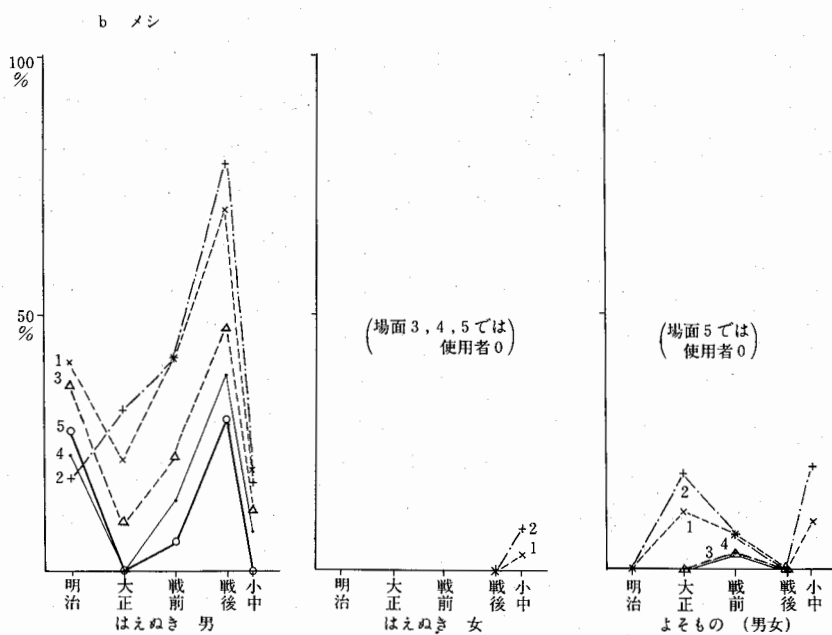
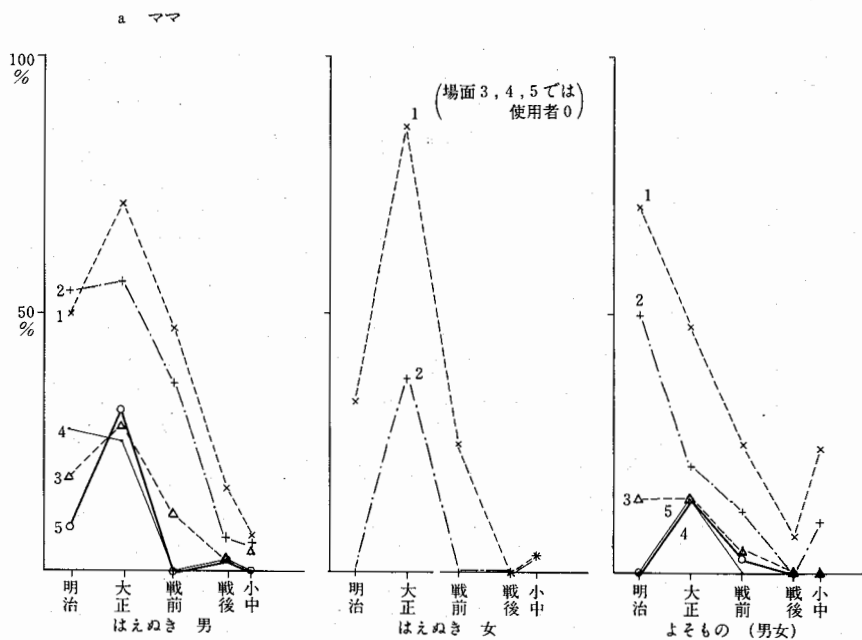
図4-2 a. クッタ 女は全年齢層で少ない。1, 2の場面でも中年の女が使う位で、3, 4, 5の場面では使う者が居ない。明治の女はもっと使うことが期待されるが、低い。サンプル数が少ないための歪みも考えられる。男は（ことに1, 2の場面）よく使うが、小中学生で急に減る。

図4-2 b. タベタ クッタのちょうどうら返しと言いたい。女でジグザグなのは次掲のタベマシタに食われているためだ。（なお第5章ではデスマス体の区別をしない。）タベタ、タベマシタを一緒にすればクッタのうら返しになる。男は（3, 4, 5の場面に多く）若で増える。

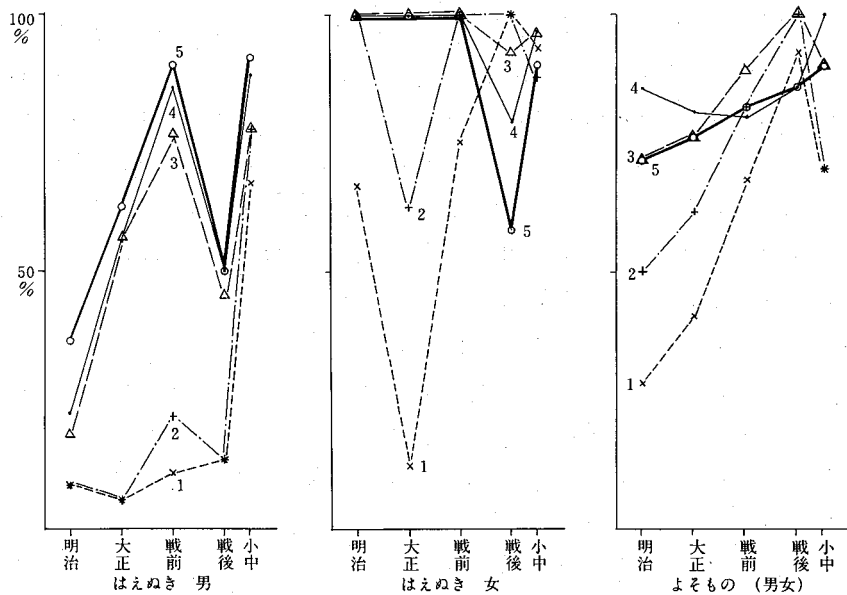
図4-2 c. タベマシタ 1, 2の場面ではデスマス体の答が全くない。場面が高いほど、年齢が若いほど、そして女性の方に、デスマス体が多い。

さて全体を見直すと、ここでも1, 2の場面が近く、3, 4, 5の場面と対立する。そして一般に1と5が両極端の値をとる。

図4-3 ごはんを(食べた)



c ゴハン(オ)



d ショクジ(オ)

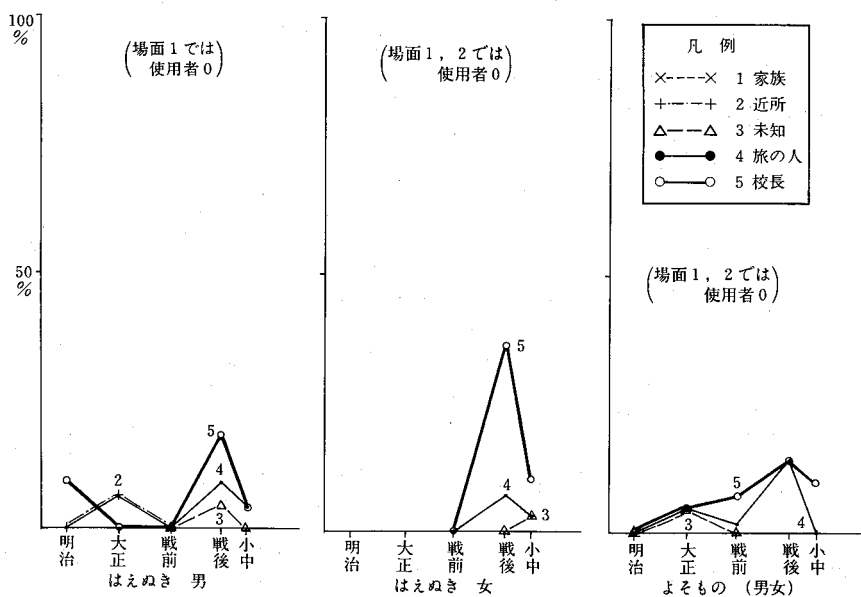


図4-3 a～d ごはんを

「ごはんを食べた」の名詞（＋助詞）部分である。まず図4-3 a. ママ。女性は中年の者が低場面で使うだけ。男は全場面で使用者が居るが、低場面の方が多い。年齢が下がるにつれ少なくなる。図4-3 b. メシは、女性は全くといっていいほど使わない。男は戦後生れの者の使用が特に目立つ。低場面ほど使用者が多い。図4-3 c. ゴハン（オ）の段階になってはじめて助詞オをつける者が出る。図化しないが、高い場面に限る。場面による差が男女とも非常に大きく、高い場面では相当使われるのに、低い場面での使用率は落ちる。戦後の男に少ないのは、さっきメシが多かったのとうら返しの関係である。図4-3 d. ショクジ（オ）は、高い場面でごく少数の人（ことに戦後生れの者）が使うのみである。

以上から、ママは古形、メシは男性語的な中興形、ゴハンは新形、ショクジはもっと改まった新形、と特徴づけることができる。場面1、2と場面3、4、5の違いが非常にはっきり出た。

さてこうしてみると、後に分析するように各語について、家の中の言葉と校長との言葉という二場面に分けて聞いたのは、そう的外れではなかったと言える。（テレビの場面の方がまじだったとも言えるが）。

5. 二場面の使いわけの性別・年齢別分布

次に、「家」「校長」の二場面に分けて得られた答を、個々にグラフに示し考察を加えよう。語彙・文法・音韻の順に記す。参考のために、LAJ（『日本言語地図』）、20年前の高校生における分布¹⁾、最近の道内出身短大生の分布²⁾をも記し、最後に島野の状況を道内全体の中に位置づける。なお、グラフには、人数の多い主な語形しか示さない。しかし他地域との関係を探るには少人数の答も重要な意味を持つので、注または別表の形でくわしく示すことにする。第4章と違い、場面毎に語形を示す。

図5-1 つめたい

（注）グラフで省略した語形（以下「省略語形」） ツベタイ（家、生え抜きの男：明治生れ1名）

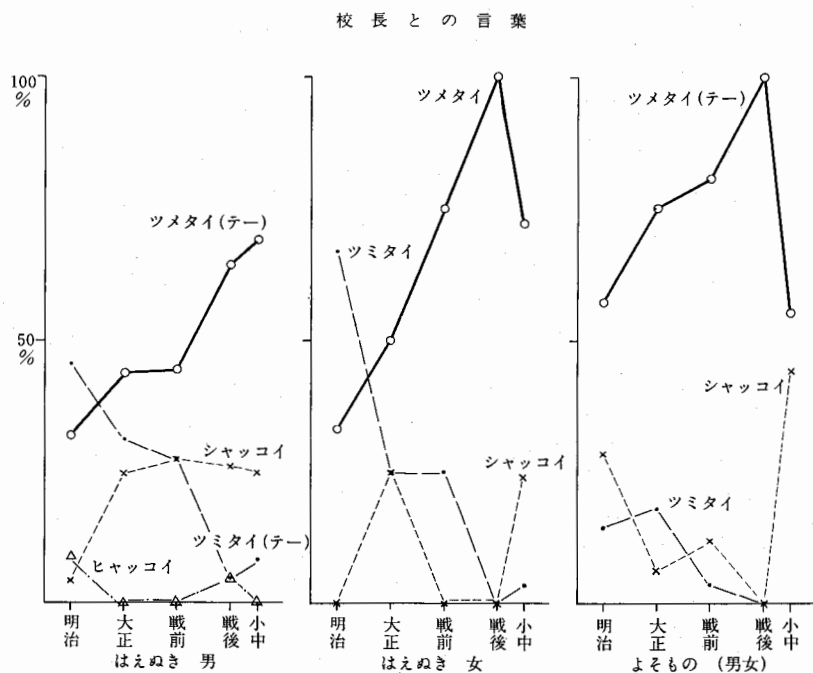
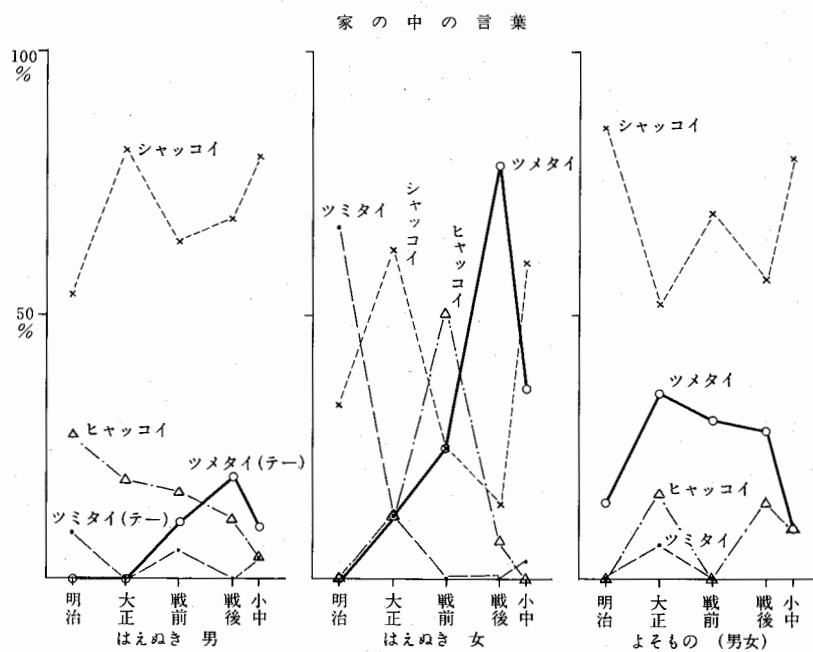
家の中のことばと校長のことばとの場面差が著しい。校長の場面で多くなるツメタイ・ツミタイは文体的に高い語と見うる。女性（ことに若い女性）での共通語化が進んでいる。

ツミタイは、聞き違いではなく、確かに一部の人に用いられる形である。誤った標準語形ま

1) 第1章注4)の文献の「高校調査」。

2) 昭和50年5月、札幌大学短大文科の1、2年生147名の調査結果。

図 5-1 つめたい



たは地方共通語形としてかつて用いられ、今は全国共通語形ツミタイに置きかわりつつある語形である。

連母音融合形(ツメテー、シャッケ)は、男だけ、各年齢層 10%位の人が答えたのみであり、若い方でやや増える傾向が見られた。(グラフでは非融合形と統合した。)日常の会話ではもっと多く現われると思われるが、調査の場面では出にくいようである。

女性のグラフでは、ピークが年齢的にシャッコイ→ハッコイ→ツメタイ(→シャッコイ)ときれいに移行している。明治生れの女性の実数は3人だけであり、ツミタイが本当に優勢とは思えない。以下の項目でもこの層には同様の用心が必要である。また小中学生では「共通語化のおくれ³⁾」が見られる。これも以下の項目で折々見られる。このように、年齢層によることばの違い(使用率の違い)が常に言語変化の順序と一致するとは限らない。

北海道(の浜ことば)では、ヒ(ヒャ・ヒュ・ヒョ)の子音が〔ʃ〕に近くなる傾向があり、(シとスが統合する場合を除き)ヒがシと発音される傾向がある。ハッコイは札幌市内の広告にもややふざけて使われることがあり、語源としての「冷やっこい」と結びつきやすいこともあり、回帰した形と見るべきだろう。しかし島野のハッコイは、後述のように古形と見るべきだろう。シャッコイが後に盛んになった形であろう。

LAJにはこの項目はない。『日本国語大辞典』(小学館)によればハッコイは北海道・岩手・福島・埼玉・神奈川・静岡から報告されている。シャッコイは、東北六県のほか千葉からの報告がある。またツミタイ、チミタイなど、ミを持つ語形は、東北地方のほか茨城・長野・鳥取・島根・三重・淡路島・香川からの報告がある。

20年前の北海道各地の高校生の調査によれば、全域シャッコイだった。現在の道内出身の短大生は、家ではシャッコイ(ハッコイ)を併用する者が約半数あり、テレビに出演することになったらという場面設定では全員ツメタイである。道内全体の若い層としては、やや共通語化が進んだか。島野も(男女差は著しいが)ほぼ軌を一にしていると言えそうである。

図5-2 どうもろこし

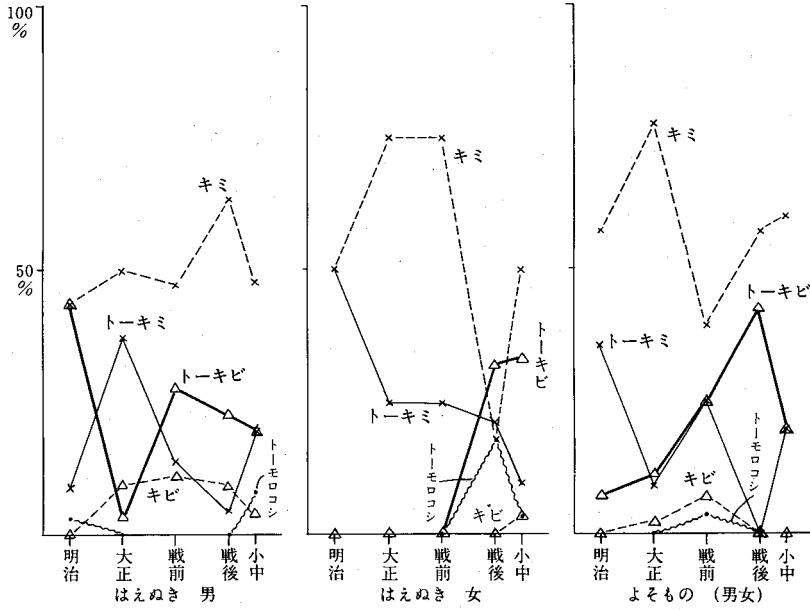
(注)省略語形 スイートコーン、スイートコン(校長、生え抜きの男:明治1人、大正1人)

スイートコーンなどは、果して文体的に使われているのか不明(なお、補充調査でスイートコという語形も得られた。「~粉」という民間語源に支えられたらしい。)。栽培品種がほぼ入れかわるとはほぼ同時に新語形が入ったらどうなるか。意味分化が起るか、総称-特称の関

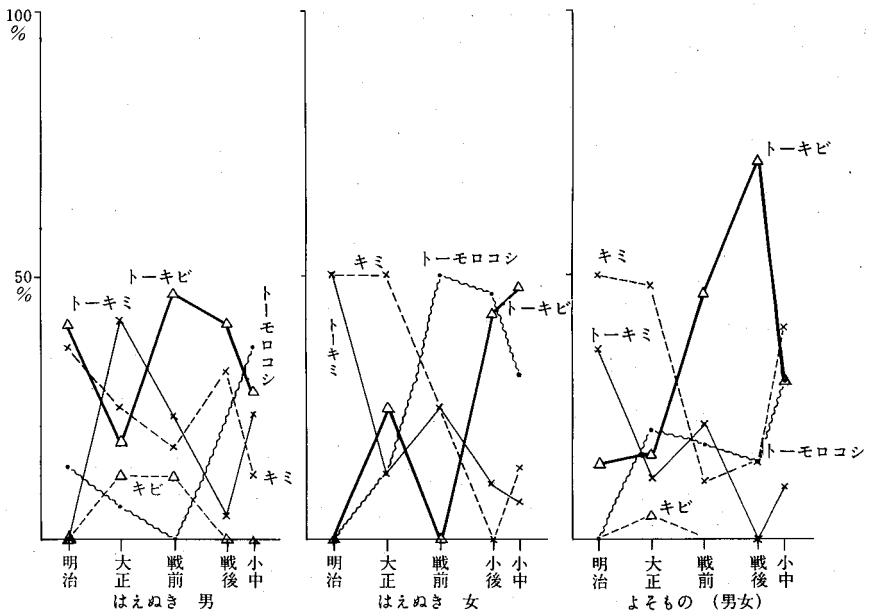
3) 拙稿「集落内の言語差——下北半島上田屋——」北海道大学人文科学論集 11 (1975) p. 94.

図5-2 とうもろこし

家の中の言葉



校長との言葉



係になるか、新一古の関係になり一方が減じるか、興味ある所である。品種名（特称）としては、ウルキミ、モチキミ、(ウ)マキミなどがあり、最近はレントコーンも加わったとか。ただこれらが漁民の日常用語となっているかは不明。

トーモロコシは、女に多く、若い方に多く、校長との場面で多い。今共通語形として普及中である。代りにキミが減少しつつある。

トーキビも校長との場面でやや多い。中年で多い。新聞記事にもよく現われ、北海道共通語と言える。

男女差が大きいのは、この語を使う機会と場面に性差があるせいだろう。

LAJ 182 図によれば、次のような分布を示す。

キミ 道南（と北海道海岸部）；青森・秋田・岩手

キビ 小樽付近や札文・道東などにトーキビとの併用で；山形・新潟・長野のほか山陰・高知など。

トーキミ 道南；岩手に少々。

トーキビ 北海道全域；山形・新潟・石川・福井・四国・九州。

トーモロコシ 道内は併用で1地点のみ；関東・中部のほか全国に散在。

20年前の高校生は大部分がトーキビ（道南でトーキミ）だから、LAJにくらべると北海道共通語化が進んでいた。現在の短大生では家ではほぼ全員トーキビ（道南の一部でキミ）であり、男女差を考慮に入れると、20年前とは大して変りない。テレビ出演の場面ではほぼ全員がトーモロコシであるから、知識としては全国共通語化が相当に進んでいる。

島野の若年層は、短大生にくらべると全国共通語化がやや遅れていると言える。

図5-3 よだれ

（注）省略語形 ツバ（家、はえぬきの男：小中1；はえぬきの女：大正1，戦後0.5，小中2／校長、はえぬきの男：戦前1，戦後2.5；はえぬきの女：大正2，戦後3，小中3；よそのの：大正2，戦前2.5）

ツバキ（校長、はえぬきの男：戦前1；よそのの：戦前0.5）

ツッパ（校長、はえぬきの男：小中1）

ヨングレ（家、よそのの：大正1）

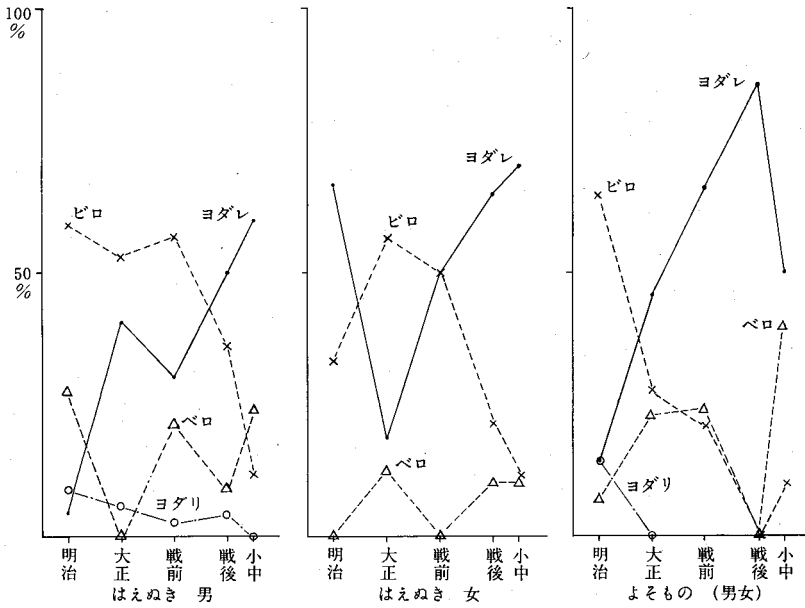
ビロビロ（家と校長、よそのの：戦後1）

こうしてみると、「よだれ」が方言的で「つばき」が共通語的と思っている人もいるらしい。「つば」に関する語彙体系の違い（意図的に吐き出すか否かによる区別がある）も関係があろう。

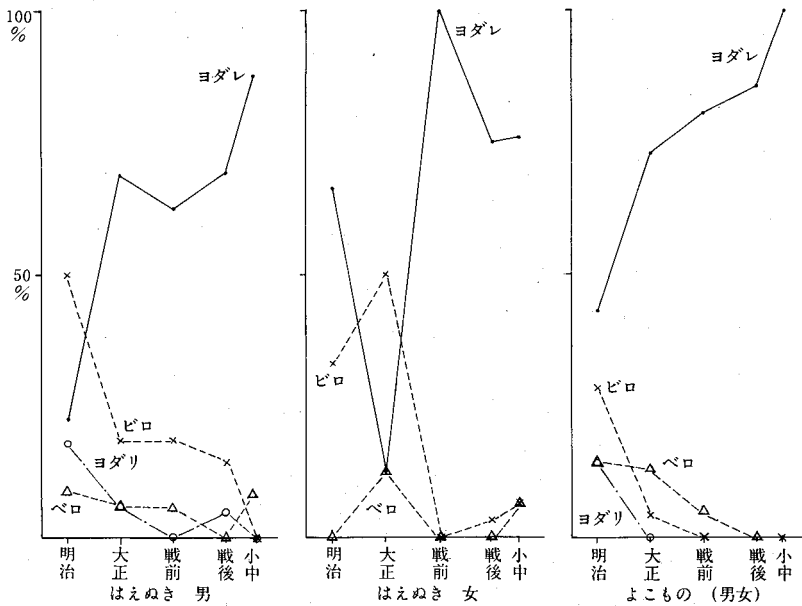
ヨダレが共通語形。ヨダリも校長との場面で多い。かつては共通語扱いされたい。ビロとペロとではビロの方が古いらしい。

図5-3 よだれ

家の中の言葉



校長との言葉



LAJ 119 図によれば次のようである。

ピロ 道南とオホーツク沿岸；青森・秋田北半。

ベロ 札幌付近に多い。道南と海ぞいに主に併用で分布；秋田南半・岩手・青森。

ヨダリ 道南海ぞいにピロと併存；岩手に点在，富山・石川・新潟の他全国に散在。

ヨダレ 道東と道央のほか道南にも；西日本一帯，関東と東北地方南部。

20 年前の高校生の調査では，唾をどう言うかを聞いている。これをベロというのは道南と海ぞいに少しあるのみ。

道内の短大生では「よだれ」をベロというのはごくわずか。後はヨダレ。テレビの場面ではほぼ全員ヨダレ。共通語化が相当進んだと見てよい。

図 5-4 かかと

(注) 省略語形 カカド (カカトに統合) (家，はえぬきの男：明治 1，小中 1；よその：明治 1，戦前 0.5 / 校長，はえぬきの男：明治 1) クド (家と校長，生え抜きの男：戦後 1)

なおアクトの中にはアグト，アグドを含むが，内訳は煩雑ゆえ略す。「カガト」「カカト」では有声化した形は少ないが，「アクト」の有声化した形は多い。また日常はほぼ常に有声化したアグドを用いているものと推察される。

カガトは，若い層に多いこと，校長との場面で増えることなどから言って，共通語扱いされている。カカトはやっと若い層で増えつつある。

LAJ 129 図によれば，AGUTO は道南と東北六県にある。そのほかに東北六県では KAG [g] ATO，北海道では KAG [ŋ] ATO が進出中である。

20 年前の高校生ですでにアクトはほとんど聞かれない言い方だった。代りに普及しつつあるのがカガトかカカトかは調べていないが，恐らくカガトだったろう。道内の短大生では，アクトは家で 2 名使うのみ。カガトとカカトの場面差は少なく，カガトが約 1/3，残りはカカトである。

なお道南と青森県の中学生の調査⁴⁾によれば，青森県ではアグドが盛んであるが，道南では海岸ぞいにアグドがあるほか，カガトが進出中である。

カガトは北海道共通語であり，また西日本共通語でもある。内陸の西日本出身者の言葉が道内で勢力を得たのだろう。

4) 上ノ国町小砂子中学校，丸藤久平氏による通信調査。cf.『かどいし——小^{かいきこ}砂子の歴史と生活——』(1975 年度 中二学級活動の記録)

図 5-4 かかと

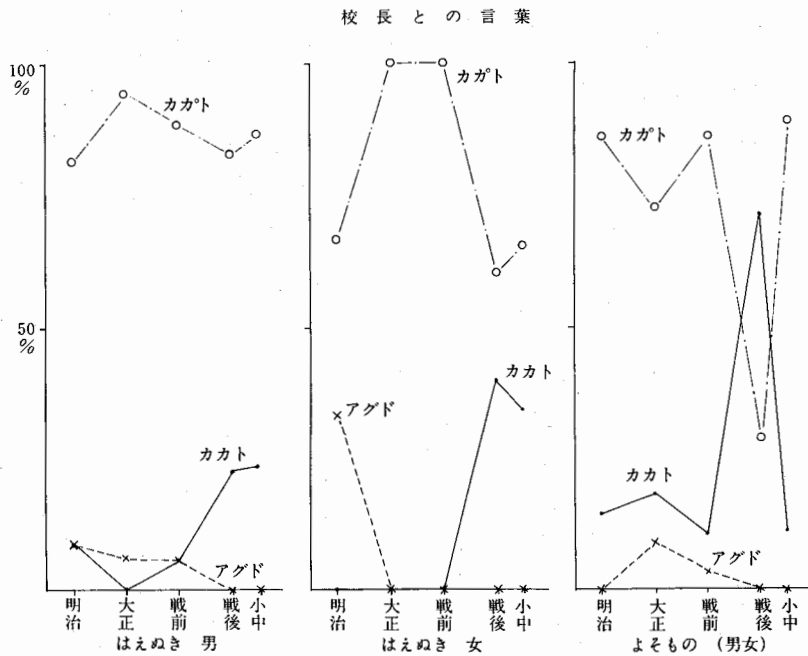
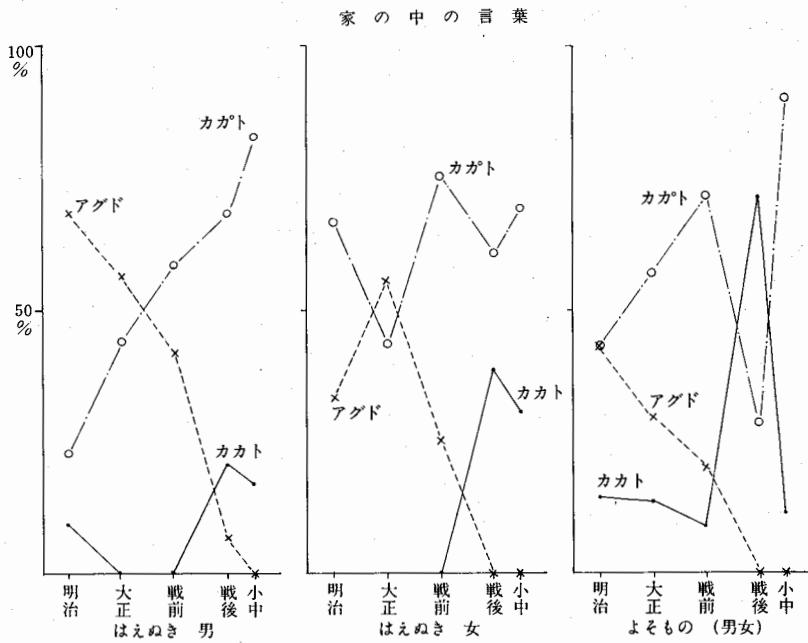


図5-5 a あざが(できた)

前半・後半に分けて考察する。語形の数が多いので(5章末尾の)別表に示す。(別表の数字の上段は家での、下段の()内は校長との、使用者のパーセンテージ)

図5-5 aによればブチジ(ヨッタ)→ブスクロク(ナッタ)類→アオタン〔アザ〕(デキタ)の三段階の変化があざやかである。このうちアザは明らかに校長との場面で増えているが、他の言い方は場面差がはっきりしない(無回答は除いて集計してあるのだが。)

この項の質問文は「足をぶつけたりすると、そのあとが青黒くなって、二三日消えないことがあります(何が)どうなったといいますか」である。ところがブスクロクナッタは「血の気が失せて紫色になった」の意味で、ほぼ全年齢層に使われる言い方らしい(寒くて唇(頬)がブスクロクナッタなどという。)従って、老人層は内出血の場合と意味分野を区別する;壮年層では区別しない;若年層では再び区別する、という変化が起きていることになる。意味分野の統合と再分割という複雑な変化である。(なお目のまわりの現象についてのみアオタンを使うと言う人もいた。)

LAJ 80 図によれば次のような分布を示す。

ブチチヨル 道南に多;岩手北部・青森東部。

ブスイロニナル, ブスクロクナル 道東・道北など;下北など, 秋田・山形その他。

アザニナル, アザデ(キ)ル 道央;関東, 福島・山形。

なおアオタンはLAJの図には見当たらない。

道内の短大生では、語形が多い。また場面差は余りはっきり見られない。アザ, アオタン, ブスイロなどが混在しており、地域差はほとんど認められない。なおアオタンという言い方を聞くかという問には、大多数が聞いたことがあると答えている。

こうしてみると、島野でのブスクロクナルへの変化は、内陸部の言葉への同化と言える。またアオタンは、つい最近使われはじめた言い方らしい。島野の特殊な言い方ではなく道内全体にはやりつつある。

図5-5 b (あざが)できた

ブチジ-ヨッタ, ブスクロク-ナッタ, アザー-デキタ, アオタン-デキタのように結合される言い方である。図5-5 bの年齢変化があざやかである。他にも様々の表現のし方があるが略す。

図5-6 かたぐるま

語形が多いが、別表に回して、いくつかを統合してグラフ化した。クビコノリ→カタグルマ

図 5-5 a あざが (できた)

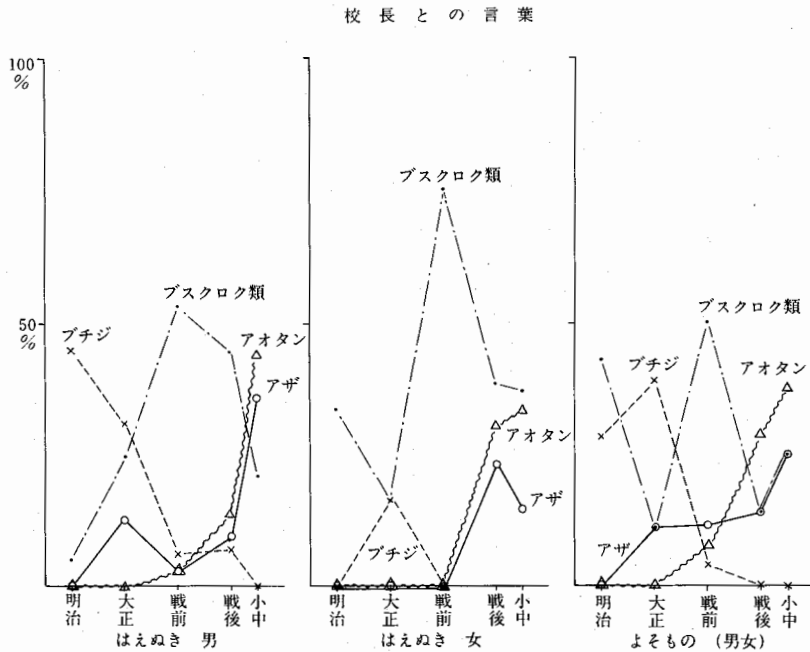
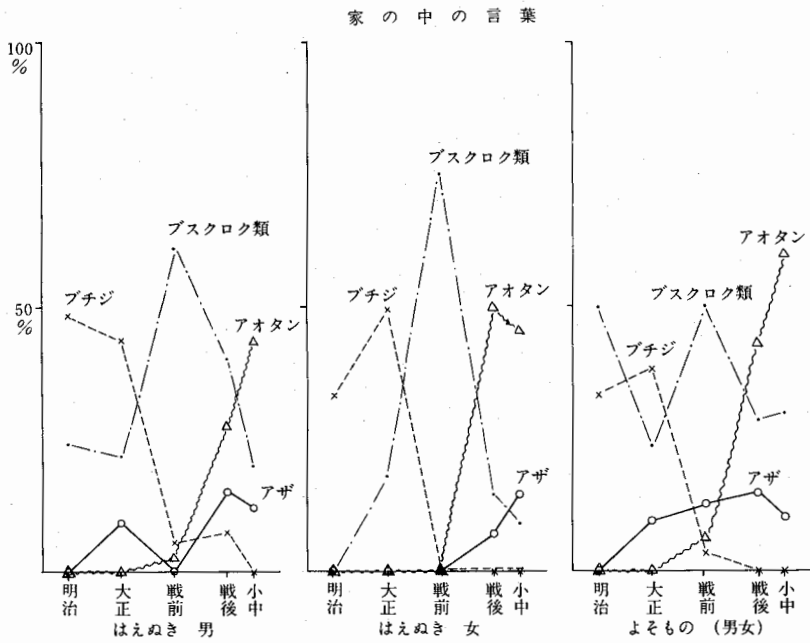


図5-5b (あざが) できた

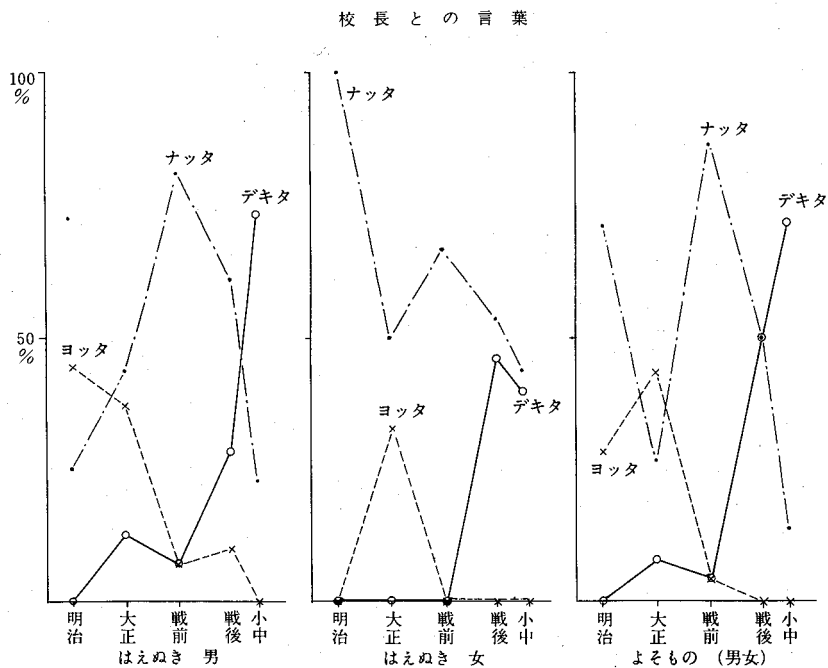
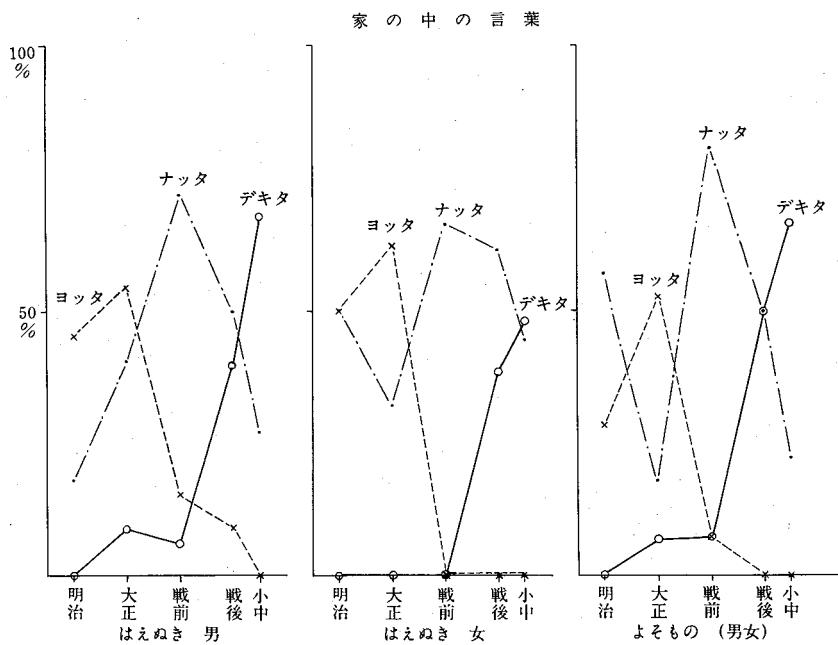
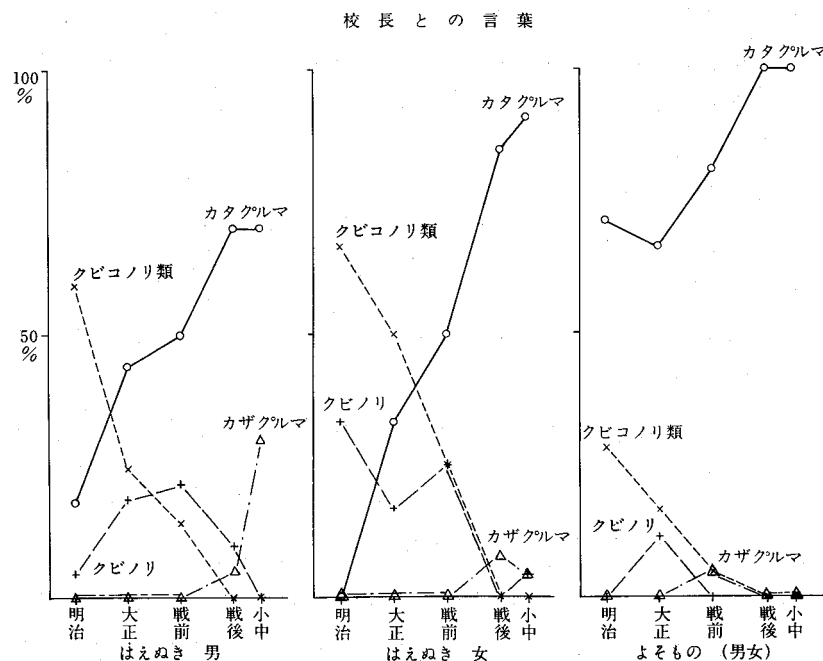
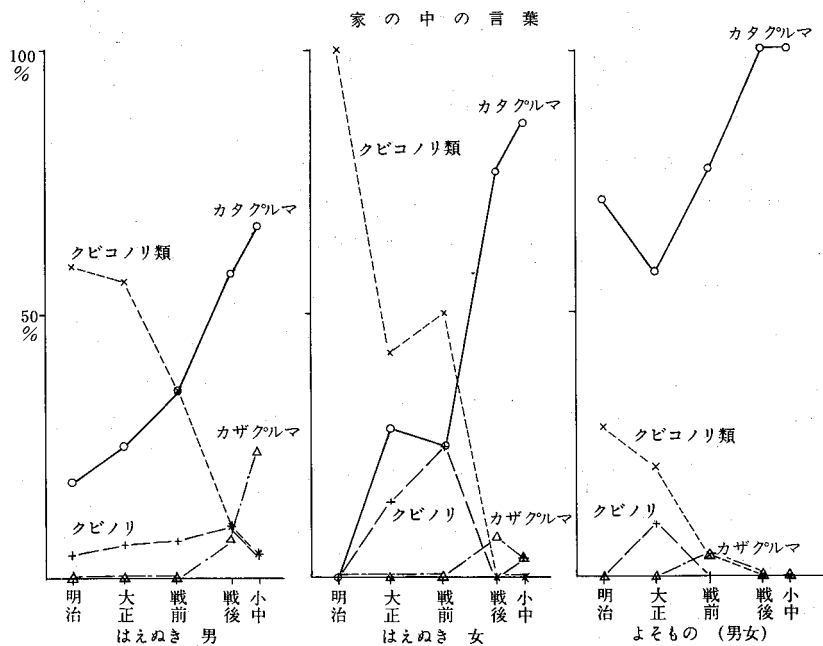


図5-6 かたぐるま



の年齢変化がかなり急である。またカタグルマは校長との場面で多く使われる。ところが、途中でクビノリが多くなっており、しかも校長との場面で多く使われる。「地方共通語」と見られる。

小中学生でカザグルマが出現している。「風車」との類音牽引によって生じたものか。

LAJ 149・150 図によれば次のように分布する。

カタグルマ 道央と道東；東京・埼玉に密集するほか全国に教在。

カザグルマ 道内にはない。全国各地に1, 2地点ずつ教在。

クビ(コ)ノリ 道南と海ぞい；青森・秋田・岩手・宮城など。

そのほかグラフで省略した語形の LAJ における分布を細かく見ると、クビグルマは長野と愛媛(独立に混交したか)、チャンチャコマイは山形県(島野での使用者は同地域出身)、クビノセ(岩手・岐阜に1地点ずつ)、ウマノリ(道内に散在)、ウマノセ(徳之島)という状況である。

道内の短大生は、全員が二場面ともカタグルマのみを使用する。LAJ 以降完全に共通語化したと見てよい。カザグルマの発生は島野独特の現象らしく思われる。

図5-7 つむじ

語形の種類が多く、別表に示す。

家と校長の二場面での差は余りない。ウズマキやマキギリ、マキグリは層によっては校長との場面で増えるが、一貫していない。

年齢変化が大きい。ことにはえぬき男のウズマキは0%から100%近くに大変化をとげている。マキギリは途中で勢力を伸ばしかけて、ウズマキに出し抜かれた語形と見うる。

島野での補充調査によれば、ウズマキは水面にできるものとか、蚊取線香の形をさす場合にも用いられ、多義語である。意味を拡大したと見られる。

LAJ 102 図によれば、

マキメ 北海道南端(岩内町を含む)；関東～東北。

マキギリ 日本海岸各地；津軽

マキグリ 留萌付近；津軽・岩手・栃木

マキ 札幌付近；青森から新潟の日本海ぞいに点々と。中部地方と九州・沖縄県にも。

マキゲ 太平洋側；津軽

ギリギリ 内陸部；佐渡・北陸から西日本各地。

ギジギジ // ；佐渡・北陸地方。

マキツジ //

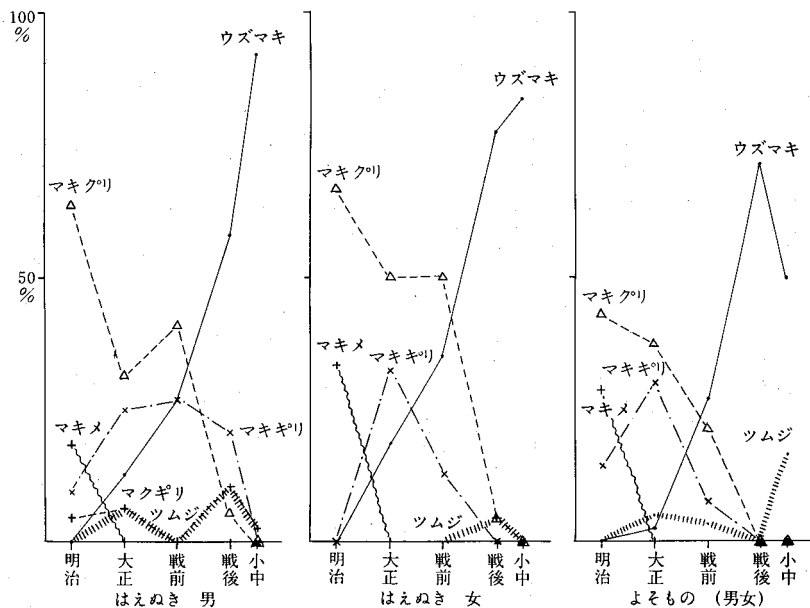
ウズマキ 道南各地、帯広付近；岩手・秋田・山形・関東以西に点々と。

他にウズ、ギリ、イジ、ギリギリマイ、マキマイ、マイマイ、ツムジなどが道内に見られる。

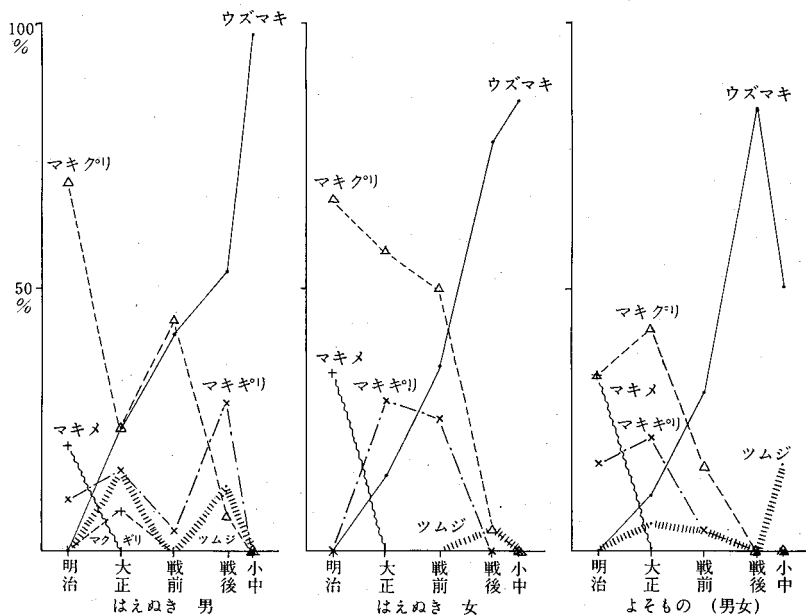
道内短大生では、ツムジ、ウズマキ、ギリギリ、グリグリ、グルグルしか得られなかった。

図5-7 つむじ

家の中の言葉



校長との言葉



地域的なかたよりはあるにせよ、かなり語形の淘汰が行なわれた。グリグリは東部に多く、道南には見られない。ウズマキは道北道東には余り見られない。(グルグルは道北の1名のみ、ギリギリは道央の3名のみ。) ツムジは全道に見られ、ことに校長との場面では半数近くに用いられる。

またつむじをウズマキというのを聞いたことがあるかとの間には、大部分が聞いたことがあると答えている。島野で急に増えたウズマキは、道内に多い言い方に同化したわけである。

なお短大生で増えたグリグリはLAJでは見られなかったもので、「北海道新方言」といってよい。ただしLAJでは愛知県にあり、『日本国語大辞典』によれば静岡県小笠郡で使う。

図5-8 やぶにらみ

これも語形の豊富な項目で、別表に記す。グラフ化に際して、かなりの語形を統合して処理した。

ヨリメは、人為的に眼を真中に寄せることで、島野でも「やぶにらみ」と区別する人もいるが、区別のあいまいな人もいる。ヨリメは校長での場面でやや多くなることから見て、共通語的と感じられているらしい。

アッチャメ類をはえぬきの明治生れの女が3人中2人使っているのは、サンプル数が少なすぎ、信頼できない。はえぬき男とよそもののはほぼ一致した傾向から、最近多くなりつつある形と見るべきだろう。しかし校長との場面で増える傾向もなく、「新方言」とでも言うべきか。なお女子小中学生におけるアッチャメ類の語形の豊富さ(または不一致)が注目される(別表参照)。NRが多いことから見ても、余り使われない語らしい。

LAJではこの項がない。

『日本国語大辞典』には「ため」(南部・岩手)が載っており、語源をたどる道標になる。

道内短大生の調査では語形が多い。アチャメ、(アッチャメ)、ガチャメ、とその変化形およびロンパリ類が目立つ。ギンダ・ギンダメッコ・ダーメ類は見当たらない。ヤブニラミも二人使うのみ。テレビの場面では、これらに加え、シャシ、ロンパリがやや増える。なおアッチャメという語形を聞くかどうかの間に聞いたことがあると答えたのは1/3ほどに過ぎない(地域差ははっきりしない。)他の競合する語形があるせいだろう。

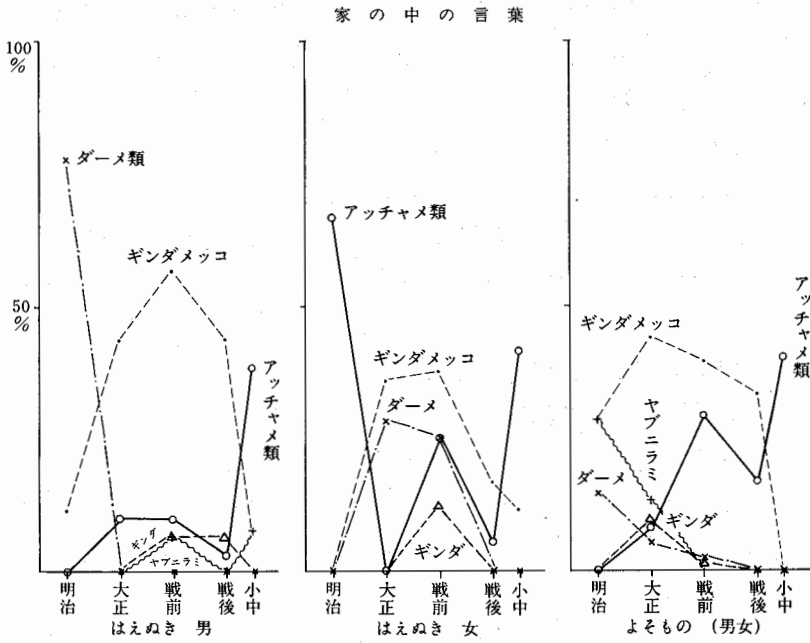
島野の変化は、全道の状況と必ずしも一致せず、特殊な地域的事情が働いているようである。

なお、ガチャメは最近の国語辞書にも「卑語」として載っている。この語ではスラング的に各種の語形がはやりすたりを重ねたと見ることができる。

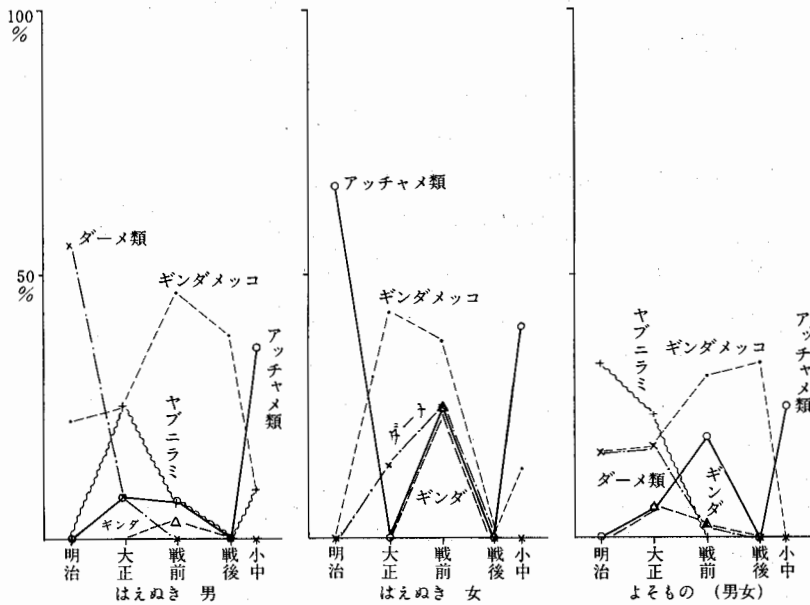
図5-9 くすぐったい

これも語形の数が多く、別表に示す。しかしモチョコイとクスグッタイとが二場面でかなり

図5-8 やぶにらみ



校長との言葉



きれいに使い分けられている。それ以外の語形ではモチョクチャイとモチャコイが多い方である。前者は古形、後者は一時増えかけた形のようなものである。モチョガユイ、モチョガシーは校長との場面でのみ出る。やや改まった感じを持つ語形か。またコチョー、コソーではじまる語形に、家でだけ用いられるというのではない。

LAJ 32・33 図を組み合わせる。

モチョコイ 道南および海岸一帯；青森と岩手北部。

モチャコイ 積丹半島付近に2ヶ所。道外にはなし。

モチョクチャイ 函館付近に3ヶ所；津軽に点在。

コソバイ 道央；北陸・近畿・四国等。

クスグッタイ 道内各地；関東・中部等各地。

そのほか、モッチョコイ、モジョコイ、モチョゴイ、モチョコチャイ、コチョグッタイ、コチョビタイ、コソバユイ、クツグッタイ等、多くの語形が道内にある。

道内短大生では、北半にコチョバシイが多く、他はコチョバイ、モチョコイ（主に南半）、クスグッタイがある。弱少語形としては、モチャコイ（積丹半島付近のみ）、モッチョコイ（道南のみ）、モンチョコイ、モソコイ、コショバイ、コシャバイ、コソバユイ、コチョガイ、コチョマシイなどがある。テレビの場面ではクスグッタイが圧倒的。

LAJ で出て来ない語形がかなりある。ことにコチョバシイはLAJに類例さえ見ない語形なのに、道北で大勢力となっている。数世代の間に生じた「新方言」と見うる。なお、以前の北大生等の集合調査の結果でも、コチョバシイは道東・道北地方から得られている。⁵⁾

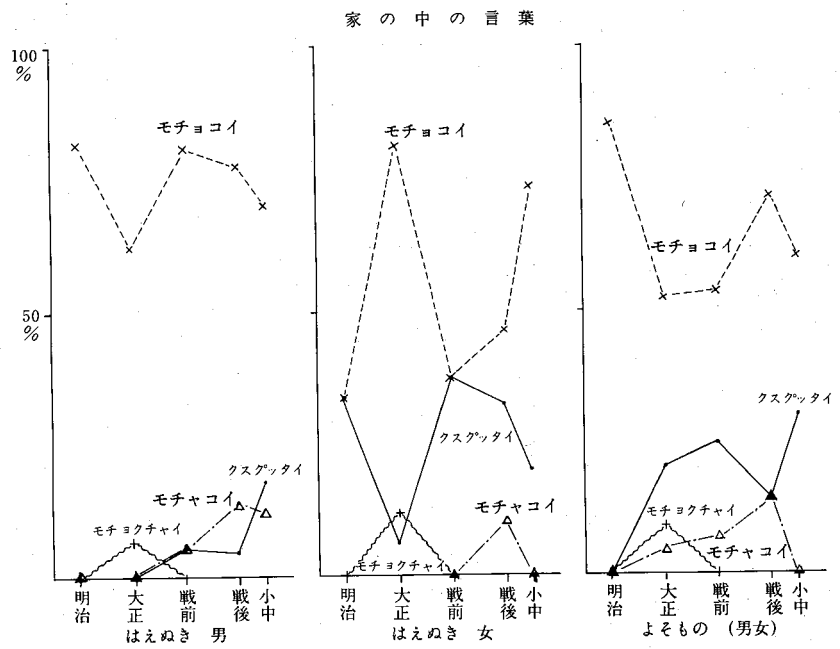
島野の状況は、LAJ にしろ短大生にしろごく近くの分布状況とは一致する。しかし道内の地域差が大きいので、道全体の傾向を反映するとは見られない。

以上、語彙9項目を見た。続いて文法と音韻についても考察しよう。

文法項目では、翻訳方式は共通語にひきずられやすく、なぞなぞ式では答が出にくいなどの欠点があるので、予想語形をあげて使うか否かを（二場面に分けて）答えてもらった。グラフ化するには、「多く、少し、たまに（使う）」などの注は無視し、使うか使わないかに分けた。なお校長との場面の答については、「イクカラと言いますか」などの間に対して、カラ自体は使うのにデスマス体で尋ねなかったために「使わない」と答えた人もあるようで、一般に「使わない」の割合がどの語形についても多い。

5) 拙稿「学生の方言」(『野田教授退官記念 日本文学新見』笠間書院、昭51)には北海道全体でまとめたを示した。

図5-9 くすぐったい



校長との言葉

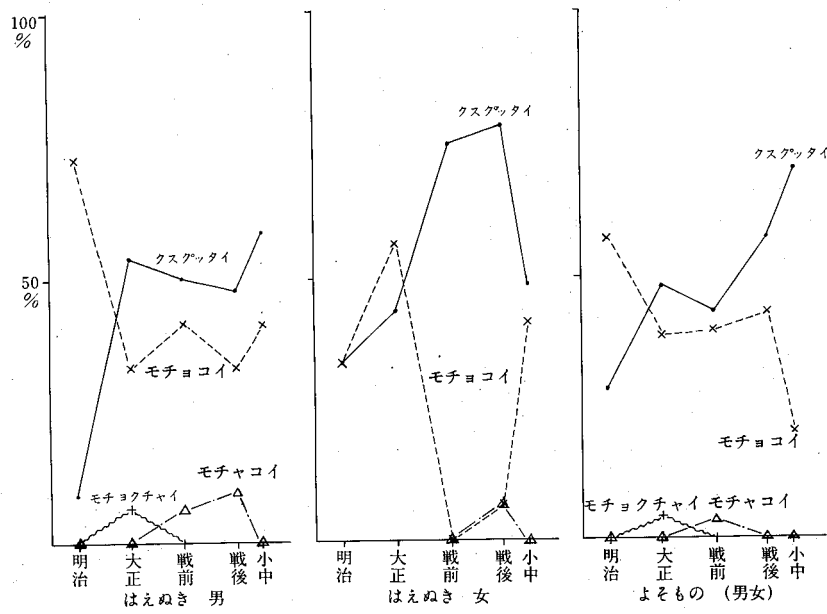


図5-10 スケとカラ

スケは男に多く、若い方で減る傾向がはっきり出ており、しかも校長との場面でかなり少ない。方言的にとらえられている。カラは全員によく使われており、はっきりした傾向を示さない。

20年前の高校生で、すでに道南にはんのわずかのスケが見られるのみだった。島野の状況も大してずれはない。

図5-11 書ケレルと書ケル

書ケレルは、わずかの人が使うのみである。若い層でやや増える傾向にあるが、校長との場面で少ない。一方書ケルは、ほぼ全員が使うが、若い方、男に使わない者が居る。書ケレルに置き代わったせいだろう。

20年前の高校生では、海岸寄りにかなり書ケレルが見られるが、岩内高校は使用者0であった。細かい地域差があるのか、島野ではやや増えたのか、不明である。

道内の話し手の内省によれば書ケレルは子供っぽい言い方だそうで、札幌での筆者の観察でも幼稚園児等に聞かれるようである。

図5-12 イカベ・イイベ・イイショ

「良いだろう」にあたる言い方である。イカベは、男に多く年齢的な減少傾向があざやかであり、校長との場面での使用も少ない。古形である。

イイベも校長との場面で使われることが少なく、方言的表現と見られる。性差も激しい。女性では減っているが、男では家の場面で増えている。後述の「中興方言」にあたる。

イイショも性差が激しい。男では両場面で増えており、老人は校長の場面の方で多く使う。共通語としてとらえられている。女では、家ではよく使われるのに校長との使用が少ない。調査項目に入れなかったが、話者の言及によれば、イイデショーという言い方に変えるためである。この意味ではイイショは「地方共通語」に相当するが、使用者は多く、地方的なものとの意識も薄いようである。

上に見た男のイイベ・女のイイショという性差は、札幌付近でも観察される。イイショは恐らく道内で新しく発生した言い方だろう。中年以下の人によく聞かれる。イイッショのように、デの弱体化・脱落の中間段階と思える発音も聞かれる。用言では行クショ、言ッタショ、無イショのようにデがつかないが、体言（形容動詞も）では男デショ、キレーデショのようにデは脱落しない。この点は道内でかなり使われる「べ」と同じであり、何らかの影響関係が想定される。（なお静岡市方言にも同様のショがあるそうだが、用言にも体言にも直接ショが接続するらしい。）

図 5-10 スケとカラ

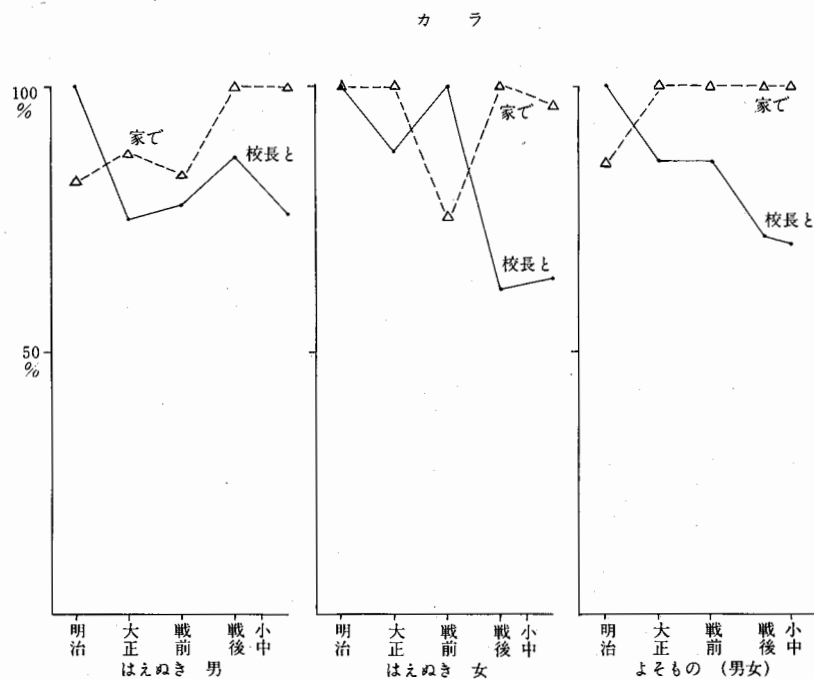
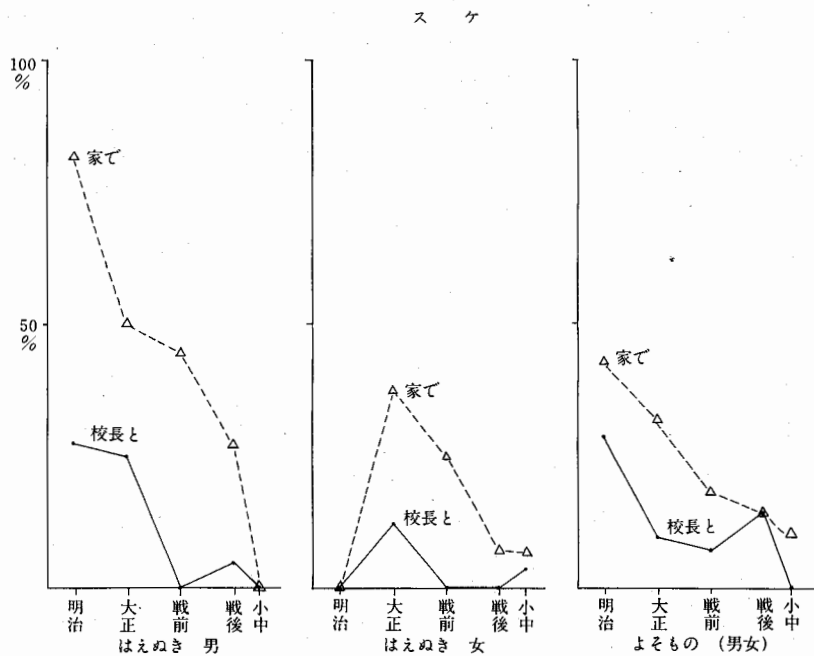


図 5-11 書ケレルと書ケル

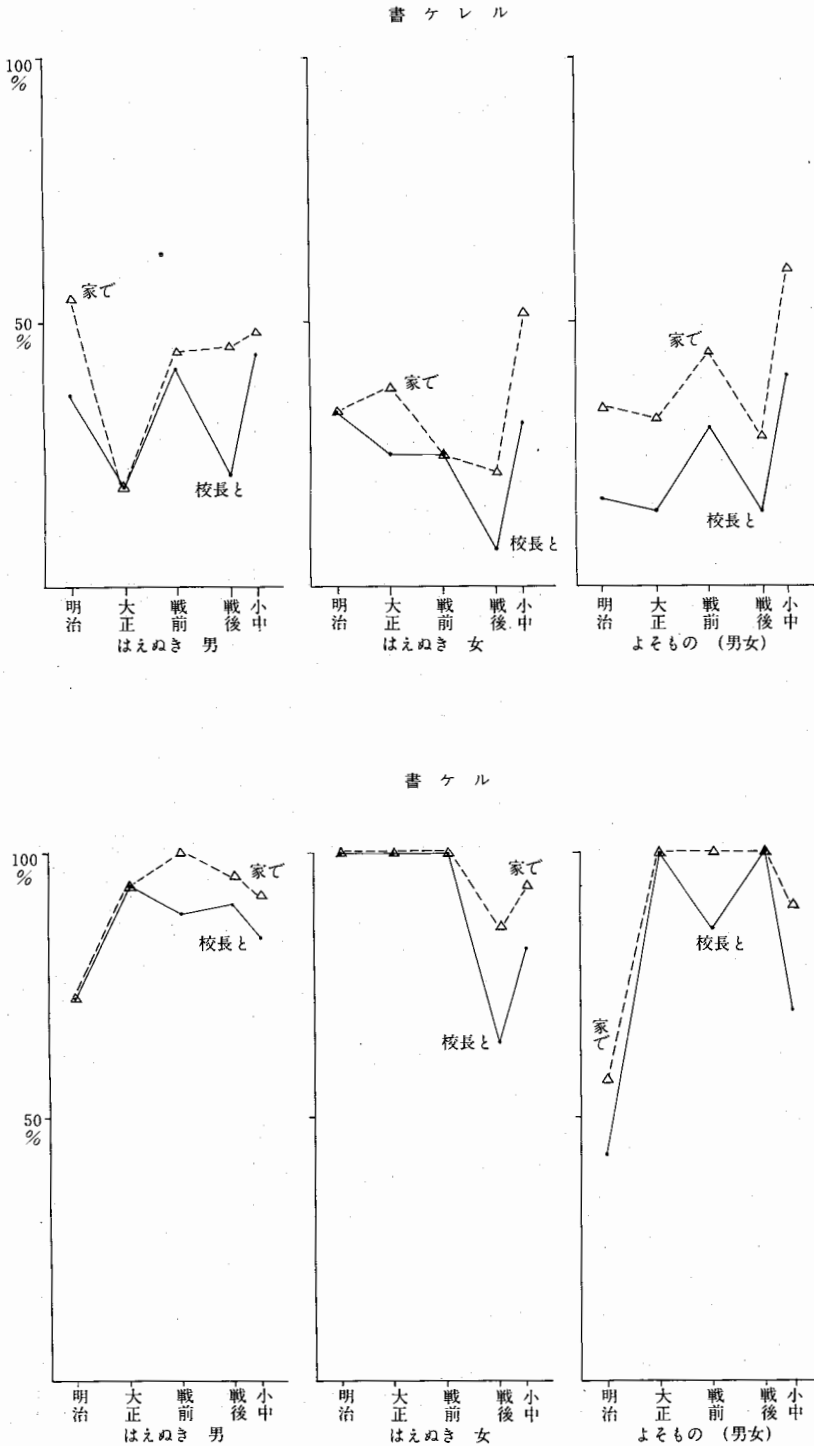
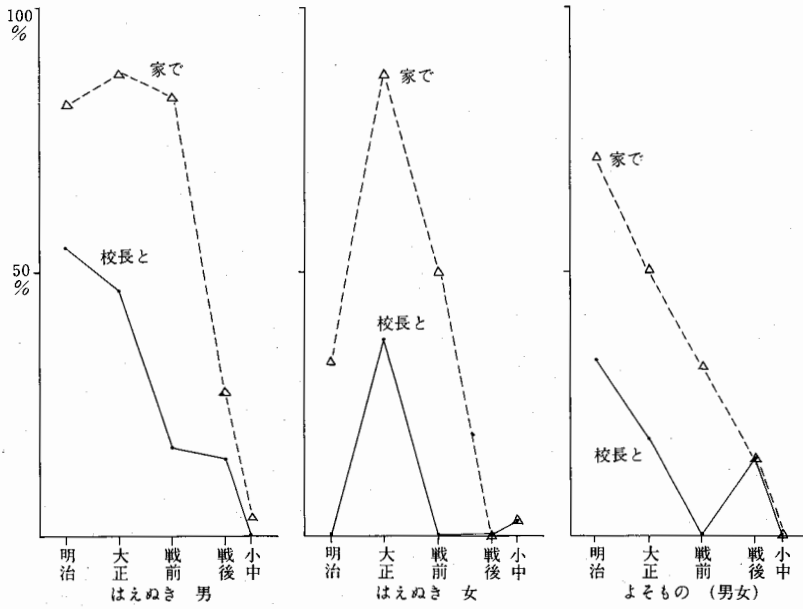
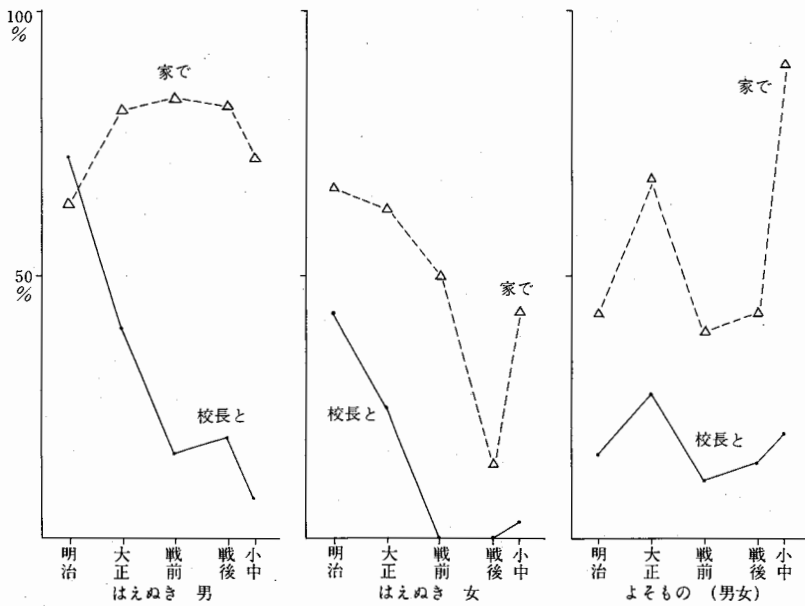


図5-12 イカベ・イイベ・イイショ

イカベ



イイベ



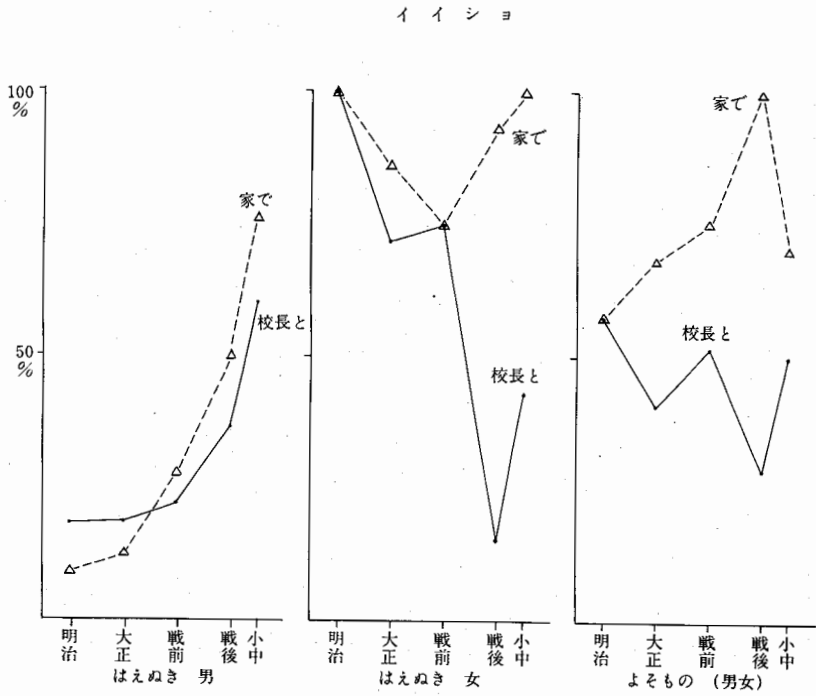
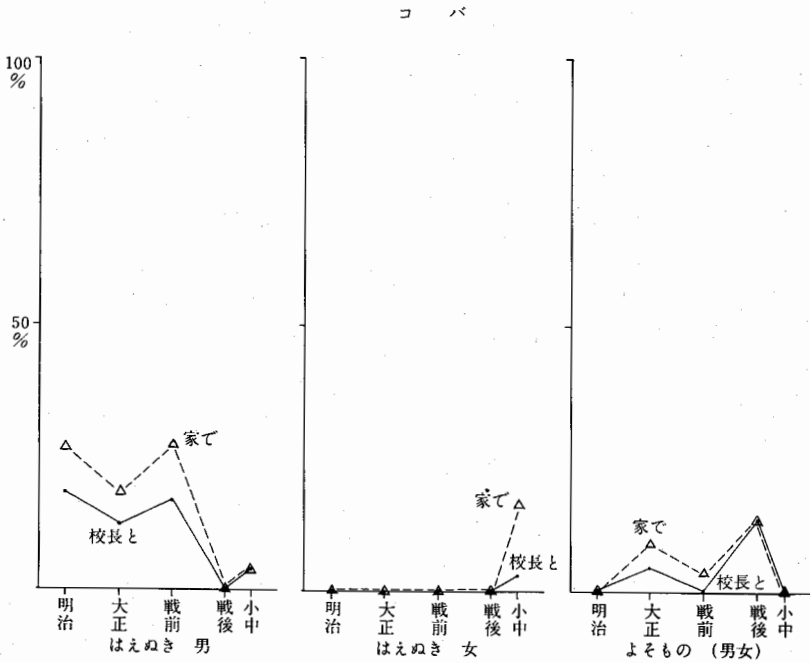
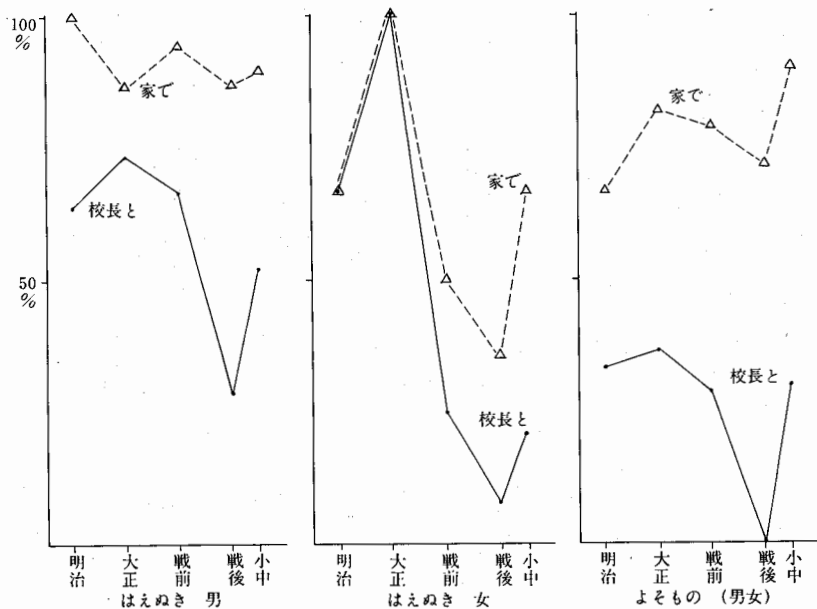


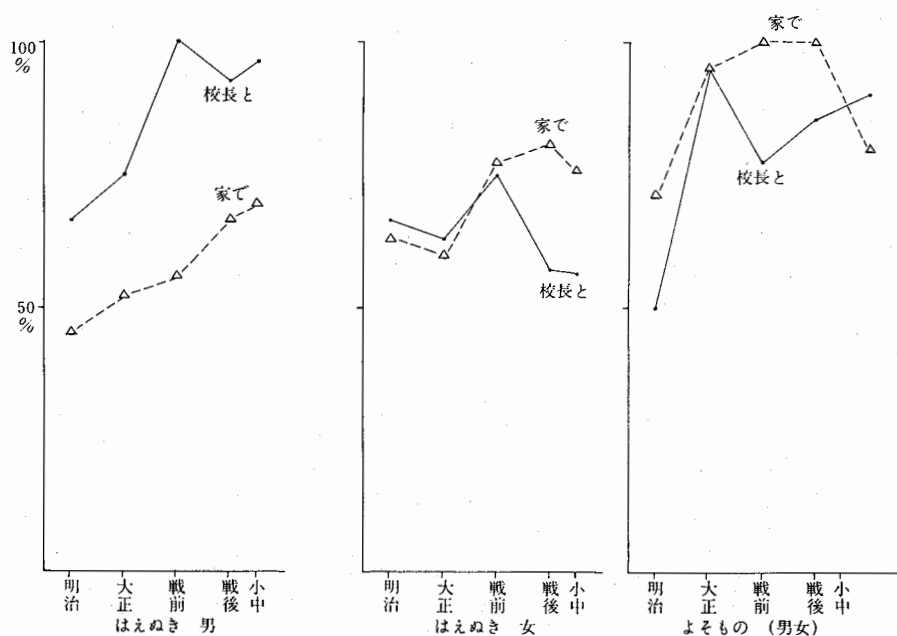
図 5-13 来バ・来エバ・来レバ



コエバ



クレバ



20年前の高校生調査では、推量の書クベ、勧誘の行クベの使用不使用と、「高いだろう」の項目がある。海岸寄りには60～80%の使用率があるようである。語の差と性差がからむため島野との直接の比較は難かしい。

図5-13 来バ・来エバ・来レバ

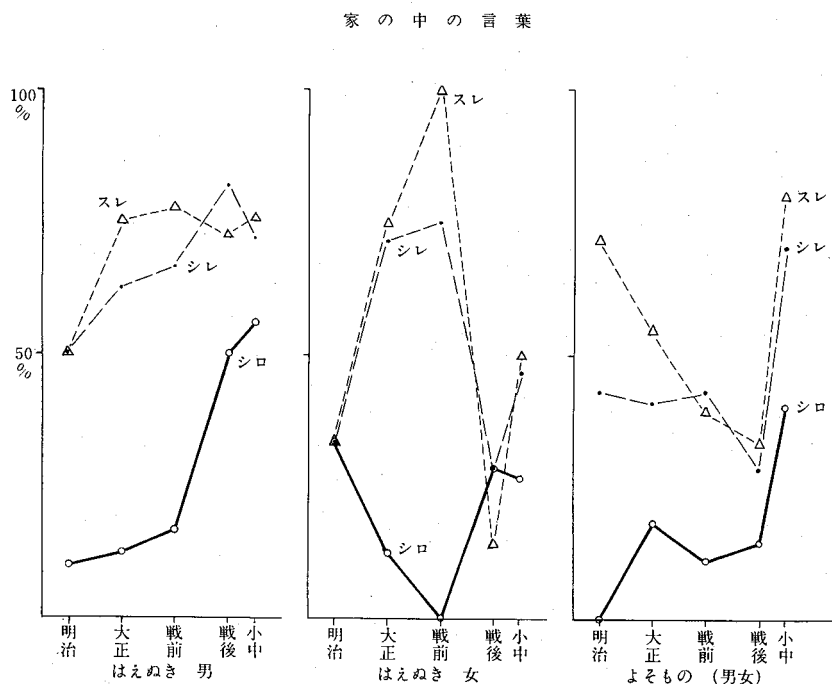
コバはほとんど使われない。(男に多い) 古形らしい。コエバにも性差があり、男では盛んであるが、女性では急速に衰えつつある。校長との場面では使用が少なく、ことによそのもの(とはえぬきの男)での使いわけが大きい。クレバは年齢的に漸増の傾向があり、校長との場面でも多くなり、共通語として扱われている。(なお若年層の一人、他出経験の長い者は、クルバとも言っていると答えたが、島野全体としてはそう使われないようである。)

20年前の高校生では全域でコイバ・コエバの使用が盛んであった。島野の大勢と一致する。

図5-14 スレ・シレ・シロ

この命令形の項目は、校長との場面では調査しなかった。命令形がそのまま用いられることはほとんど考えられないからである。

図5-14 スレ・シレ・シロ (家のみ)



シロは一番使用が少ないが若い方ほど増えており、進出中と見られる。ただ北海道では一段活用とサ変のオ段命令形は乱暴な言い方という語感を伴っているようで、これが全国共通語化に際しどう働くか、興味深い。

シレとスレにはほとんど差がない。ことに中年以上の日常語ではシとスの区別が音韻的に無くなるので、このグラフから両者の新古関係を論ずるのは危険である。

20年前の高校生では、道南ではややシレが多くその他の地域にスレの方が多いようだがはっきりした地域差とは言えない。

以上文法項目を通じてみると、両方（または三つ）の形を共に使うという人が相当多い。質問法によるせいもあるだろう。そのせいか新古関係のはっきりしない語形も多かった。くわしくは後に考える。

音韻関係は、聞き取り能力の個人差の大きさを思い、初めは省いたのだが、3月の第2回調査で、聞き取りのやさしそうなものを2項目だけ加えた。サンプル93人の構成は右のようである。

	明治	大正	戦前	戦後	小中	計
はえぬき男	7	10	7	15	3	42
〃 女	1	4	2	9	1	17
よそもの	2	15	12	5	0	34
計	10	29	21	29	4	93

図5-15 いか

カ行子音の有声化についてはかなりきれいな年齢差（と性差）が見られる。しかし場面差はそう大きくない。語頭のイとエについては、エと発音する者はほんのわずかであり、すでに相当共通語化が進んでいるように見受けられる。

図5-16 ひしがた

この項では校長の場面の発音を質問していない。前半・後半に分けて記す。

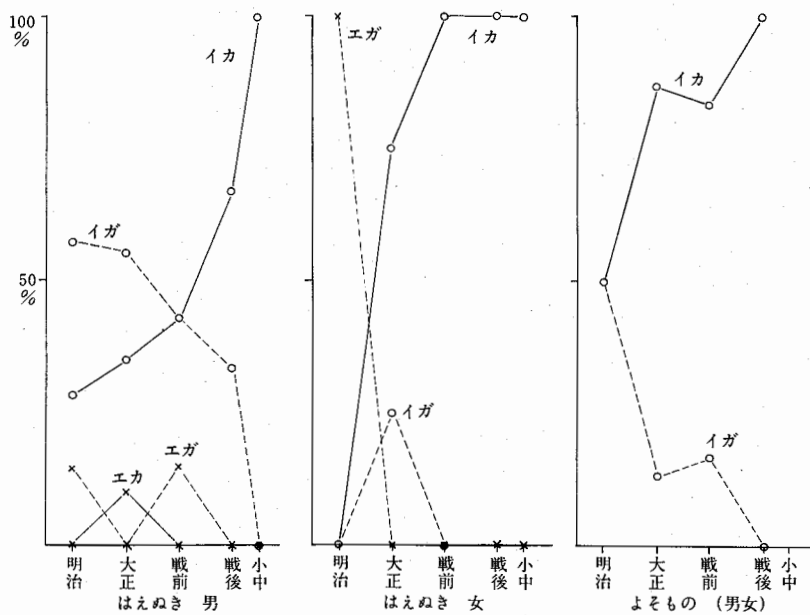
前半については、共通語形ヒシ-普及の年齢カーブが著しい。これに対し老人に多いのはヒとシの混同によるシシ-である。更にスィスィ-という形もある。

後半の第1子音は全部〔ŋ〕であった。第2子音の有声化については、前項のカ行子音よりも共通語化が進んでいるように見受けられる。

しかし音韻関係は項目数も少なく、日常の発音そのものとも考えられないので、これ以上の論及はさしひかえたい。ただ全体的パターンとしては文法項目のグラフとよく似ていることを指摘しておこう。

図 5-15 いか

家の中の言葉



校長との言葉

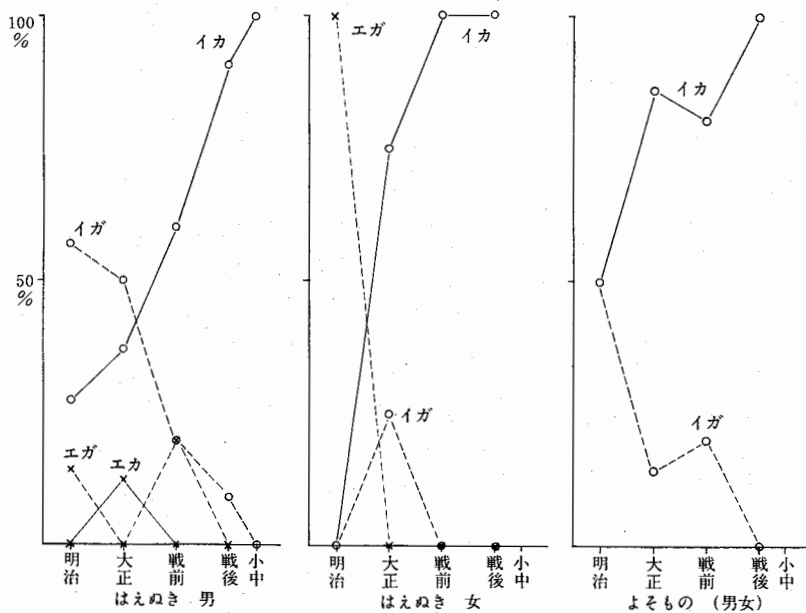
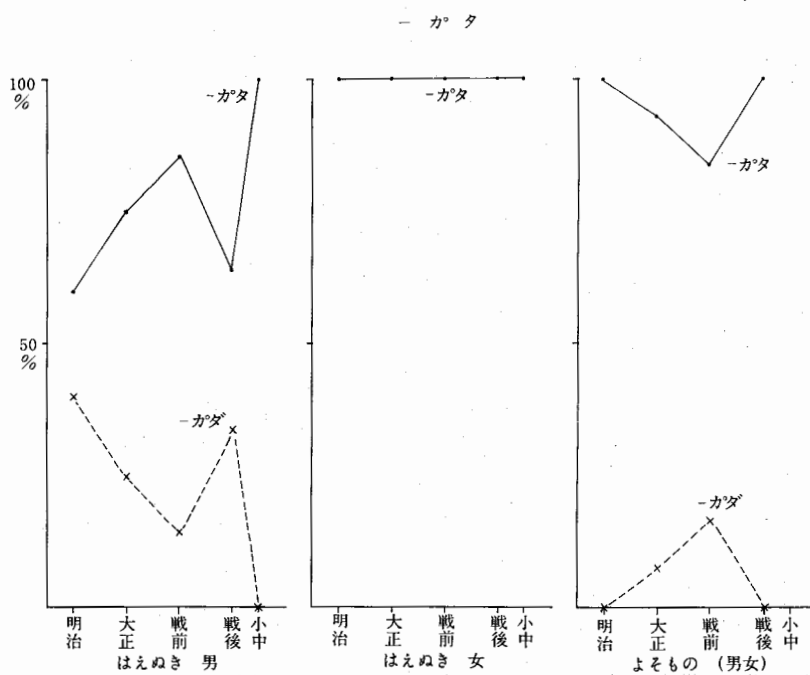
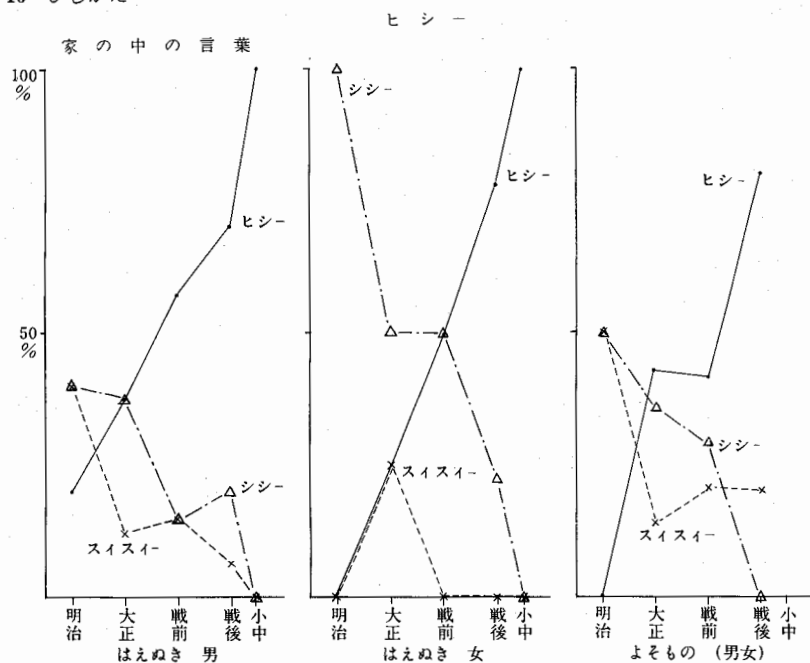


図5-16 ひしがた



5. あ ざ が (できた) 別表

グラフ化	コード	回 答	は え ん き 男					は え ん き 女					よ そ も の 男 女				
			明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中
ア ザ	01	アザ		9.3 (6.2)		— (5.6)	— (6.3)				— (7.7)			4.8 (5.6)	8.9 (7.7)		10.0 (12.5)
	02	アザガ		— (6.2)		15.0 (13.9)	12.5 (29.2)				7.1 (15.4)	14.3 (14.8)			3.6 (3.8)	14.3 (14.3)	— (12.5)
	03	アザニ			— (2.8)									4.8 (5.6)			
ア オ タ ン	10	アオタン			2.8 (3.1)	27.5 (13.9)	43.8 (31.3)				28.6 (23.1)	25.0 (22.2)			6.4 (7.7)	42.9 (28.6)	40.0 (12.5)
	11	アオタンガ					8.3 (12.5)				7.1 (—)	19.7 (11.1)					20.0 (25.0)
	12	アオタンニ									14.3 (7.7)						
ブ チ ジ	17	ブジチ		6.2 (6.2)													
	20	ブジジ	48.5 (45.0)	31.2 (18.7)	5.6 (—)	7.5 (8.4)		33.3 (—)	50.0 (16.7)				33.3 (28.6)	38.1 (38.9)	3.6 (3.8)		
	23	ブズズ		6.2 (6.2)													
ブ ス ク ロ ク 類	50	ブスクロク	9.1 —	6.2 (6.2)	44.5 (40.6)	22.5 (22.2)	13.6 (14.6)	— (33.3)	— (16.7)	50.0 (50.0)	— (30.8)	— (29.6)	33.3 (28.6)	9.5 (5.6)	35.7 (34.6)	28.6 (14.3)	— (12.5)
	53	ブスックロク	9.1 —	12.5 (12.5)		5.0 (11.1)	4.2 (4.2)			25.0 (25.0)		— (3.7)	16.7 (14.3)	9.5 (—)			10.0 (—)
	55	ブスコロク															10.0 (—)
	56	ブスクルク							12.5 (—)								
	60	ブスグロク										3.6 (—)					
	63	ブスクログ	3.0 (5.0)	3.1 (6.2)	11.1 (6.2)	2.5 (5.6)	2.1 (2.1)		4.2 (—)		7.1 (7.7)				7.1 (7.7)		
	66	ブスグログ										1.8 (—)					
	70	ブチクログ				5.0 (—)											
	73	ブスコログ				5.0 (5.6)											
	76	ブスコロイ										3.6 (3.7)					
	79	ブスコロク								7.1 (—)				3.6 (3.8)			10.0 (12.5)

	80	ブスクロイ	3.0 (-)	5.6 (6.2)		1.2 (-)		4.8 (5.6)	3.6 (3.8)
省	05	アオアザ					1.2 (-)		- (14.3)
	06	アオアザガ							14.3 (14.3)
	26	ブシジ		8.4 (5.2)				14.3 (5.6)	3.6 (-)
	30	ブスジイ				12.5 (-)			
	34・37	ウチミ	6.2 (6.2)	5.6 (6.2)	5.0 (11.1)		25.0 (-)		
	36	ウジミ	9.1 (12.0)			33.3 (33.3)			
	37	ウジミガ					- (25.0)		
	40	アオク	6.2 (6.2)	- (6.2)	4.2 (-)	- (16.7)	- (7.7)	1.2 (11.1)	- (5.6)
	43	クロク	6.2 (6.2)			- (33.3)	- (16.7)		3.6 (-)
	44	クルク							3.6 (-)
	45	クルグ						- (14.3)	
	46	ドスクロク		11.1 (18.7)					3.6 (-)
	83	ブスイロ		5.6 (6.2)					
	85	ブスイロニ						16.7 (14.3)	4.8 (5.6)
	86	ブツド	6.2 (6.2)						7.1 (7.7)
	90	チ	9.1 (10.0)			1.2 (-)			4.8 (5.6)
	92	クロジ							
	94	タイ				- (16.7)			
	96	内出血	9.1 (20.0)	- (6.2)		- (16.7)		- (5.6)	
	97	ゲボク							- (3.8)
略									

6. 肩 車 別表

グラフ化	コード	回 答	は え ぬ き 男					は え ぬ き 女					よ そ も の 男 女				
			明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中
カタグルマ	10	カタグルマ	9.1 (9.1)	15.6 (31.2)	28.6 (42.9)	55.0 (60.0)	66.7 (70.0)		28.6 (33.3)	25.0 (50.0)	76.9 (84.6)	86.0 (90.9)	71.4 (71.4)	42.1 (55.6)	68.2 (71.4)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)
	19	カダグルマ	9.1 (9.1)	9.3 (12.5)	7.1 (7.1)	2.5 (10.0)								10.5 (5.5)	9.1 (9.5)		
	12	カタグルマノセタ												5.3 (5.6)			
省 略	11	カタグル(マ)				5.0 (5.0)											
カザグルマ	30	カザグルマ				7.5 (5.0)	23.8 (30.0)				7.7 (7.7)	4.0 (4.5)			4.5 (4.8)		
省 略	40	クビグルマ	9.1 (9.1)														
ク ビ コ ノ リ 類	70	クビコノリ	59.0 (59.0)	28.1 (6.2)	28.6 (7.1)	5.0 (-)		66.7 (33.3)	42.9 (50.0)	25.0 (-)			28.6 (28.6)	10.5 (5.6)	4.5 (4.8)		
	71	グンビコノリ			7.1 (7.1)												
	80	クンビコノリ		12.5) (6.2)						25.0 (25.0)							
	80	クビッコノリ		9.3 (6.2)		5.0 (-)	4.8 (-)	33.3 (33.3)						10.5 (11.1)			
	86	クブッコノリ		6.2 (6.2)													
クビノリ	85	クビノリ	4.5 (4.5)	6.2 (18.7)	7.1 (21.4)	10.0 (10.0)	4.8 (-)	- (33.3)	14.3 (16.7)	25.0 (25.0)		4.0 (4.5)		10.5 (11.1)			
省 略	88	クビカケ										4.0 (-)					
	90	クビノセ		9.3 (6.2)													
	92	ウマノセ		3.1 (-)		5.0 (5.0)											
	93	ウマノリ		6.2 (6.2)	7.1 (7.1)	5.0 (5.0)			14.3 (-)		7.7 (7.7)						
	94	ンマノリ													2.2 (-)		
	95	オンブ				7.1 (-)											
	60	チャンチャコマイ													4.5 (4.8)		
	62	チャンチャコ													5.3 (5.6)		

グラフ化	コード	回 答	は え ぬ き 男					は え ぬ き 女					よ そ も の 男 女				
			明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中
省 略	55	マキグル		6.2 (7.7)										5.0 (5.3)			
	64	カギギリ											14.3 (16.7)				
	41	マギマイ		4.5 (-)													
	45	マキネ												5.0 (5.3)	7.1 (8.0)		16.7 (16.7)
	46	マイギニ												2.5 (-)			
	90	マキドコロ					2.6 (-)										
	80	ウズ									9.1 (9.1)	9.5 (10.0)			3.6 (4.0)		16.7 (16.7)

8. やぶにらみ

別表

グラフ化	コード	回 答	は え ぬ き 男					は え ぬ き 女					よ そ も の 男 女				
			明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中
ヤブニラミ	10	ヤブニラミ		-	6.7 (7.1)		7.7 (9.1)						28.6 (33.3)	13.1 (23.5)			
省 略	15	シャシ														- (33.3)	
ギンダメッコ	40	{ ギンダメッコ ギンダメッコ	11.1 (22.2)	43.3 (25.0)	56.7 (46.4)	43.7 (38.5)	7.7 (9.1)		35.7 (42.9)	37.5 (37.5)	16.6 (-)	11.1 (13.3)	28.6 (16.7)	43.9 (17.6)	39.4 (31.0)	33.3 (33.3)	
省 略	45	ギンダラメッコ		13.3 (8.3)					14.3 (14.3)								
ギ ン ダ	30	ギンダ		6.6 (3.5)	6.2 (-)				12.5 (25.0)				9.7 (5.9)	1.5 (2.4)			
省 略	35	ギンダラ									5.6 (-)			2.2 (2.4)			
	37	グンタラ		6.7 (8.3)													
	50	イッチョメ												2.6 (-)			
	52	イッチョーメ													6.0 (-)		
	60	ガッチャメ					6.2 (7.7)										

省略	62	ガチャメ	6.2 (7.7)				11.1 5.6 (-) (6.7)				16.7 20.0 (33.3) (-)				
	64	ガタメ	7.7 (9.1)												
ア ッ チ ャ メ 類	70	アッチャメ	3.3 (-)	6.7 (7.1)	3.1 (-)	23.1 (18.2)	66.7 (66.7)	25.0 (25.0)	5.5 (-)	22.2 (13.3)	20.4 16.7 40.0 (9.5) (-) (25.0)				
	71	アチャメ	6.7 (8.3)	3.3 (-)					5.6 (6.7)		7.9 (5.9)	9.1 (9.5)			
	72	アッチメ							2.8 (6.7)						
	75	アッチャラメ							5.6 (6.7)						
	76	アチャラメ							5.6 (6.7)						
	77	アヤメ			15.4 (18.2)										
省略	82	ヒガラ									4.5 (4.8)				
	85	ヨリメ	6.7 (-)	20.0 (28.6)	3.1 (-)	7.7 (9.1)	7.1 (-)	22.2 (42.9)	27.8 (33.3)	14.3 (16.7)	9.7 (29.4)	13.6 (21.4)	20.0 (25.0)		
	86	ヨロメ			7.7 (9.1)				—						
	87	ヨイメ									4.5 (4.8)				
	88	ヨコメ, ヨゴメ	13.3 (16.7)	18.7 (23.1)		7.7 (9.1)	— (33.3)					4.5 (4.8)	20.0 (25.0)		
	26	{ ヨコニラミ ヨゴニラミ					33.3 (-)								
ゲ ー メ 類	29	ダメ	16.6 (16.6)												
	93	ゲーメ	33.3 (33.3)					28.6 (14.3)	25.0 (25.0)			5.3 (17.6)	2.2 (-)		
	27	ダメメ	16.6 (16.6)												
	28	ダメマナゲ									14.3 (16.7)				
	92	ダメニ	6.7 (8.3)												
	95	ダミコ	11.1 (11.1)												
省略	97	ダメナメ									14.3 (16.7)				
	96	ズメ			7.7 (9.1)										
	90	ロンバリ	12.5 (23.1)						22.2 (28.7)			5.3 (-)	— (4.8)	16.7 (-)	

クラフ化	コード	回 答	は え ね き 男					は え ぬ き 女					よ そ も の 男 女				
			明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中
省 略	20	ロンドンパリ													4.5 (4.8)	8.3 (-)	
	21	アゼンカラジャー						14.3 (14.3)									
	94	ドングリメ									11.1 (14.3)						
	91	カタビッコ										2.8 (-)					- (25.0)
	98	メワルイ、メズレテル メガオカシイ			- (7.1)						11.1 (14.3)	5.6 (6.7)					
	23	アサッテノ ホーミテル											2.6 (-)				
	25	アッチムイテル														8.3 (-)	

9. くすぐったい

別表

グラフ化	コード	回 答	は え ぬ き 男					は え ぬ き 女					よ そ も の 男 女				
			明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中	明治	大正	戦前	戦後	小中
クスグッタイ	10	クスグッタイ	- (9.1)	- (53.3)	5.6 (50.0)	4.5 (42.9)	18.0 (58.6)	33.3 (33.3)	6.2 (42.7)	37.5 (75.0)	35.6 (78.6)	20.0 (48.3)	- (28.6)	20.3 (47.7)	25.0 (42.9)	14.3 (57.1)	30.0 (70.0)
	20	クスグッテ				- (4.8)											
モチョコイ	40	モチョコイ	81.8 (72.7)	62.5 (33.3)	80.6 (41.7)	77.3 (33.3)	70.0 (41.2)	33.3 (33.3)	81.2 (56.2)	37.5 (-)	46.4 (7.1)	73.3 (41.4)	85.7 (57.1)	52.2 (38.6)	50.0 (35.7)	71.4 (42.9)	60.0 (20.0)
	41	モチョケー													3.6 (3.6)		
省 略	43	モチョコチャイ		6.2 (6.7)					12.5 (-)					9.1 (4.5)			
モチョクチャイ	44	モチョクチャイ		25.0 (6.7)	5.6 (-)			33.3 (33.3)		25.0 (25.0)							
省 略	45	モチョクチャー												4.5 (-)			
	46	モチョガユイ															- (10.0)
	48	モチョガシ												- (4.5)			
	49	モチョガシイ	9.1 (9.1)											4.5 (-)			

モチャコイ	50	モチャコイ	5.6 (5.6)	13.6 (9.5)	2.0 (-)	10.6 (7.1)	4.5 (-)	7.1 (3.6)	14.3 (-)
	52	モチャケ			10.0 (-)				
省 略	56	モチャコチョイ	6.2 (-)						
	55	モツチャコイ				3.3 (3.4)			
	30	モソコイ	9.1 (9.1)						
	35	モソガイ							14.3 (14.3)
	90	ハチョカユイ		4.5 (4.8)					
	79	コチョガシイ		2.8 (2.8)				3.6 (3.6)	
	78	コチョバシイー				3.3 (3.4)		7.1 (7.1)	
	65	コソバイ			- (4.8)	7.1 (7.1)		4.5 (4.5)	3.6 (3.6)
	66	コソバユイ				- (3.4)			

6. 林の数量化理論第3類による語形の分類

以上にあげた語彙・文法項目のグラフでは予想に反して年齢差と場面差とは必ずしも単純な一義的な関係を示さなかった。文体的に高い（校長との場面でより多く使われる）語形のみが若い層で勢力を伸ばすわけではない。低文体の語で増えるものもある。一方には、文体的に高いのに減少しつつある語形もある。

校長との場面での使用が多いか少ないか、年齢の若い方で増えるか減るか（壮年で増えてまた減ったりするか）、更に全国共通語形と一致するか否かなどの基準を用いれば、上に出た語形はいくつかのグループに多重分類できる（また、増え方が図5-7のウズマキのように急か否か、などの基準もありうる。）しかしそのような分類は、グラフの視察などに頼るため、主観的・直観的判断による所が大きい。このようなパターン分類を計算によって行うのが林の数量化理論第3類（以下林3〔類〕と略）である¹⁾。

これは変数が名義尺度（語形Aを使うか〔使わないか〕語形Bを使うか〔使わないか〕など）の時の分析に適用され、変数が連続変量である時の成分分析あるいは因子分析に相当する。回答パターンの似た個人と、回答パターンの似た答とを（つまりケースと変数とを）同時にまとめて行く。語彙（意味）論²⁾についてや社会言語学方面³⁾にすでに適用例があり、言語以外の分野への適用も多い⁴⁾。

採りあげた語形は、すでに作成したはえぬき・性・年齢別集計でグラフ化したすべてである。ただし何度か多変量解析を行ない、例数の少ない語形を計算から除外した。林3においては、例数の少ないカテゴリーが往々にしてパターンを歪めるからである。なお語形のわずかな差は統合した。データを様々に変容し、各種の分析を施して、結果を比較してみた。

1) 林知己夫『数量化の方法』（東洋経済新報社、昭49）

安田三郎『社会統計学』（丸善、昭44）

林知己夫・樋口伊佐夫・駒沢勉『情報処理と統計数理』（産業図書、昭45）

竹内啓・柳井晴夫『多変量解析の基礎』（東洋経済新報社、昭47）

2) 西村怨彦・岩坪秀一「計算意味論の実験」情報処理 11-3 (1970) pp. 127-134.

3) 野元菊雄・江川清「パターン分類による音声の分析——鶴岡市における共通語化の調査から——」(『電子計算機による国語研究VI』秀英出版、昭49)

江川清「多変量解析の社会言語学的調査への適用例——鶴岡市における共通語化の調査資料を用いて」(『ことばの研究4』秀英出版、昭48)

国立国語研究所「地域社会の言語生活——鶴岡における20年前との比較——」(秀英出版、昭49)

小野米一「多変量解析法による言語変容の試験的研究——北海道の集団入植地について——」北海道教育大学紀要（第一部A）25-2（昭50）

4) 鮑戸弘「流行意識の基本構造」行動計量学 2-2（昭50）。そのほかNHK文研月報、統計数理研究所彙報等に適用例が多く見られる。

最初は併用の答を計算から除外し、単用のみで計算した。家の中での答のみに適用し、次に校長との場面での答に適用し、ついで両場面の答えを同時に処理した。

次に、併用の答を、それぞれの単用の答があったものと見なして処理した。併用のある時の方が林3類の理論的特性が生かされるはずである。上述と同様、家の中のみ、校長のみ、両場面統合の三つを出力した。やぶにらみのヤブニラミとヨリメを計算に加え、ナー・ネーは計算から省くなど、扱った語形には差がある。(そのほかにもいくつかの方法で処理してみたが、ここでは略す。)

計六つの処理における相関係数を掲げよう。(後述の文法項目のも一緒に示す。)これは分析の精度(分類の効率)を示すもので、数値の大きいものほど良い。(相関係数の二乗値である固有値によっても示しうがここでは略す。)

文法項目の数値は1軸を除き、相当に低い。余りきれいな調査結果が得ら

	家		校長		家+校長		文法
	単用	併用	単用	併用	単用	併用	——
1 軸	.646	.625	.607	.610	.595	.588	.439
2 "	.453	.427	.466	.468	.421	.405	.302
3 "	.418	.397	.436	.434	.398	.396	.292
4 "	.388	.383	.422	.409	.386	.366	.269
5 "	.377	.374	.400	.405	.366	.358	.265

表 6-1

れなかったことを示す。予想語形を掲げて使用・不使用を尋ねたせいだろう。また、文法項目は一般に使用頻度が高いために二つ以上の形を耳にすることが多く、使用不使用の判断に迷いが出るせいもあろう。

語彙項目については、家・校長それぞれの場面に分けた時の1軸の値はかなり高く、きれいに語形が分類されたことを示す。二場面合わせての1軸の値も高い。2軸は少し落ちるが、0.5ぎりぎりだから、そう悪くない。3軸以下も一応分析の対象とする価値はありそうである。

6-1 1・2軸の値

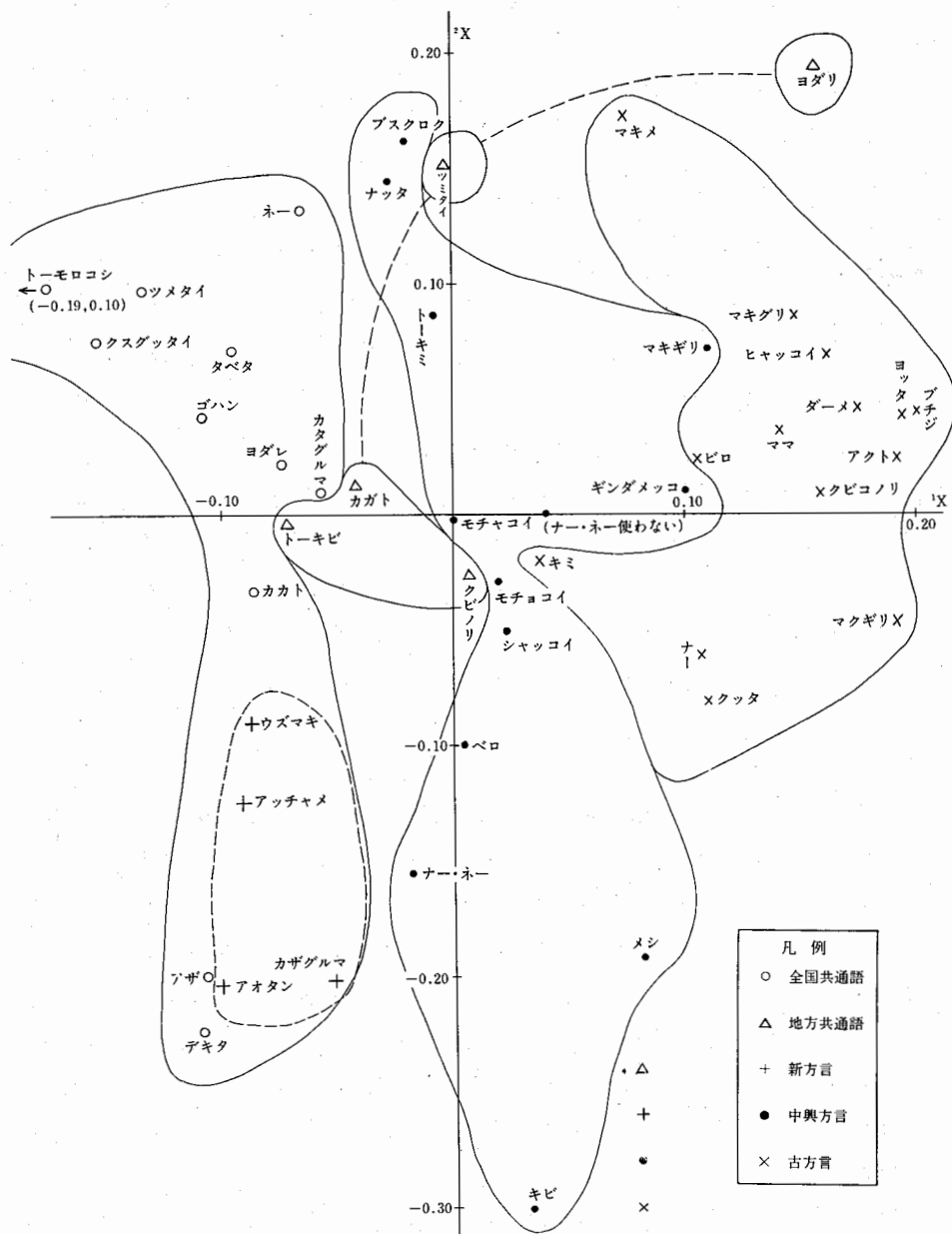
まず単用語形のみについて、家の中での場面に適用して得られた第1軸・第2軸の値によって語形をプロットすると、図6-1のようになる。得られた語形がかなり広範囲に分離している。これを第5章であげた年齢層別のグラフで増加カーブか減少カーブか、全国共通語形と一致するか、などの基準に照らし合わせてみると、第1軸に沿っての分布状況はきれいに説明がつく。便宜上ここでは、後に採用する語形の五分類(全国共通語、地方共通語、新方言、中興方言、古方言)を先取りして、図6-1に符号化して示しておく。第1軸は全国共通語、中興方言・古方言をかなりきれいに分ける。地方共通語は中興方言の周囲にちらばる。第2軸は新方言を全国共通語から分離するほか、中興方言のうちのキビ・メシ・ベロ、地方共通語のヨダリなどを分離する。

第5章の各グラフと照合すると、1軸はグラフの年齢カーブのパターンとよく一致する。1

軸プラス側の語形は老人に卓越し、マイナス側の語形は若者に卓越する。1軸は同時に年齢と関係するらしい(後述)。

併用の答を単用の答へと分解した上で林3を適用するとどうなるか。図6-2に示す。2軸の+と-の値が逆転し、図の照合に不便だが、この+と-の方向については意味がなく、全語

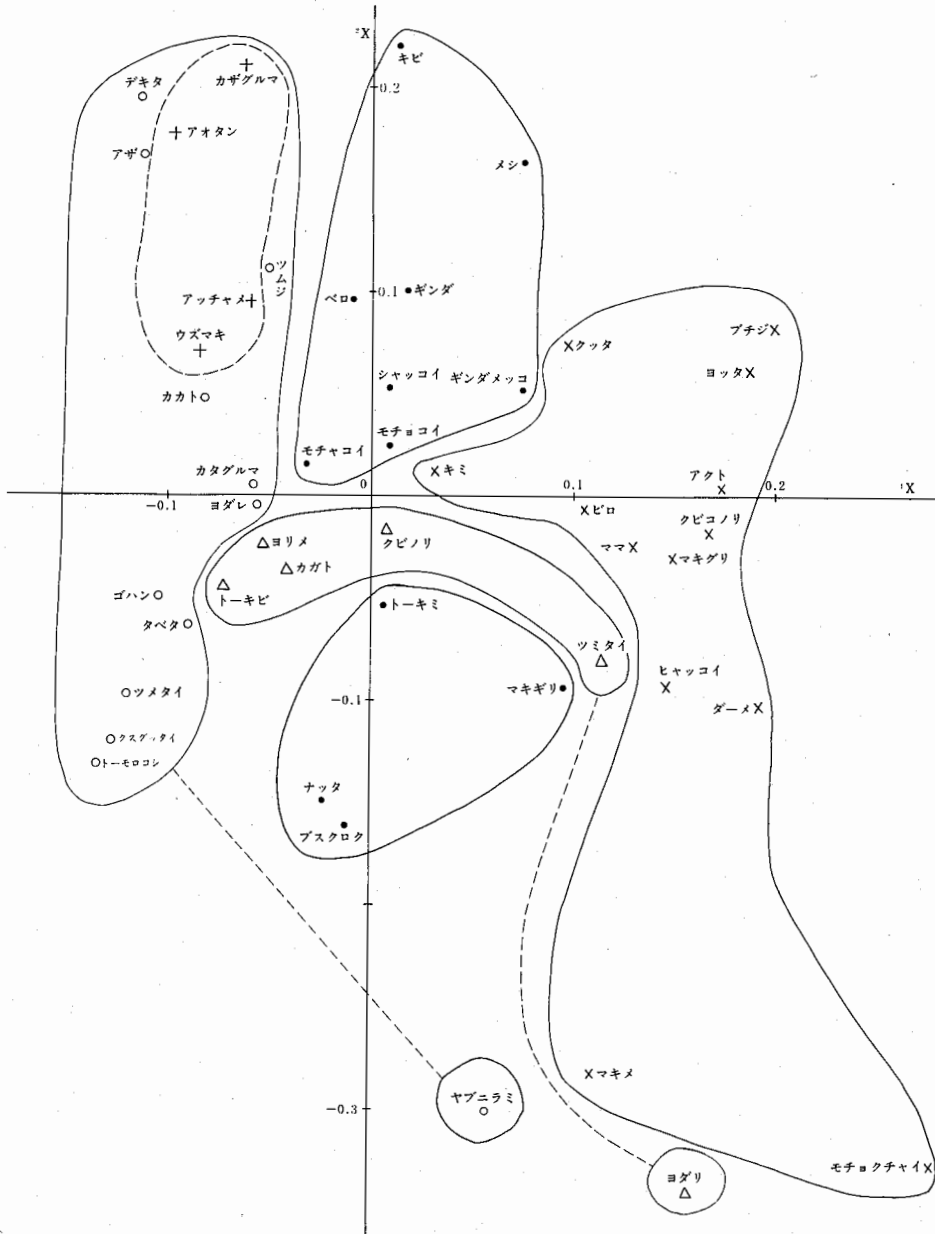
図6-1 島野語彙 林3類の1・2軸の値(単用のみ)家での場面



形・全ケースの値をすべて合計すると0になるように与えただけである。

図の全体としては6-1と6-2は似ており、1・2軸の働きも同じと見られるが、個々の語形の位置はくい違う。図6-2で中興方言が2軸の値によって二つに分断され、間に地方共通語が割り込む形になることが目立つ。後述の語形の五分類とは、6-2の方がよく対応する

図6-2 島野語集 林3類の1・2軸の値(併用処理後)家での場面



ようである。

次に、校長との場面での答に適用した時の1・2軸の値を示す(図6-3)。対照のため、併用を単用に分解した後の適用結果(図6-4)も見る。やはり2軸の値は逆転しているが、全体としては似たパターンである。同様に語形の五分類による符号を与えておく。

図6-3 島野語彙 林3類の1・2軸の値(単用のみ) 校長との場面

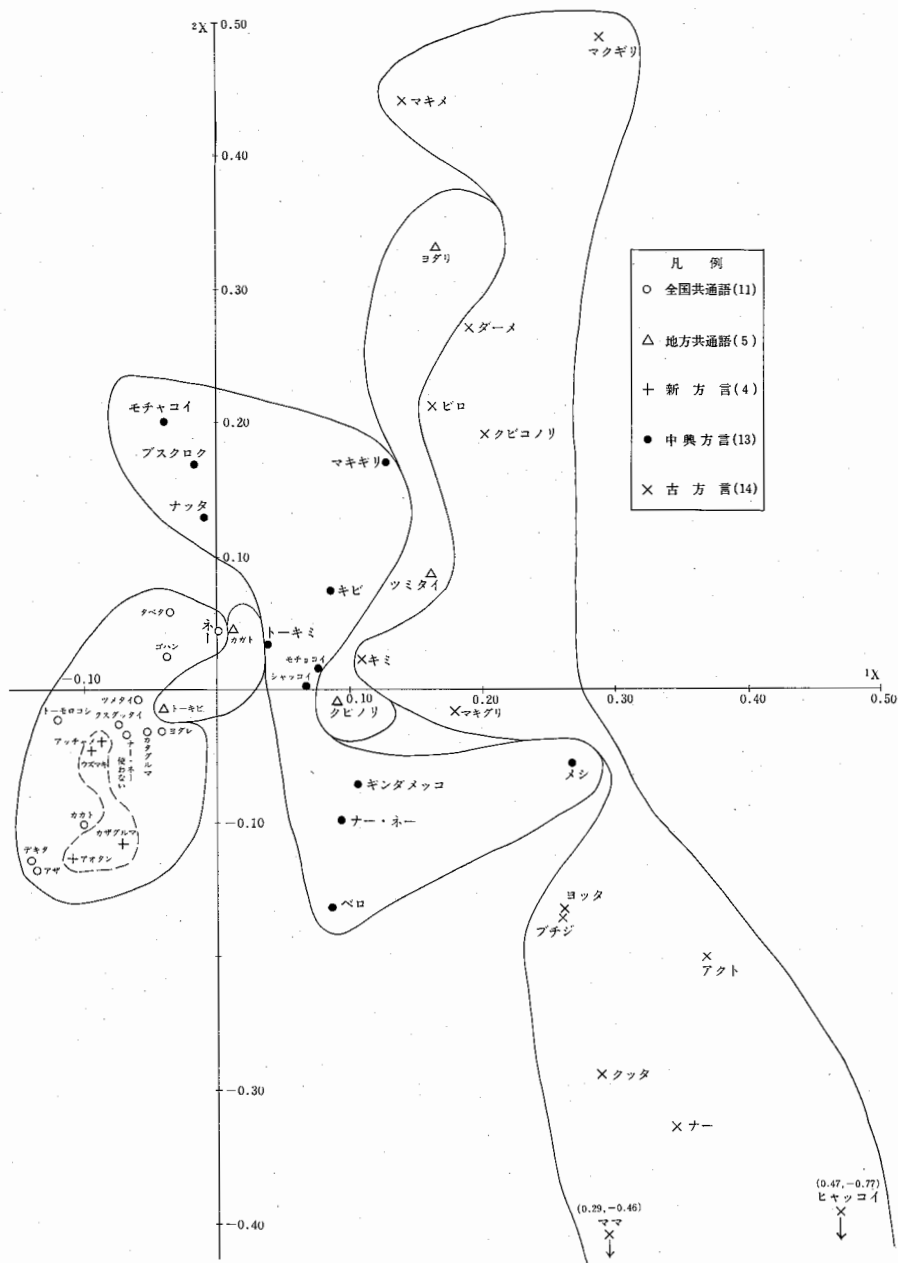
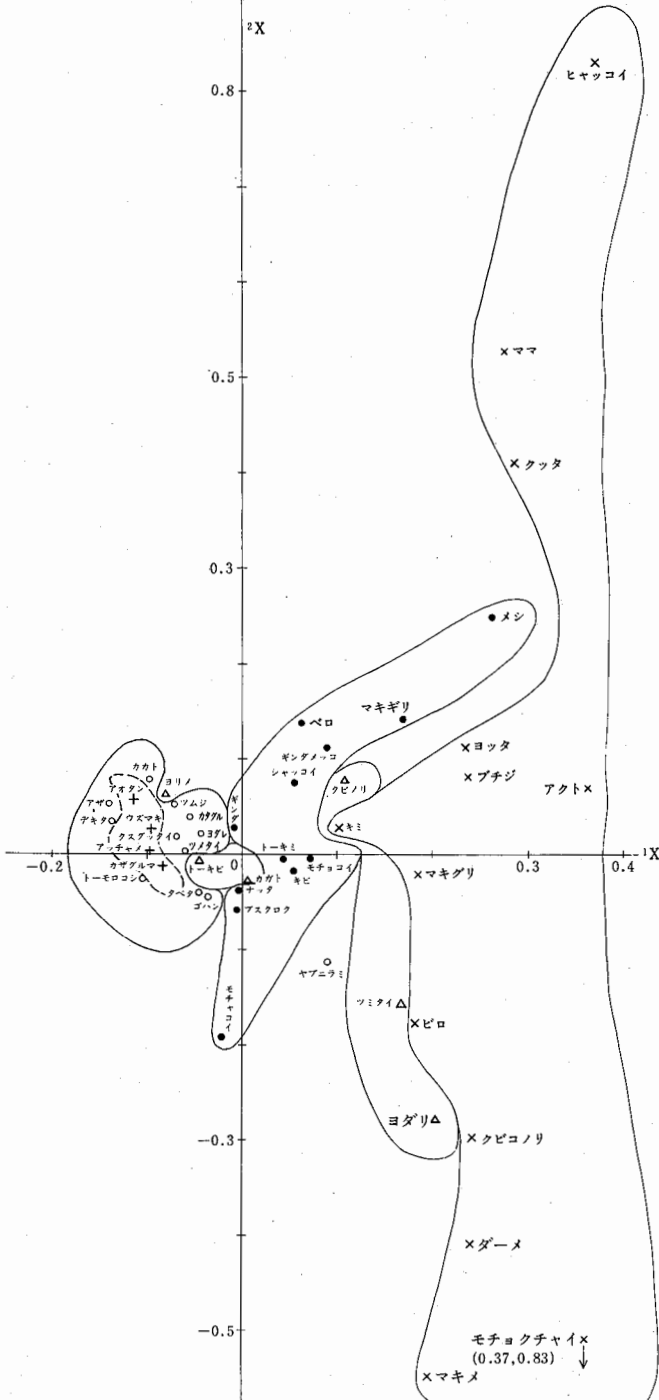


図6-4 島野語彙 林3類の1・2軸の値
(併用処理後) 校長との場面



共に、1軸は語形の新古を判別する働きをする。しかし語形の五分類は1軸の値だけではできない。2軸は、家での場面と違って、新方言とはほとんど関係を持たない。ことに併用処理後の図では新方言は全国共通語形の中に埋もれている。2軸はむしろ古方言の内部を分離する軸である。

家での場面と違って全国共通語・新方言は密集し、方言の側の散らばりが大きい。校長との場面ではほとんどの人が全国共通語に傾くため、ごく少数の、校長にも方言を使うと答えた人の答の散らばりが大きくなったのである。

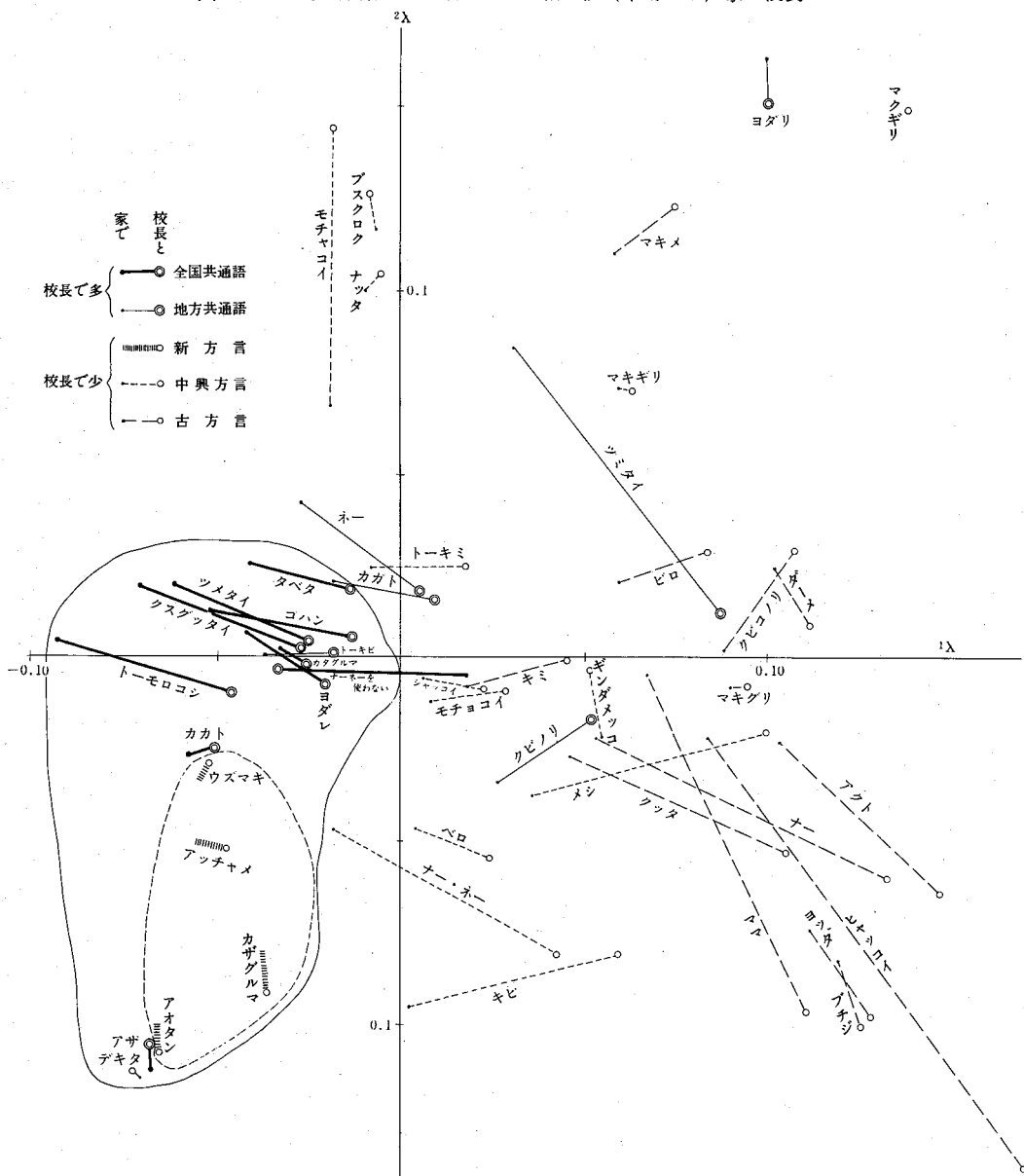
「ナー、ネーを使わない」
が図6-3では全国共通語と
同じグループに入る。たしか
に、改まった場面では終助詞
を使わないのが共通語的であ
る。

次に、家・校長の両場面での答を統合処理した結果を示そう(図6-5)。併用処理後の図も一緒に示す(図6-6)。家・校長の場面の値を線で結んで示す。丸印の端が校長との場面での答の値である。語形の五分類は線の形で示す。2軸の値は逆転してい

るが、全体のパターンはかなり異なる。処理した語形に多少ずれがあるせいもあるだろうが、もっと他の原因によるのだろう。各語形の配置、語形の五分類の相対的位置はよく似ているが、二場面の答を結ぶ線の傾きと長さは、いくつかの語形で顕著な違いがある。これらは、いずれかの場面で併用の形で得られることが多い語形である。

一軸は前述のものと同様に、語形の新古（方言形と共通語形）を分ける。2軸は新方言を分

図6-5 島野語彙 林3類の1・2軸の値(単用のみ) 家+校長



離すると共に、古方言・中興方言のいくつかの語形をも分離する。

これまでの図においてもそうであったが、ヤブニラミは、図では他の全国共通語と離れた所に来る。この島野では共通語形としての市民権をまだ完全には得ていない。また地方共通語のいくつかは、全国共通語の中に入ったり、中興方言のまわりに散らばったり様々であった。これは、その実質が雑多であることを示している。

図6-6 島野語彙 林3類の1・2軸の値(併用処理後)家+校長

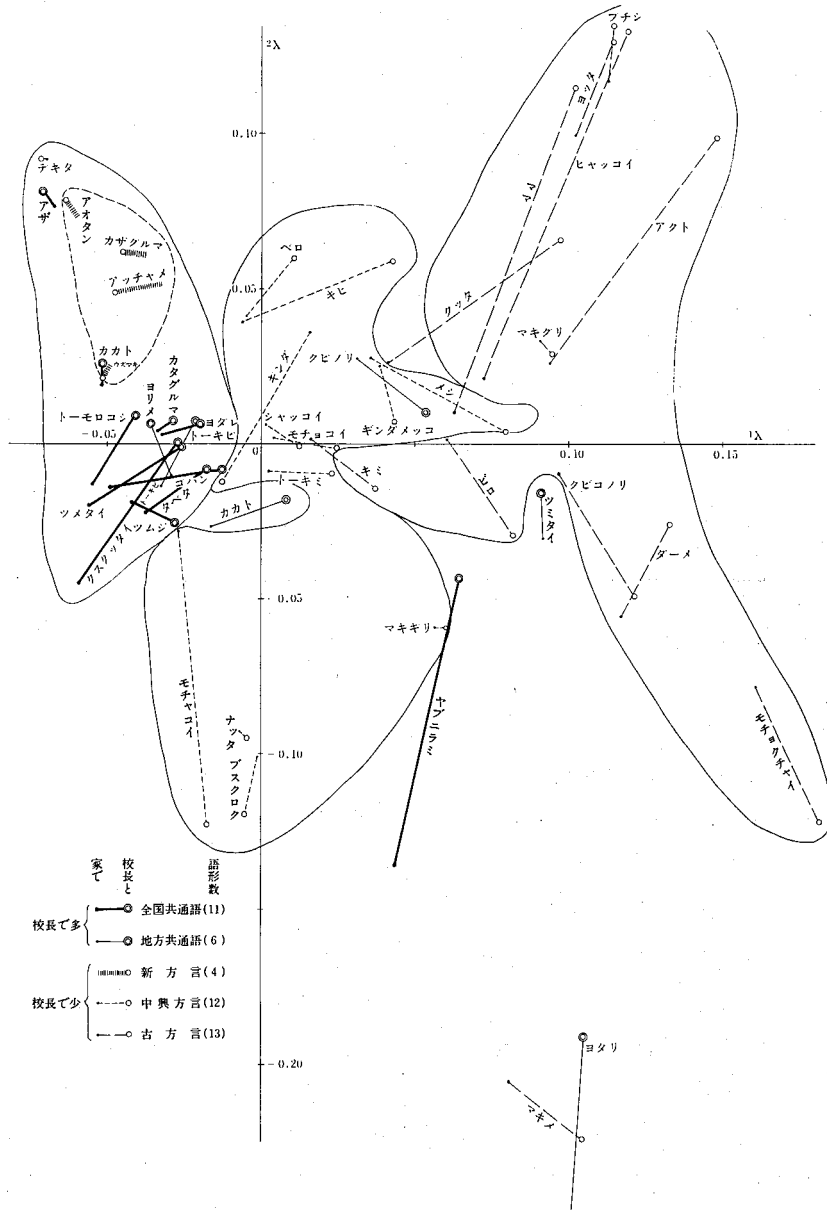


表 6-2 語形の五分類

調査項目 番 号	項 目 名	共 通 語					
		全 国 共 通 語			地 方 共 通 語		
1	つめたい	ツメタイ	59	150	ツミタイ	9	30
2	とうもろこし	トーモロコシ	8	51	トーキビ	54	81
3	よだれ	ヨダレ	124	158	ヨダリ	5	6
4	かかと	カカト	36	40	カガト	132	164
5	あざ〔が〕	アザ	25	30			
5'	できた	(デキタ)	56	52			
6	かたぐるま	カタグルマ	119	126	クビノリ	11	15
7	つむじ	【ツムジ】	8	9			
8	やぶにらみ	【ヤブニラミ】	7	11	【ヨリメ】	22	25
9	くすぐったい	ススグッタイ	41	111			
15	ごはん〔を〕	ゴハン	117	173			
15'	たべた	タベタ	121	159			
16	なあ・ねえ	〔使わない〕	16	66	〔ネー〕	94	122
〔 〕なしの語形の数		11	家	校長	6	家	校長

6-2 語形の五分類

以上の図示に利用した語形の五分類とは、実は以上の図と第5章で示した図とを照合して得られた結論であり、何度かの訂正と試行錯誤を経たものである。記述の順序と作業の順序を一致させずに結論を先取りする形で示した。

五分類の第1の基準は、各語形の校長との場面での増減である。併用を単用に分けたあと絶対数の増えている語形をこの地域での共通語形とみなした。(人によっては校長の場面で用いないことも考えうる。ここでは住民全体としての傾向を重視することにした。)

第2の基準として、全国共通語と語形が一致するかどうかで、この中を二分した。一致しないものは「地方共通語」としておく。(正確には島野〔7, 8区〕共通語である。)なお、島野で得られた「全国共通語形」は、すべて校長での場面で使用者が増える。ヤブニラミのように、語形の配置の全体的パターンからはずれるものはあるが、場面の使い分けから見て島野で方言扱いされているような全国共通語形は、調査語彙の中にはなかった。

校長との場面で使用者の絶対数の減るものは、島野で「方言」と考えられていると見なして

方			言					
新 方 言			中 興 方 言			古 方 言		
			シャッコイ	150	44	ヒャッコイ	23	2
			トーキミ	41	35	キミ	123	56
			キビ	11	5			
			ベロ	38	14	ビロ	70	26
						アクト	50	7
アオタン	52	35	ブスクロク	86	69	ブチジ	33	23
			ナッタ	99	94	ヨッタ	40	26
カザグルマ	10	10				クビコノリ	40	25
ウズマキ	84	82	マキギリ	28	20	マキメ	6	5
						マキグリ	47	41
						〔マクギリ〕	1	1
アッチャメ	36	22	【ギンダ】	9	4	ダーメ	14	14
			ギンダメッコ	61	37			
			モチョコイ	153	86	【モチョクチャイ】	7	3
			モチャコイ	14	5			
			メシ	45	11	ママ	69	11
						クッタ	104	19
			〔ナー・ネー〕	51	21	〔ナー〕	62	7
4	家	校長	12	家	校長	13	家	校長

よからう。これを、年齢層による分布という第3の基準により三分類してみた。まず、どの図でも全国共通語形の近くに分類されるアオタン、カザグルマ、アッチャメ、ウズマキは、第5章のグラフによればすべて若い世代で出現するもので、「新方言」と呼ぶことにする。その残りも細分できる。第1軸の値が0のあたりになるブスクロク、ナッタ、モチャコイは、年齢層別グラフによれば、壮年層で多くなり、若年層で再び減少するものである。これを「中興方言」と呼ぶ。これに対し1軸の値が大きいプラス値をとるアクト、ダーメ、クビコノリなどは、年齢層別グラフによればほぼ老人層にのみ現われるものである。これを「古方言」と呼ぶ。第1軸のプラス側の語形は、「中興方言」「古方言」のいずれかに分類することができる。(なお、図6-2からわかるように、中興方言は更に二分できそうである。)

なおデキタはアオタンともアザとも結びつきうるため事情が複雑である。(また、ナッタはブスクロク以外にアオタン(二)、アザ(二)とも結びつく。)一応デキタは全国共通語形のグループに入れておくが、校長との場面で増えてない。

以上の五分類を、単語ごとに上に表示する(表6-2)。単用のみの林3でのみ扱った語形は

〔 〕内、併用処理後の林3でのみ扱った語形は【 】内に示す。各語形の右の2欄の数字は家、校長の2場面での併用処理後の使用者数。ただし〔 〕つきの語形の場合は単用のみの使用者数。デキタを除き、「共通語」は校長で多く、「方言」は同数以下になる。

この五分類は島野七・八区全年齢層の調査結果によるもので、道南地方もしくは北海道全体の傾向とは必ずしも一致しない。

従来、北海道のほぼ全部（ことに内陸部）で使われる非全国共通語的語形を「北海道共通語」と称することがあった。ここの語形でいえば、地方共通語のトーキビ、カガト以外に、中興方言・古方言のシャッコイ、ハッコイ、トーキミなどがそれにあたるのだろう。またここで「地方共通語」に分類されたツミタイ、ヨダリ、クビノリは地理的観点のみからいえば道南方言とってよく、ヨリメはやぶにらみとは意味の違う別語となる。

しかしここでは、この狭い地域内の住民の意識と行動によって分類し、これを以下の分析にも適用する。

6-3 「共通語」「地方共通語」「新方言」

上で用いた「共通語」という術語について、一言する必要がある。ここでは校長との場面（ということは、いわゆる調査上のテクニックとしての「改まった場面」）での使用者の多い語形（ということは、住民にとっての「改まった言葉」「いい言葉」）を「共通語」という名で呼んだ。

術語として共通語は、方言という対立概念のほかに標準語という対立概念も持つ。この標準語の定義・性格づけについては鈴木重幸氏の指摘⁵⁾がすぐれている。文章語を背景とし、意識的な習得の対象となりうるなど、従来見逃されていた性格が指摘されている。

共通語については、ふつう言う全国共通語のほかに、地方的色彩を帯びた地方共通語をも考えるべきことが指摘されている⁶⁾。これは言語体系としての「地方共通語」である。これを第1の意味とする。

一方言語地理学の世界では、中心都市から周囲へひろがりつつある語形で全国共通語と一致しないものを「地方共通語」「地方標準語」と呼ぶこともある⁷⁾。これは単語についての概念である。これを第2の意味とする。

第1の意味の（体系としての）地方共通語は、定義上、公の、改まった場面で使われるものであり、方言との使いわけを受ける。全国共通語を目ざしつつも、使いわけが不完全なために

5) 鈴木重幸「標準語論おぼえがき」教育国語30(昭47)

6) 柴田武『日本の方言』（岩波新書307）、柴田武『方言の見方・考え方』（教育図書、昭39）（『覆刻文化庁国語シリーズⅣ』教育出版、昭48に再録）

7) 徳川宗賢「言語地理学調査における質問と答え」国語学69集(昭42)

生ずる現象もあれば、地方的な現象と気付かれていないために用いられる現象もある。

第2の意味の(語形としての)地方共通語は、地域差、年齢差等を考慮して得られるもので、その地方における新形ということである。全国共通語化が圧倒的に進行しつつあるかのように言われている中で、このような新しい地域性が今なお発生しつつあることの意義は大きいが、これを「地方共通語」と呼ぶことには問題がある。その語の他の(衰退しつつある)語形にくらべ通用範囲は広く、理解語として進出中の等語線を形成することはあろうが、個々の話し手の意識にあるのは(もし他の語形と併存するならば)それが新形である(最近使うようになった、若い人達が使う)ということであろう。新形が必ずしも改まった場面と結びつかないことは、上記の分類で出て来た「新方言」の例でも明らかである(逆に古形でも高い場面と結びつきうるのは「地方共通語」のいくつかに表われている。)更には、スラング・流行語等を考えれば納得が行く。

従って第1、第2の意味の「地方共通語」は、相容れない概念を含む。共通語という名づけの源泉は、確かに広い地域の人々に共通に用いられるという性格にあり、(方言形よりも)通用範囲の広い方の語形を共通語形と呼ぶのは不適切とは言えない。しかし現実には、もし方言形と共通語形がある地域(か話者)に併用されるとしたら、共通語形は改まった場面で用いられるものであり、「いい言葉」という意識を伴うことが多い。通用範囲の広さというのは学者の判定することであって、一般の言語意識、言語行動には普通は存在しない。従って「共通語」という概念は改まった場面での語形に適用するのがよからうと思われる。これを「標準語」と名づけることも可能であるが、標準語は、一方では現実には存在しないとか、国家等で定めるとか、美しく理想的な単一のもの、というような性格づけがされ、また、文章語を背景にするとか、意識的な学習の対象になるという性格づけもあるので、島野で得られた「地方共通語」を「地方標準語」と呼ぶことは許されない。

このような場面差を考慮に入れての「地方共通語」の存在は、最近いくつか指適されている。九州南部でドシコよりイクラが、イクラよりもナンボが熊本や東京に行って使う言葉とされ⁸⁾、長野県南部では、とうもろこしを指す多くの方言形が松本や東京で使う言葉としてはモロコシに変わる⁹⁾。しかしこれは調査技法としては通用範囲についての話者の意識を試したもので「改まった場面」とか「いい言葉」に関するものでない。これについては、校長と話す時とか、改まった場面の言葉を聞いた岩手県雫石¹⁰⁾や富山県西南部の分布地図¹¹⁾の例があるが、方言形と

8) 徳川宗賢・W. A. グロータース『方言地理学図集』(秋山書店、昭51) p. 72。他にいくつかの図が引用されている。

9) 信州大学方言研究会『木曾及びその周辺地方の言語地図、語彙編Ⅰ』(昭51) 42~44 図

10) 大川ますみ「岩手県雫石方言における地域差と場面差」日本方言研究会第18回研究発表会発表原稿集

11) 真田信治「標準語の地理的背景」言語生活 284 (昭50)

図 6-7 島野語彙 林3類の2・3軸の値(単用のみ) 家での場面

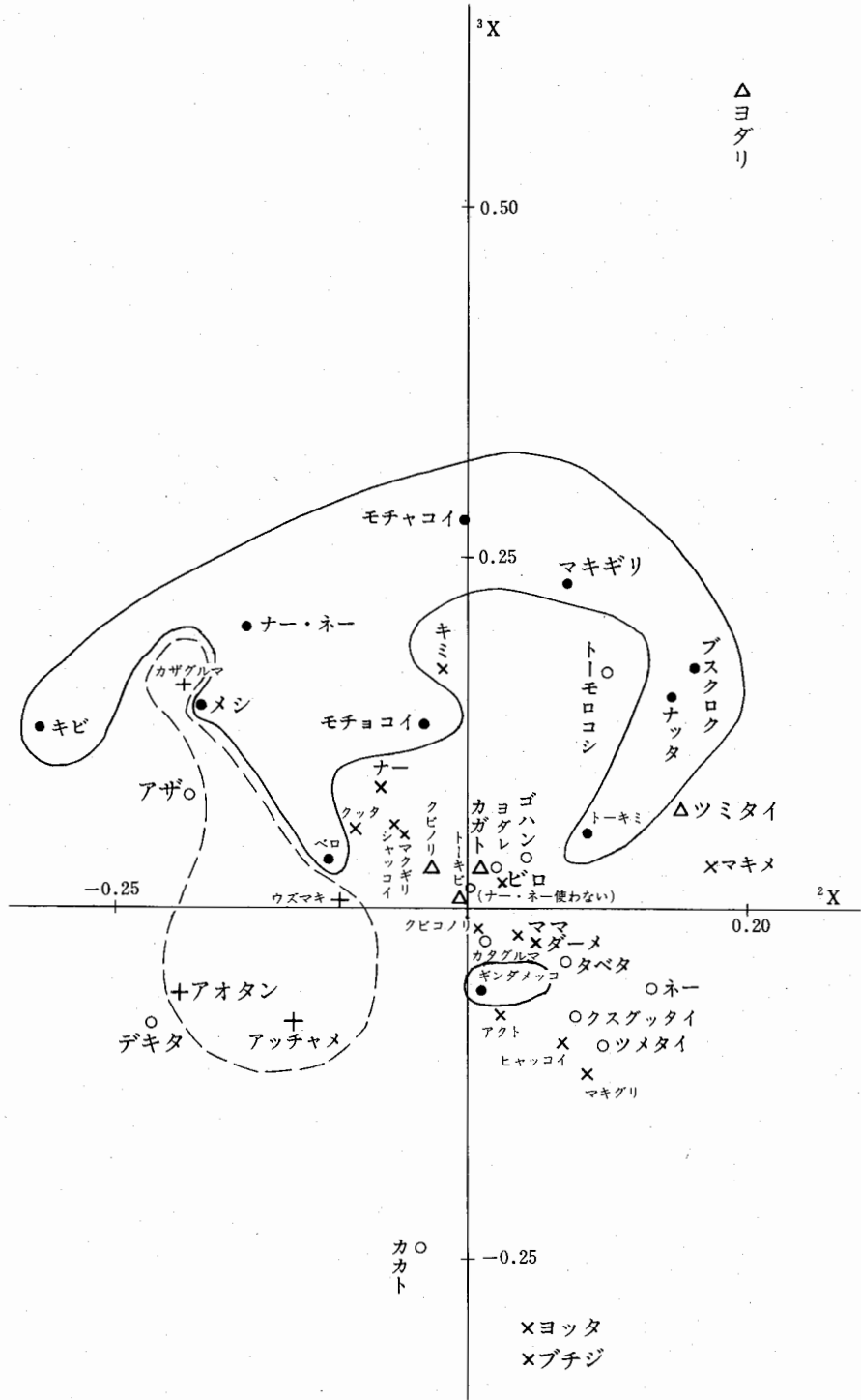
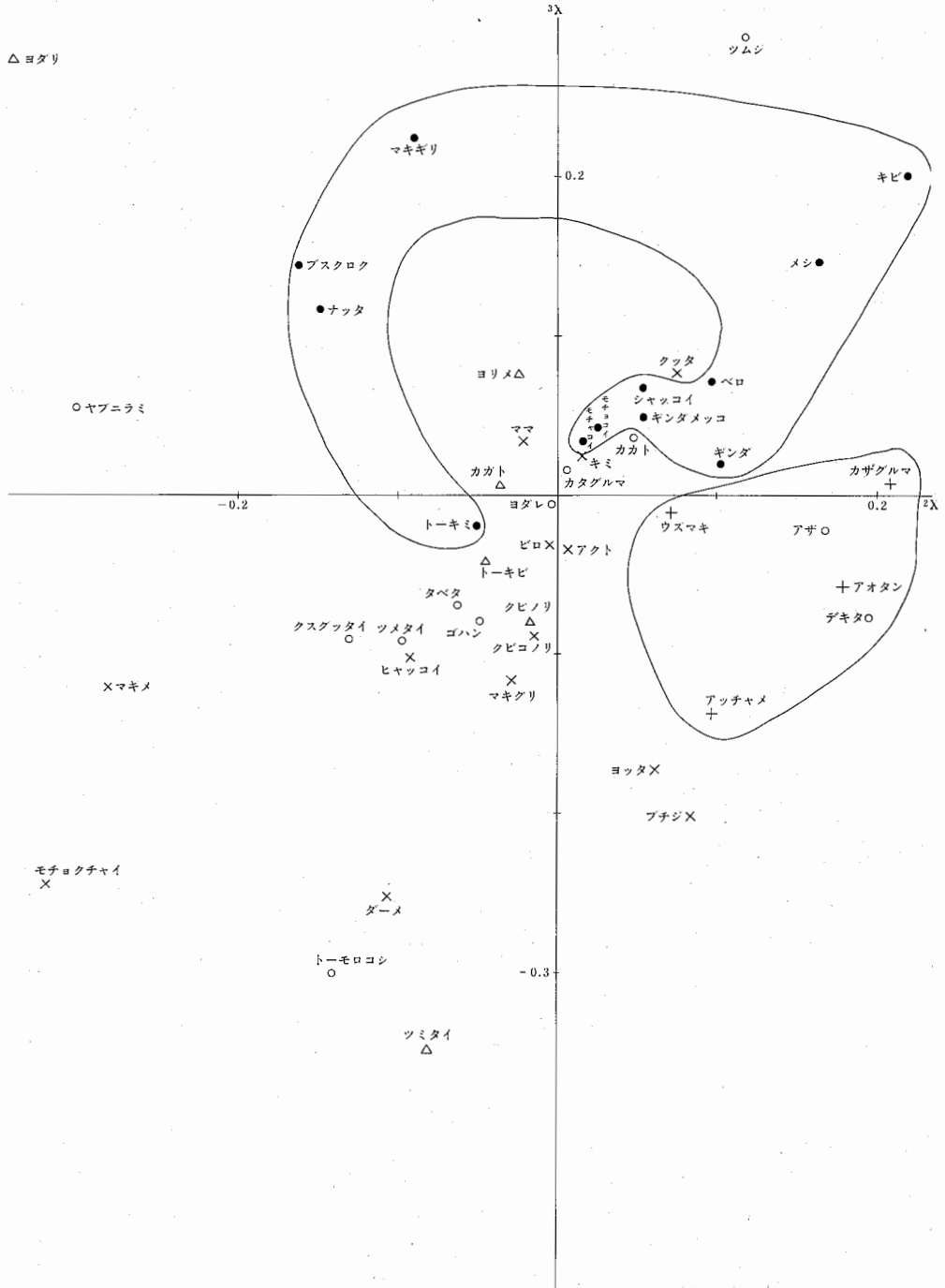


図 6-8 島野語彙 林3類の2・3軸の値(併用処理後)家での場面



全国共通語形との使い分けに関する例しか報告されていない。

なお、年齢層別分布図（や地理×年齢図）で若い世代にひろまりつつある語形が全国共通語形と必ずしも一致しない例、つまり「新方言」は、下北半島¹²⁾、瀬戸内海域¹³⁾、九州¹⁴⁾、その他¹⁵⁾の調査で多く見つかっている。

6-4 3軸の値

以上、各種の処理における1・2軸の値によって語形を図示し、語形を五分類することができた。1軸が全図を通じてこの五分類とかなりよく対応すること、2軸が新方言などを分離する働きをもつことがわかった。では3軸の働きはどうだろうか。

単用のみ（図6-7）と併用処理後（図6-8）の家での場面の2、3軸の値を示す。2軸の値が逆なため、左右反転している。3軸で極端な値をとるのは、（単用のみと併用処理後で違うが）地方共通語や全国共通語、古方言のいくつかの語形であるが、いずれも、回答者の数が少ないためにこうなったものと思われる。

2軸で二部分にわかれた中興方言が3軸では共にプラス値をとり、古方言と全国共通語の多くが（単用のみ（図6-7）と併用処理後（図6-8）とでやや違うが）マイナス値をとることを重視し、3軸は中興方言とその他を分離する働きをすと言てよい。

年齢的には、3軸は老一若に並んだもののうち中間的なものを分離すると言える。

同じことは図6-9に示す校長との場面での分析結果についても言いうる。この場合3軸によって中興方言と古方言がきれいに分離し、全国共通語形と新方言は中央に収束し、地方共通語もその周囲に集まる。

しかし図6-8と図6-9とは、各語形の配置をよく見ると、かなり違っている。場面による出現の仕方が相当変わることを示す。恐らくそのせいであろう、図6-10の、家、校長2場面での3軸の値は、中興方言との関係をほとんど示さない。むしろ第3象限のマキメ、モチョクチャイ、ヨダリ、ダーメとか第1象限のハッコイなどの、使用者の少ない語形（古方言）が端に来る。

12) 拙稿「集落内の言語差——下北半島上田屋——」北海道大学人文科学論集 11 (昭50) で「くすぐったい」のモチョカリが進出した例。

13) 藤原与一『瀬戸内海言語図巻上・下』（東大出版会、昭49）および『（付録説明書）瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』（東大出版会、昭51）の多くの図版において、近隣の老人層の語形の分布範囲が広がったり、西日本共通語と見られるものがほぼ全域に普及する例が見られる。

14) 同じ現象は、九州方言学会『九州方言の基礎的研究』（風間書房、昭49）の分布図にも見られる。

15) 国立国語研究所報告 53『言語使用の変遷(1)——福島県北部地域の面接調査——』（秀英出版、昭49）においても、「恥ずかしい」でカッコワリーが若年層で増えた例がある。これらについては馬瀬氏の先駆的な業績がある。馬瀬良雄『信州の方言』（第一法規、昭46）の七参照。

図6-9 島野語彙 林3類の2・3軸の値(併用処理後)校長との場面

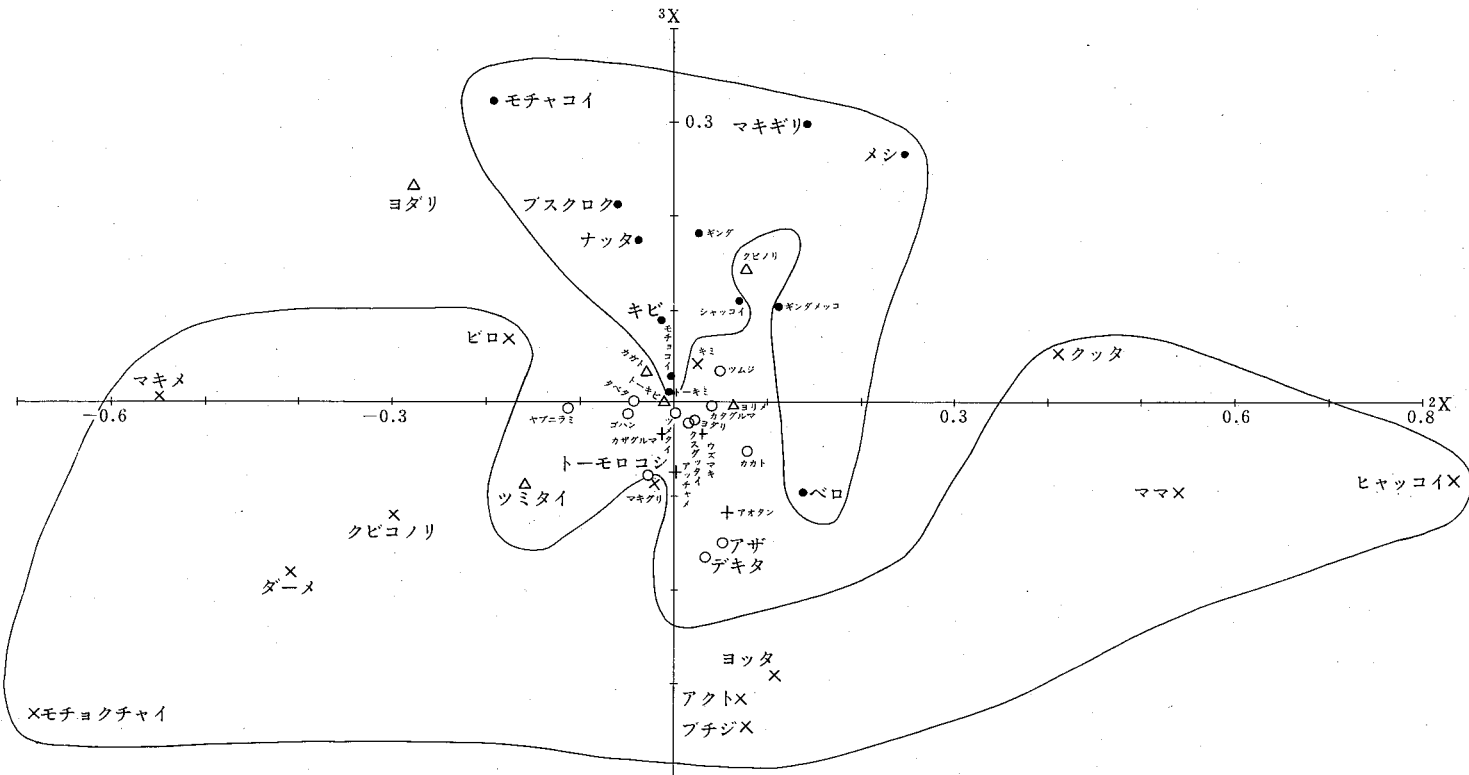
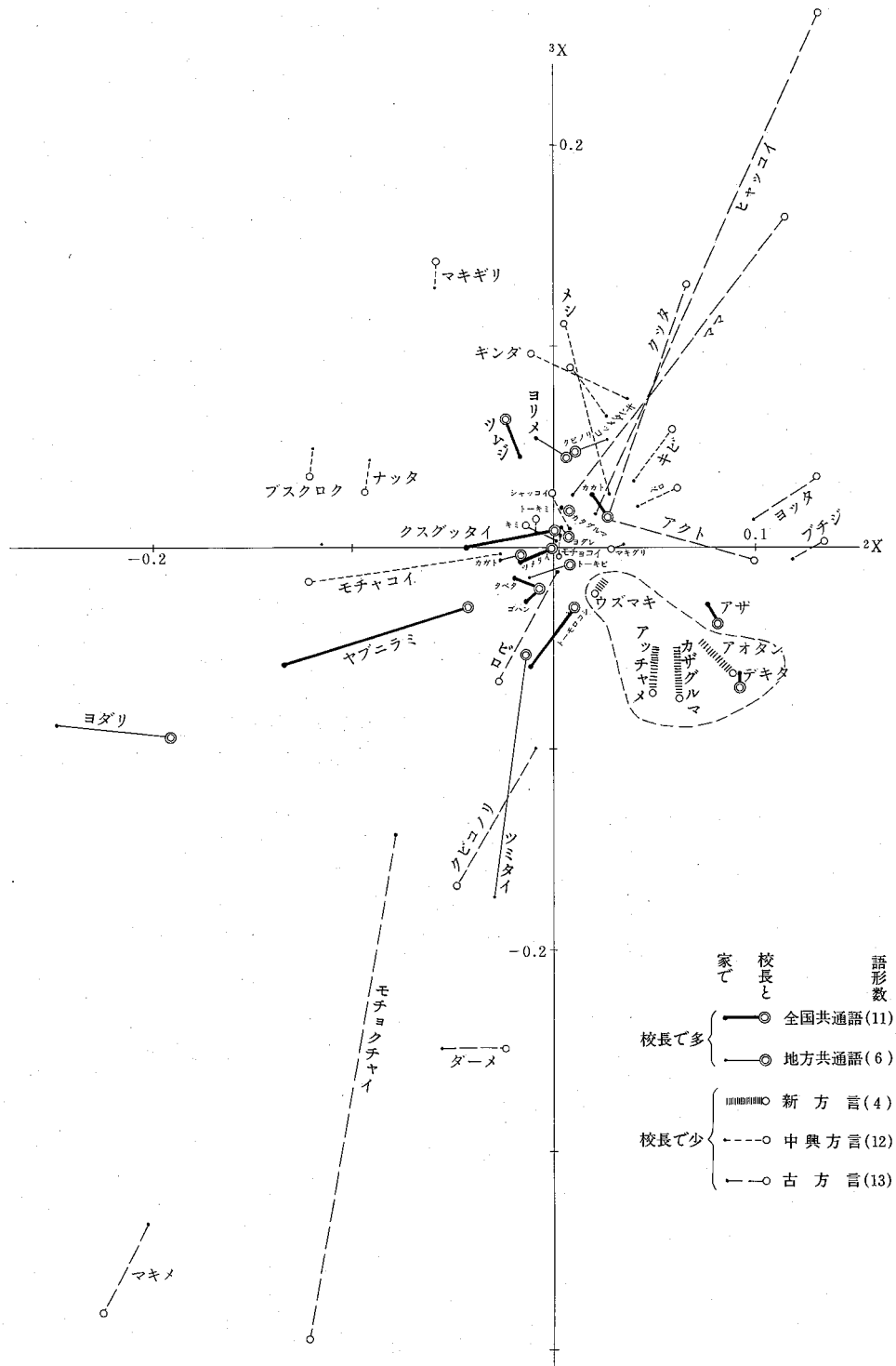


図6-10 島野語彙 林3類の2・3軸の値(併用処理後)家+校長



6-5 1・2・3軸の値と非言語的条件

以上、林3による語形の分類を試みた。語形の分類はかなり年齢層と関係がありそうである。それでは他の非言語的（社会的）条件との関係はどうだろうか。

林3類は変数（語形）とケース（話者）を同時に分類する方法であり、各軸の値は個人個人にも与えられる。図6-1～9同様に個人をプロットすることもできるが、個人に分解してはかえって有意味な結論に達することが困難になる。話者を属性（社会的要因等）によって様々に分類した上で、グループ毎の平均点によって考察してみよう。これを1・2軸の値によってプロットしたのが図6-11以下である。家（6-11）、校長（6-12）、家+校長（6-13）について一つずつ掲げるに止める（6-13は2軸の値が逆転する。）

予測通り1軸は年齢差をはっきり示す。図6-11では戦前と戦後との間に大きな差があることがわかる。1軸はまた職業とも密接な関係を示すが、これは職業と年齢とが対応しているためと見るべきだろう。学歴は、三代（旧制、新制、在学中）にわけた場合にやや1軸にそってのびるが、学歴自体の働きとは思えない。

2軸は社会的属性とそう大きな相関を見せないが、男女差がやや大きく働いているようだ。

図6-11 島野語彙 林3類(単用のみ)社会的条件毎の1・2軸の値 家での場面

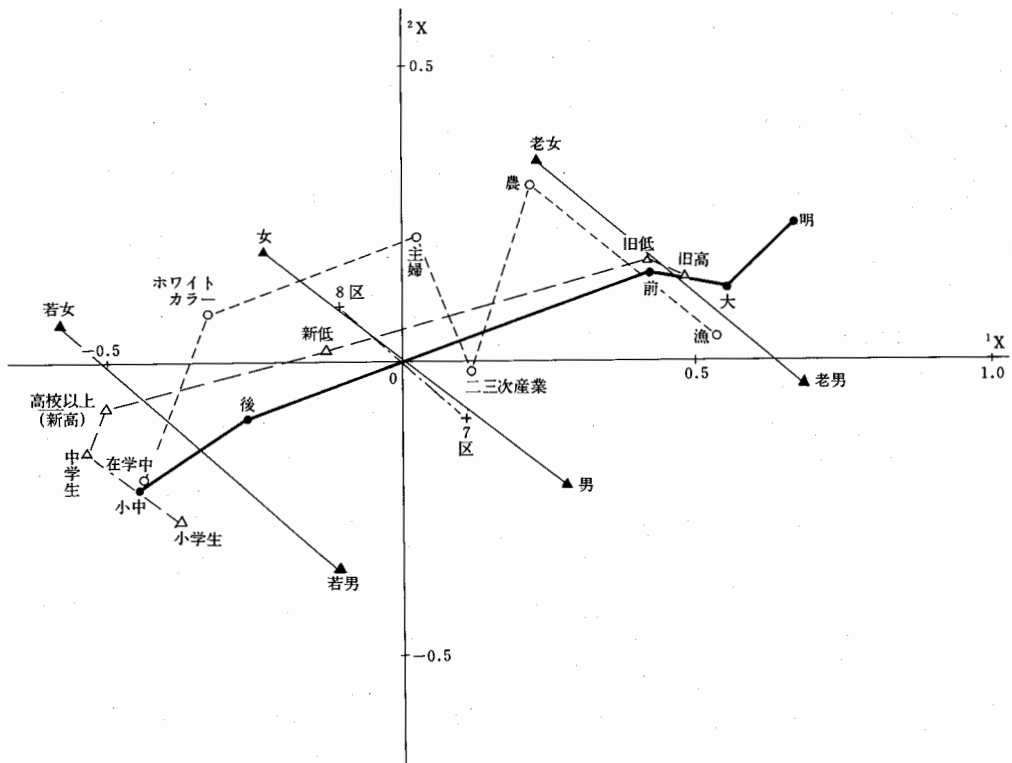
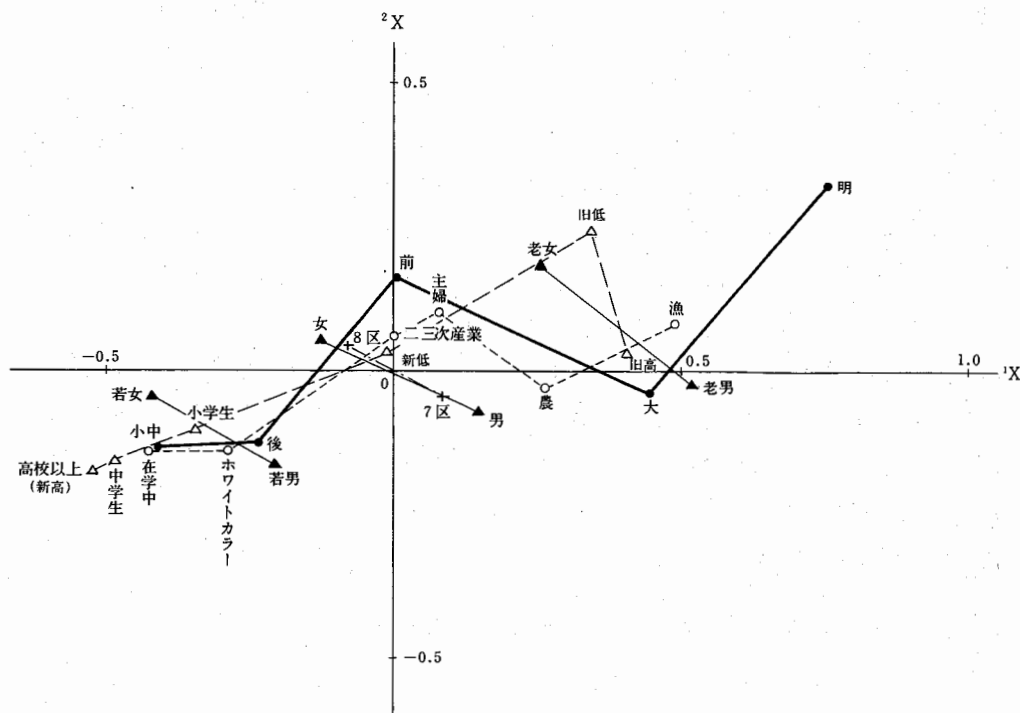


図6-12 島野語彙 林3類(単用のみ) 社会的条件毎の1・2軸の値 校長との場面



男女差は、老若二年齢層に分けた上でクロスさせてみても左上方向が女で、一定した関係を示す。若い女性と年老いた女性は方言使用において両極端の態度を見せるとよく言われるが、ここにおける男女差はそれとは少し違うようだ。1・2軸を合わせ、左上方向が女性語的傾向のある語、右下方向が男性語的傾向の語と見うる。7・8区の違いともわずかに対応を示しているが、これは成員の割合の違いによるのかもしれない。職業で言うと、農業・主婦・ホワイトカラーが女性語側に傾き、漁業・二三次産業が男性語側に傾くのは、うなづける傾向である。なお第3象限で、小学生が中学生より右下に来、若年男性が若年女性より右下に来ているのは、図6-1の第3象限にある「新方言」をよく使う層が誰であるかをも示していると見てよい。

他に方言、共通語の使いわけ意識に関しても高い値が得られたが、図では略す。このほかの社会的属性ごとの平均値は、1・2軸のみならず他の軸でも低い。

図6-12を見よう。1軸はやはり年齢差を大きく示すが、今度は明治と大正と戦前との間が大きく離れ、若い人の間はそう離れない。職業差はある。男女差や区の違いは大変小さくなっている。学歴を旧制・新制・在学中にわけて考察すると、1軸の左端に来るのが高校卒以上で、中学生、小学生はその右に並ぶ。共通語使用能力が年齢・学歴と共に進むこと（または前述の「共通語化のおくれ」）を示す。

図 6-13 島野語彙 林3類 (併用処理後) 社会的条件毎の 1・2 軸の値 家+校長

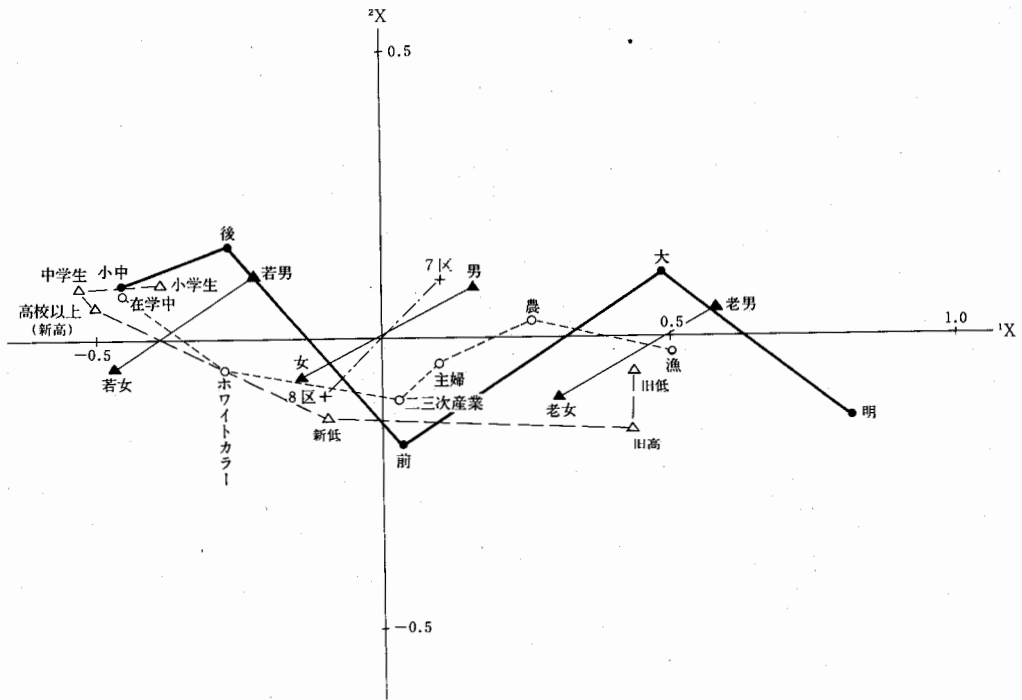


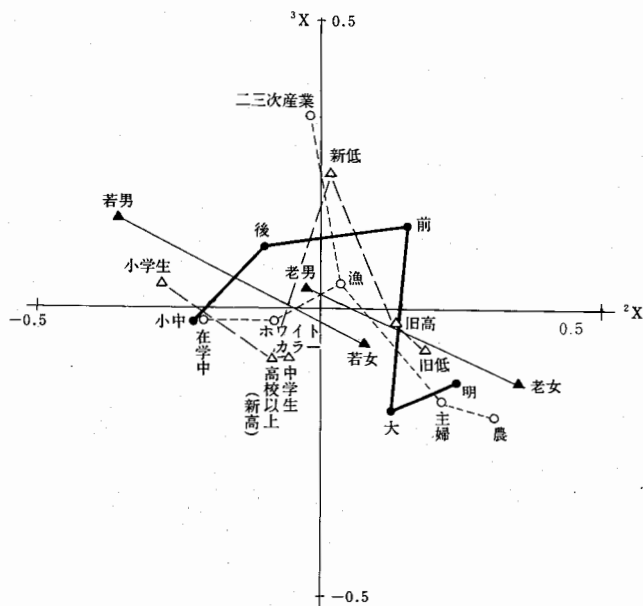
図 6-12 は全体として図 6-11 を上下に押しつぶした形である。1 軸によって語形の違いの大部分が説明されるわけである。

図 6-13 は併用処理後のもので家と校長との両場面を一緒に処理した結果による。2 軸の値が逆転しているから図はうら返しになる。全体として図 6-12 の校長との場面の方に似る。非言語的條件の働き方もほぼ同じである。

次に第 3 軸の作用について見よう (図 6-14)。単用のみの家の中の言葉を代表としてとりあげる。(併用処理後の図もパターンは同じである) 3 軸のプラス方向に二・三次産業従事者・新制低学歴が来る。年齢層でいうと昭和生まれである。また第 2 象限で若い男が極端な値をとっていることが目立つ。図 6-7 と照合すると、手に職を持つ^{きか}壮んな働き手が中興方言の荷い手であると思われる。

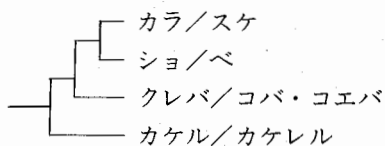
これにくらべると、かえって第 2 軸の方がとらえにくい。家での場面 (図 6-11) では、年齢差を反映するほかに男女差を分離する働きがあると見た。この関係は図 6-14 のほぼ 2 軸に沿う男女差 (と年齢差) によく現われている。校長との場面 (図 6-12) では、男女差の分離機能はやや弱まる。むしろ 1 軸プラス側で明治生れと大正生れ、マイナス側で戦前生れと戦後生れおよび小中学生とを分離するものとも見うる。

図6-14 島野語彙 林3類（単用のみ）社会的条件毎の2・3軸の値 家での場面



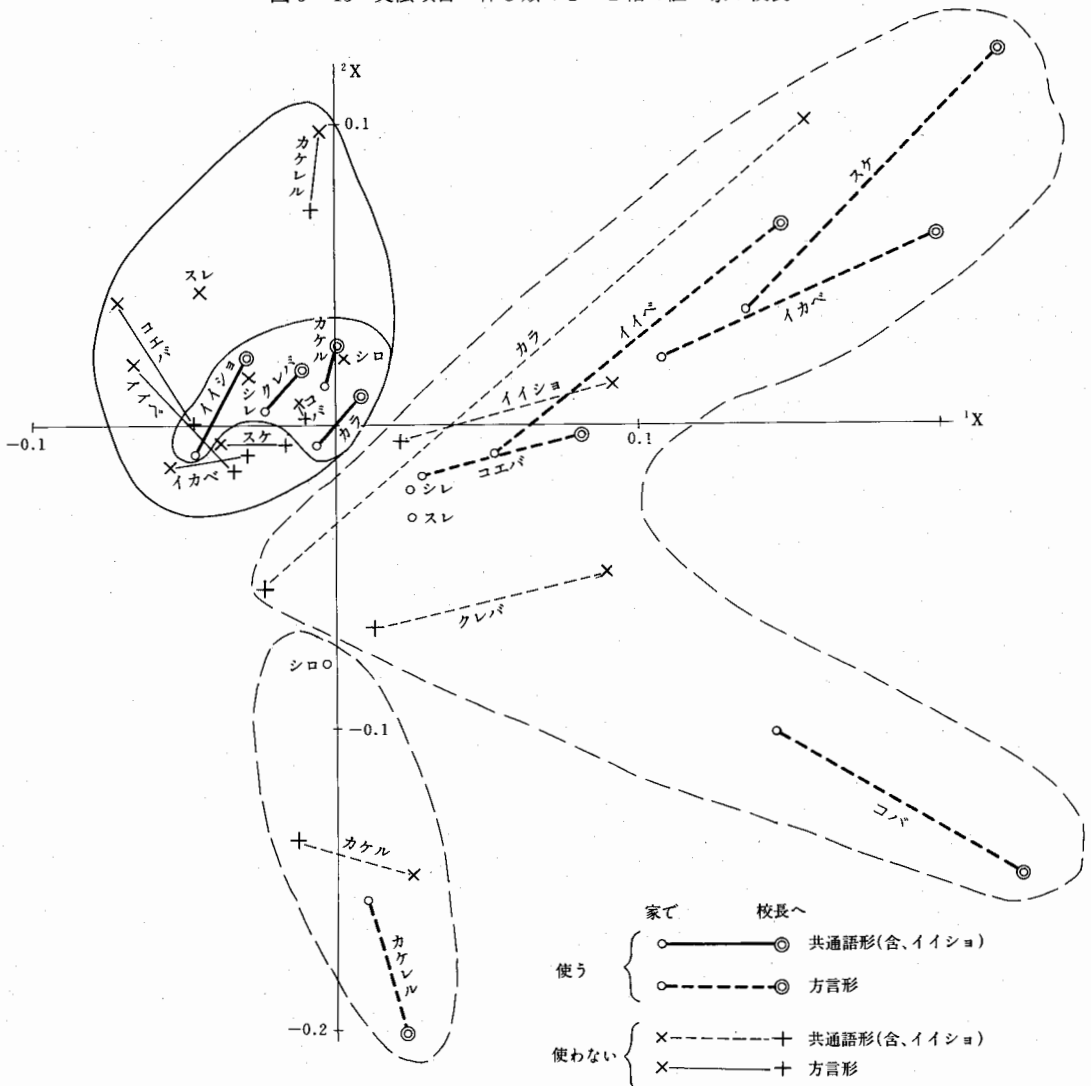
6-6 文法項目の林3類による処理

文法項目についても林3類を適用してみよう（図6-15）。調査票での「多く使う」「使う」と「使わない」との2カテゴリーに分け、（例数の少ない）「たまに使う」は処理から除外した。1軸・2軸の値によって家・校長両場面でのグラフを描くと、図6-15のようになる。原点の左上方に、共通語形を使い方言形を使わないというグループが来る。右には、方言形を使い共通語形を使わないというグループが来る。この中で書ケル、書ケレル（とシロ）がとび離れており、ほぼ2軸の値によってのみ分離する。他の語形は1軸の値によって分離するが、コバ、クレバ、コエバがやや他と離れる。（来バを使うのはほんの少人数である。）



のような相互関係が読み取れる。

図 6-15 文法項目 林 3 類の 1・2 軸の値 家+校長



属性変数（非言語的条件）による図を描いてみると図6-16に見るように、語彙項目とそっくりの関係である。1軸は年齢層・職業と密接に関係するのみでなく、男女差が大きく、学歴ともかわる。（老女の1軸の値が若男よりマイナス側に来ることは面白い。）2軸は、若年層の戦後生れと小中学生（高校卒、ホワイトカラーと在学中）をもっぱら分離する。また明治生れと大正生れを分離する働きも少しあるようである。

1軸の値は方言的か共通語的かを分ける働きを持つのだが、語彙項目にくらべ、年齢層の働きが相対的に小さく、他の要因が利いていることが目立つ。使用頻度の高い文法項目については、いずれの形をも耳にすることが多く、実際に共通語形を使うかどうかは、男らしさとか学

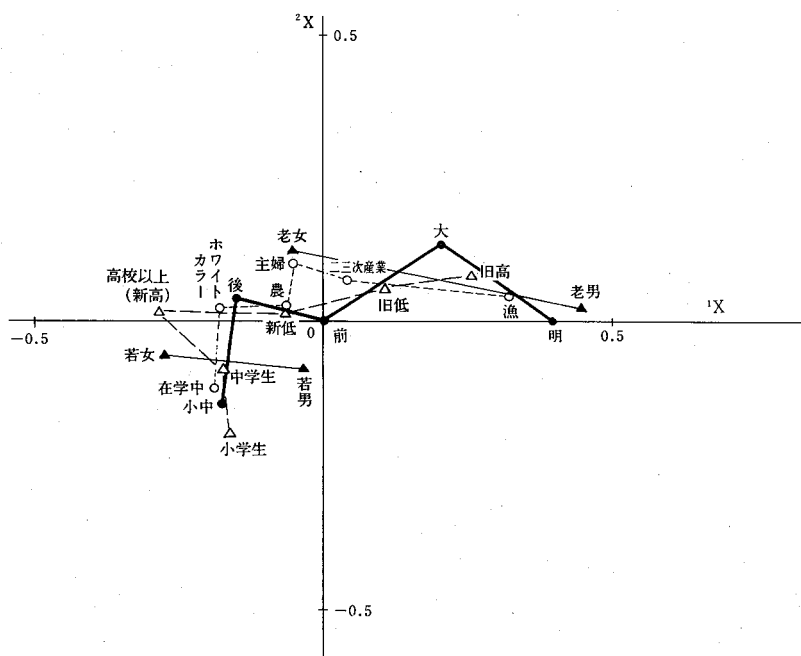
歴、職業に規制されるらしい。

書ケレルを使うというのは、図6-15、6-16をつき合わせると、小(中)学生に多い。語彙における「新方言」に相当するものである。

シロが書ケル書ケレルの近くに来ているのは面白い。シロは小中学生がやっと使いはじめていると見られる。「シレを使わない」と「スレを使わない」をくらべると、前者は原点にやや近い。シレを使わない方がポピュラーらしい。つまりスレを使う方がやや多いことになる(なお図5-14参照。)北海道における一段動詞とサ変動詞の命令形はレで終る。北奥と一致し、五段動詞の命令形やほぼ全動詞の假定形がエ段で終ることによる類推、体系の単純化である。

イイベとコエバは、イカベ・イイショ、コバ・クレバにはさまれた「中興方言形」にあたるものと、第5章の年齢変化のグラフから考えることができた。図6-15でみると、イイベとコエバはたしかに近い位置に現れてはいるが、他の語形と離れているわけではない。両場面を組

図6-16 島野文法項目 林3類 社会的条件毎の1・2軸の値 家+校長



み合わせて分析したせいもあるが、また文法項目の調査の困難さ（調査結果と現実とのズレ）を反映するものかもしれない。

6-7 林3類の評価

以上をふまえ、林3類の有用性と限界について考えたい。

まず語形のパターン分類については、かなりよい結果が得られた。クロス集計の結果のグラフ（第5章）のカーブをいくつかのパターンに直観的に手作業で分けることはすでに手がけていたが、林3類の結果はそれとかなりよく一致し、しかも客観的に信頼しうる分類を提供し得た。各語形の相互関係、相対的位置も一目瞭然である。林3類を適用することによって新たな関係・傾向を見出し得たことも多い。この記述では、第5章の記述にすでに採用しておいたが。

もっとも、クロス集計の段階において、すでに小中学生をその上の世代と分離しておき、また（よそものを別扱いにした上で）男女別に集計していたからこそ、語形の直観的分類もうまく行っていたと言える。単に大まかな年齢層（学歴・職業・性）による全住民の単純集計だけを行っていたのでは、直観的な分類の精度はおぼつかない。

しかし林3類にも欠点がある。まず例数の少ない語が極端な値をとり、往々にしてパターン全体をくずし、軸の意味などを読み取りにくくすることである。

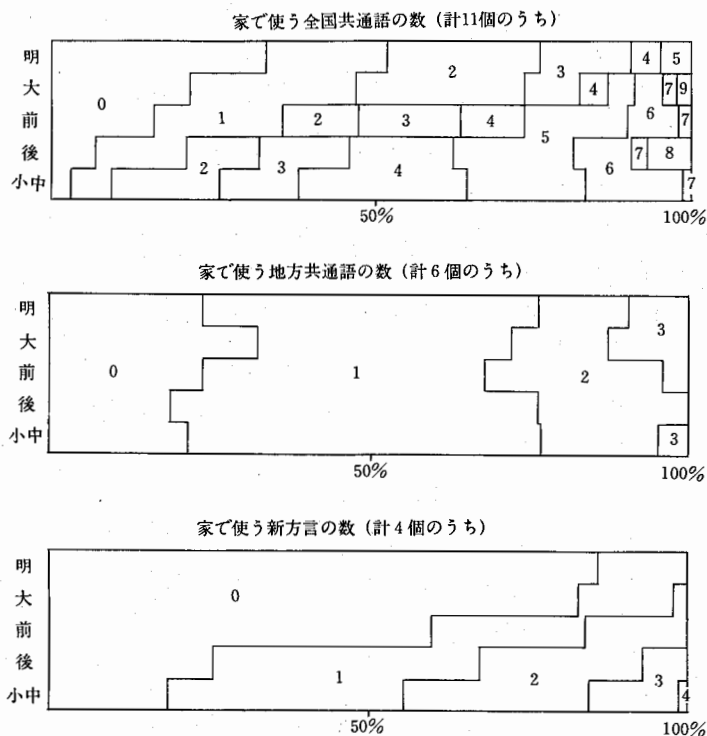
更に、上記適用例に関して言えば、場面による使いわけの関係を有効に判別できなかった。図6-5、6-6、6-15などで家での場面と校長との場面での答を結ぶ線の長さやその方向は意味があると思われるのだが、余りはっきりしない。ことに「地方共通語」は校長との場面で使用が増えるという点で（全国共通語とも）共通点があるのだが、1, 2, 3軸までの分析では固まることが余りなかった。（これは、各語形の使用者の年齢層にバラつきがあるからなのだが。）

7. 語形の五分類（と文法）の総合得点と非言語的条件

前章では林3類により語形のパターン分類を行ない、非言語的要因との関連を見、五分類と年齢・職業・学歴・性別などが密接に関係することを知った。しかし、これは実は全語形を一緒にした上での総合得点と言語外の要因との相関を見たということに等しい。（ウェイトづけした上ではあるが。）新方言・全国共通語・地方共通語等々を別々に見ると、やや様相の異なることが予想される。同じ新形と言っても、また同じ共通語形といっても、それを受け入れる層にはかなりの違いがあるのではなからうか。更に場面によって、使う層に違いがあるかもしれない。

個々の語形毎に見るのでは特異性や誤差が大きすぎて、誤った結論が導かれる恐れがある。上記の語形の五分類を用い、それぞれのグループに属する語形を一つ使うごとに（併用の場合

図7-1 全国共通語・地方共通語・新方言の個人毎の総合得点

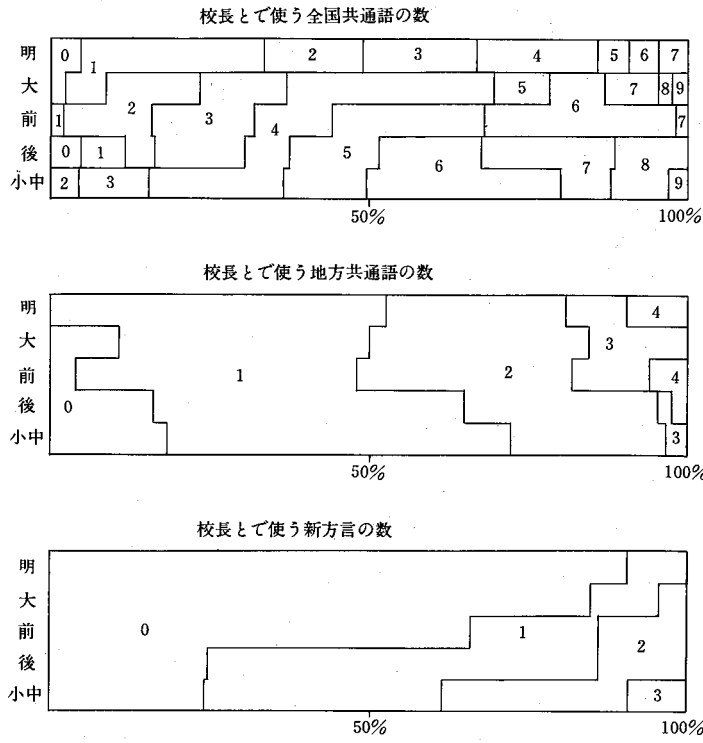


であっても) 1点と数え、各人毎の総合得点を出し、非言語的的条件毎に平均点を出してみよう。文法項目にも同じ処理を施す。ただし文法は、共通語形をも方言形をも使うという人がかなり多いため、共通語形を「使う」ごとに1点、方言形を「使わない」ごとに1点を与えて、その合計点とした。(なおシロ・スレ・シレはシロを共通語形とし、校長との場面では調査しなかったため、合計点から除外した。イイショも共通語形と見た。)

計算には前掲の表6-2に示した語形のうち、()と[]のないもの、つまり林3の最終処理に使った語形のみを用いた。このほかの方言形の利用者はごくわずかなので、大勢には影響しないと思われる。

図7-1で、全国共通語、地方共通語、新方言の点数の実際の分布の割合を示した。いずれも点数の散らばりが相当大きい。新方言と全国共通語は年齢層とかなりよく対応するが、地方共通語はそれほど年齢差がない。年齢層を順位変数と見 χ^2 検定はじめいくつかの相関係数を見ると、表7-1のようであり、全国共通語、新方言における年齢層との高い相関は明らかである。

このような関係をふまえ、以下では各要因毎の平均点によって考察する。非言語的要因の分け方などは以前と同じである。カテゴリーも誤差が大きくなりえない程度に多くに分け、またク



ロス集計によって生じるカテゴリーをも利用した。
 六つの分類に二場面ずつで、合わせて 12 の図（図 7-2 ～13）ができあがる。校長〔家〕で

表 7-1 総合得点と五年齢層との相関

		χ^2	自由度	有意水準値	CRAMER'S V	CONTINGENCY
全国共通語	家	69.37	36	0.0007	0.278	0.485
	校長	85.77	36	0.0000	0.309	0.525
新方言	家	78.74	16	0.0000	0.296	0.509
	校長	76.50	12	0.0000	0.337	0.504
地方共通語	家	10.02	12	0.6145	0.122	0.206
	校長	27.68	16	0.0346	0.175	0.331

の場面の平均点を家〔校長〕での場面の表に、横に直線・点線で示した。

合計点の満点は各分類によって異なる。図化に際して棒の長さを満点との関係で調整しなかったから、六つの分類を単純に比較するわけには行かない。まず各の表の中でどの要因がどのように利いているかを見るべきである。たての線の長いものほどよく利いている要因と言える。更に家と校長との場面による利き方の差を見、最後に各表における要因の利き方の相対的強さを、比較することができる。

図7-2 家での全国共通語

11点満点で平均3点だからそう高くない。(そのような調査項目を選んだせいもある。)年齢層と性別をクロスさせたカテゴリーの差が一番極端で、明治生れの男は1点以下、戦後生れの女性は5点以上である。年齢差も大きい。性差単独も相当利いている。女性の方が共通語を多く使う。つれあい出身の差が大きいように見えるのは、主に未婚者の年齢の反映による。

学歴の差も(単独でも)相当大きい。更に旧制卒業、新制卒業、在学中の三層とクロスさせての高低学歴との関係は、新制高学歴で点数が高くなる。主に高校生と高卒者である。

職業の差は年齢層の差より大きい。ホワイトカラーが在学中の者より高いのが注目される。「共通語化のおくれ」を示す。学歴の差もからんでいるだろうが、昭和25年の鶴岡市での調査の音声共通語化の点数と同じく、共通語使用の要求される場面におけること多い層で全国共通語化が進んでいると見られる。また、校長との方言、標準語の使いわけ意識とよく対応している。(家の中では「混じる」と答える者ほど(この方が実態に近いだろうが)、点数が高い。)

そのほか島野世代、道南世代と、岩内へ出かける回数(少ないものは点数が低い)もやや関連を見せる。なお、区の差もある。

戦後生れの女性、高学歴のホワイトカラーが家でよく全国共通語を使うと言える。

図7-3 校長との全国共通語

この場面では平均点が1.5点あがる。しかし言語外の要因による平均点の開きは家の場面より小さくなる。全員の傾向が似てくるわけだ。フォーマルな調査によるタテマエとしての答ではあるが、注目すべき現象である。

年齢層による開きは二場面ではほとんど同じで、一番利く要因と言える。性差は少なくなる。男の点数があがるためである。男の方が使いわけが甚だしいわけだ。職業の所では、在学中がわずかにホワイトカラーを追いこす。学生生徒は使いわけがうまいと言えるか。他の要因は、家での場面と大同小異である。

図7-4 家での文法共通語形

満点13点で平均は8点近く(59.5%)。最高のカテゴリーと最低のカテゴリーは語彙の全国共通語と同じく、戦後生れの女と明治生れの男で、約10点と約4.5点とで、相当の開きがある。

年齢・性別・世代・学歴・職業・校長との使いわけ意識が利く所なども全国共通語形とそっ

くりである。また各カテゴリーの順序にもほとんど違いがない。イイショは地方共通語、カケレルは新方言に対応するものだが、これ自体としてはわずか2点のみだから、総合的に大して影響を与えなかったのだろう。

これも戦後生れの女性、高学歴のホワイトカラー（または高校生）に卓越する。

図7-5 校長との文法共通語形

シロ等を除いたため満点は10点である。平均点は73.8%でほんの少ししかあがらない。点数の開きは大変小さい。全員がほぼ同じ答を出したわけである。これも全国共通語と一致した傾向である。単独の要因としては社会的属性よりも「校長との使いわけ意識」の方が利いている。

図7-6 家での地方共通語

グラフはこれまでにくらべ点数の開きを大きく描いてある。合計点は6点だが平均点は低いし（約1点）、要因による開きもわずかである。ことに年齢差がわずかで、順序もバラバラである。これは、第5章の各グラフを見ればわかるように、「地方共通語」に分類された語形の年齢層カーブが様々で、互いに平均化しあったためと考えられる。

目立つのは社会的属性よりも意識面であり、家・校長の両場面での使いわけ意識と、札幌弁と東京弁とどちらが標準語に近いかという判断である。札幌弁の方が東京弁より標準語に近いとする人が地方共通語を多く使うのは、よくつじつまがあう。

島野世代も意外に目立つ。地方共通語は、島野の中では大きい働きを持ち、帰属意識を反映するのかもしれない。新制卒業者の開きも目立ち、低学歴の方が高い点数である。（新制高学歴に全国共通語形が多いのと対照をなす。）

図7-7 校長との地方共通語

平均点は0.4点あがるにすぎないが、要因による点の開きが大きくなる。家の中ではそもそも余り使わない語形であり、校長との場面での使用に差が出る項目なのであろう。

年齢層による差はやや大きい。全国共通語と違って老人ほど多く使う。（後述の「古方言」などと近い。）明治生れの者にとっては、まさにこれこそが改まった場面での言葉なのだ。若い世代を除くと男の点数の方が高いのも全国共通語と逆である。

職業による違いが一番大きい。ここでも在学中やホワイトカラーは下位に来る。しかし農業や二三産業が漁業より高いのは全国共通語の単なるうら返しと言えない。漁業者が「校長にでも家の者にでも同じ言葉でしゃべる」と言うのに対応するのだろう。また学歴でいうと、新制卒業者の開きが大きく、低学歴に多い。これも全国共通語のうら返しである。

しかし意識面になると家でも校長とも標準語を用いると思っている者の点数が高い。また札幌弁の方が東京弁より標準語に近いと思っている者の点数が高い。つまり、言語意識については井の中の蛙的な人がよく用いると言える。

全体としては、農業・二三産業に従事する老年・中年の男に多いと言える。

図 7-2 家での全国共通語 (11点満点)

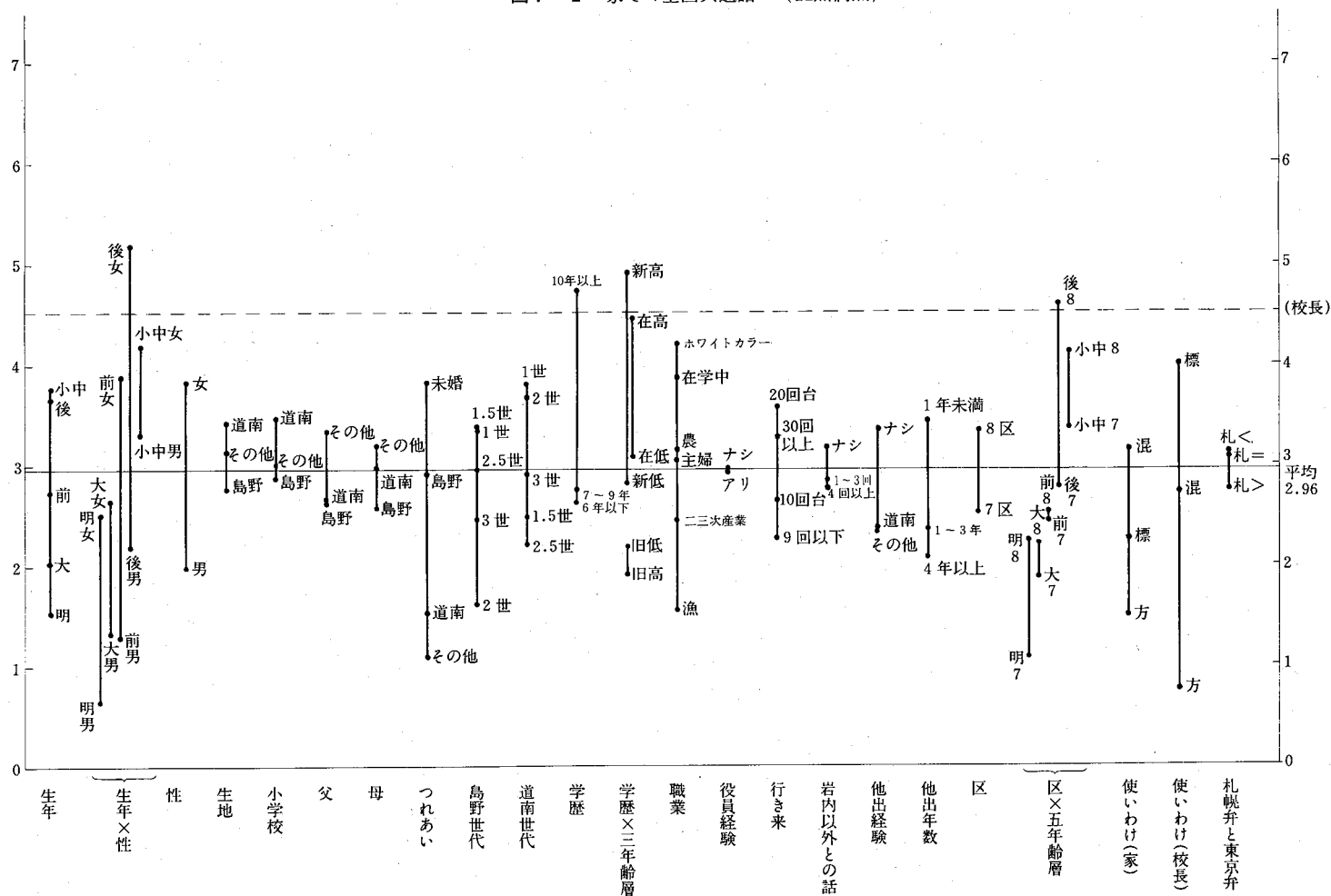


図 7-3 校長との全国共通語 (11点満点)

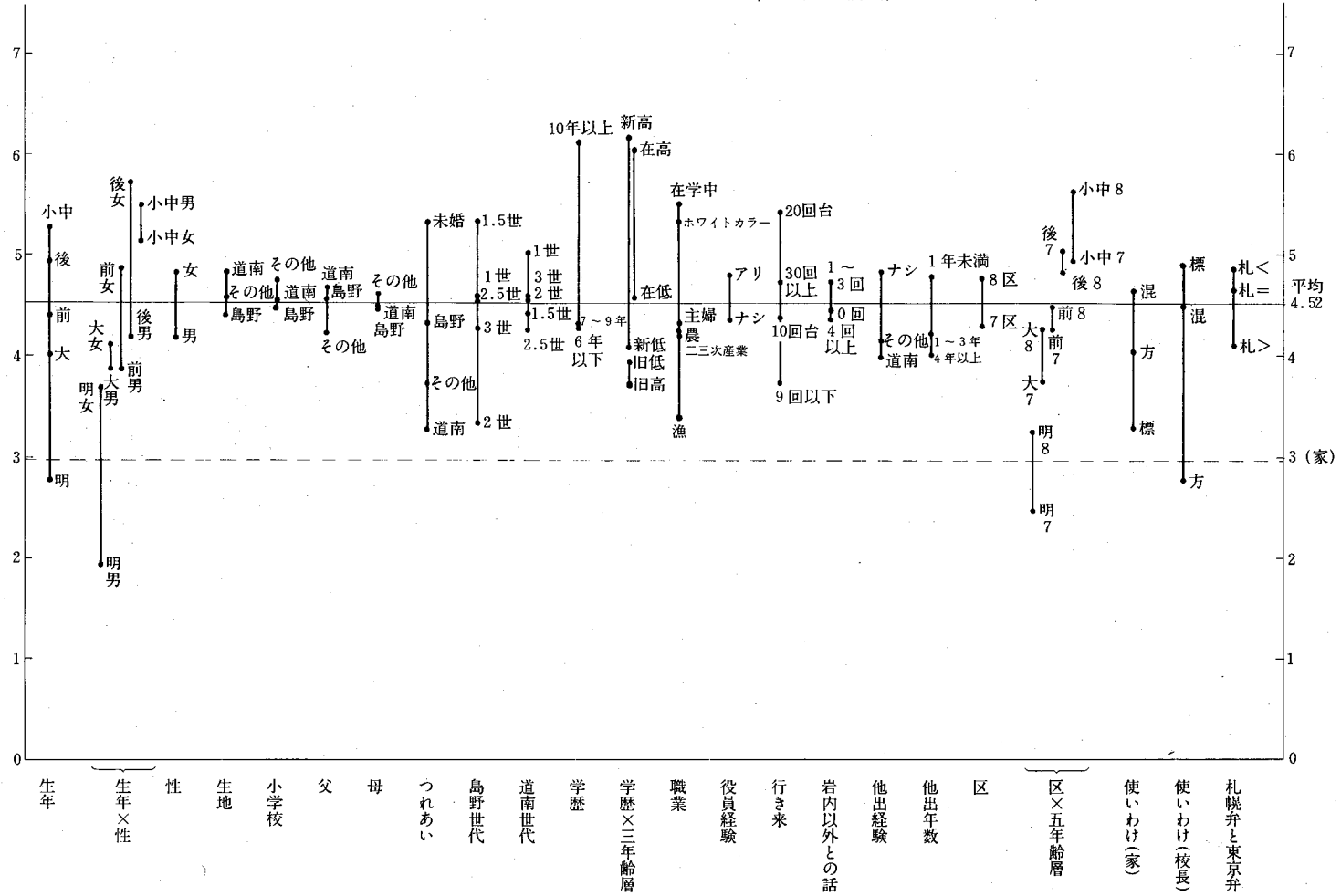


図 7-4 家での文法共通語形 (13点満点)

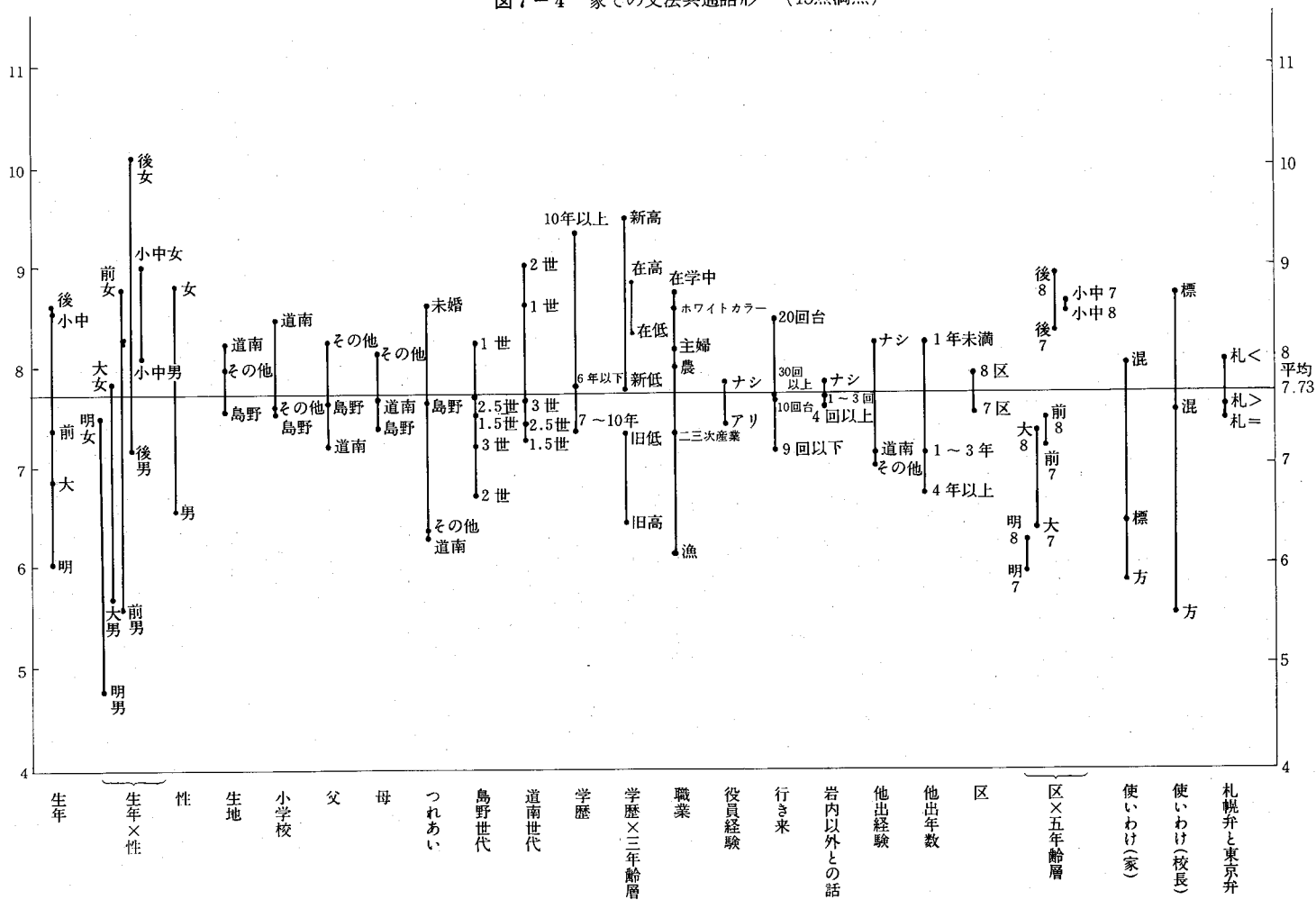


図7-5 校長との文法共通語形 (10点満点)

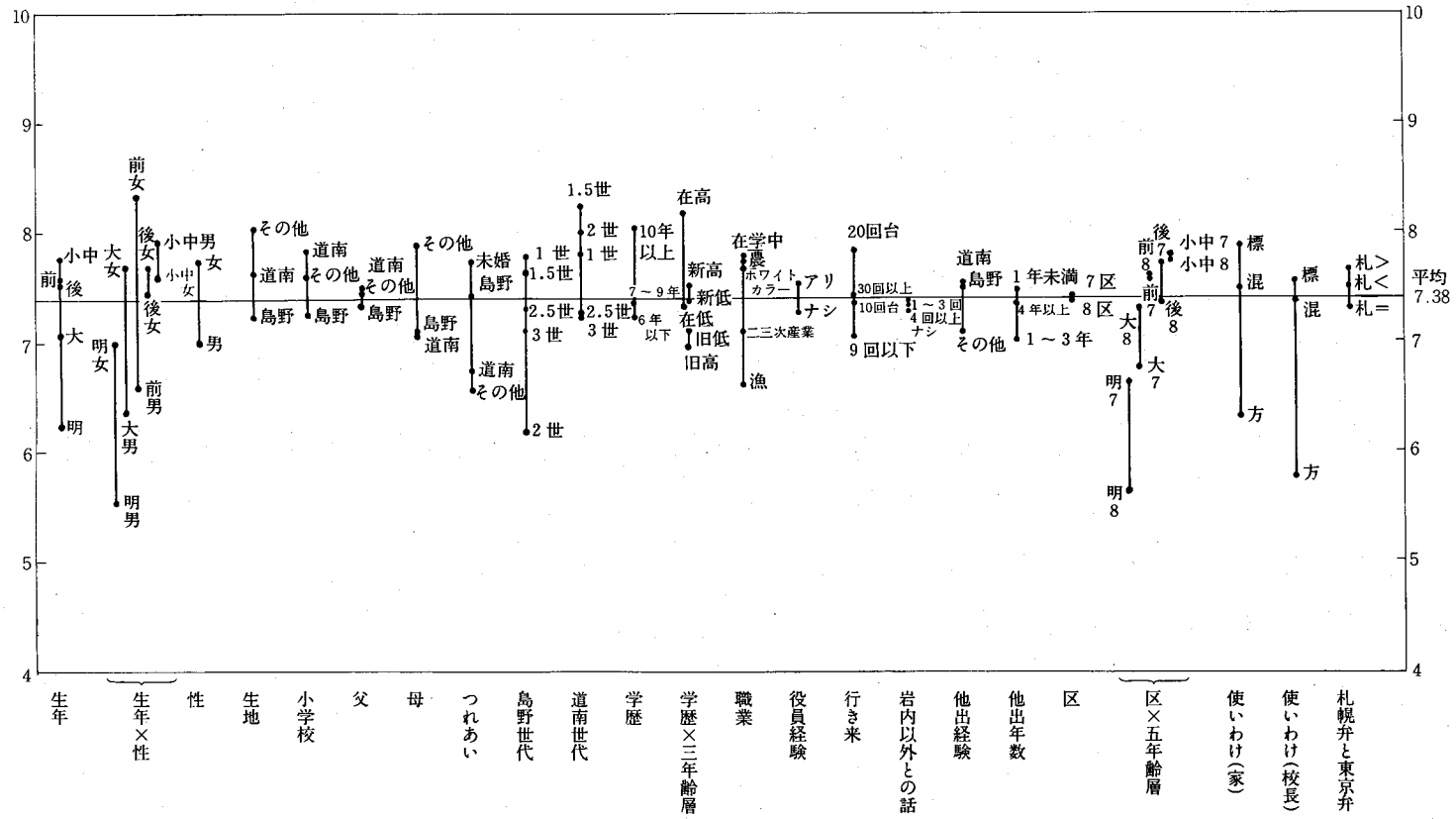


図7-6 家での地方共通語 (6点満点)

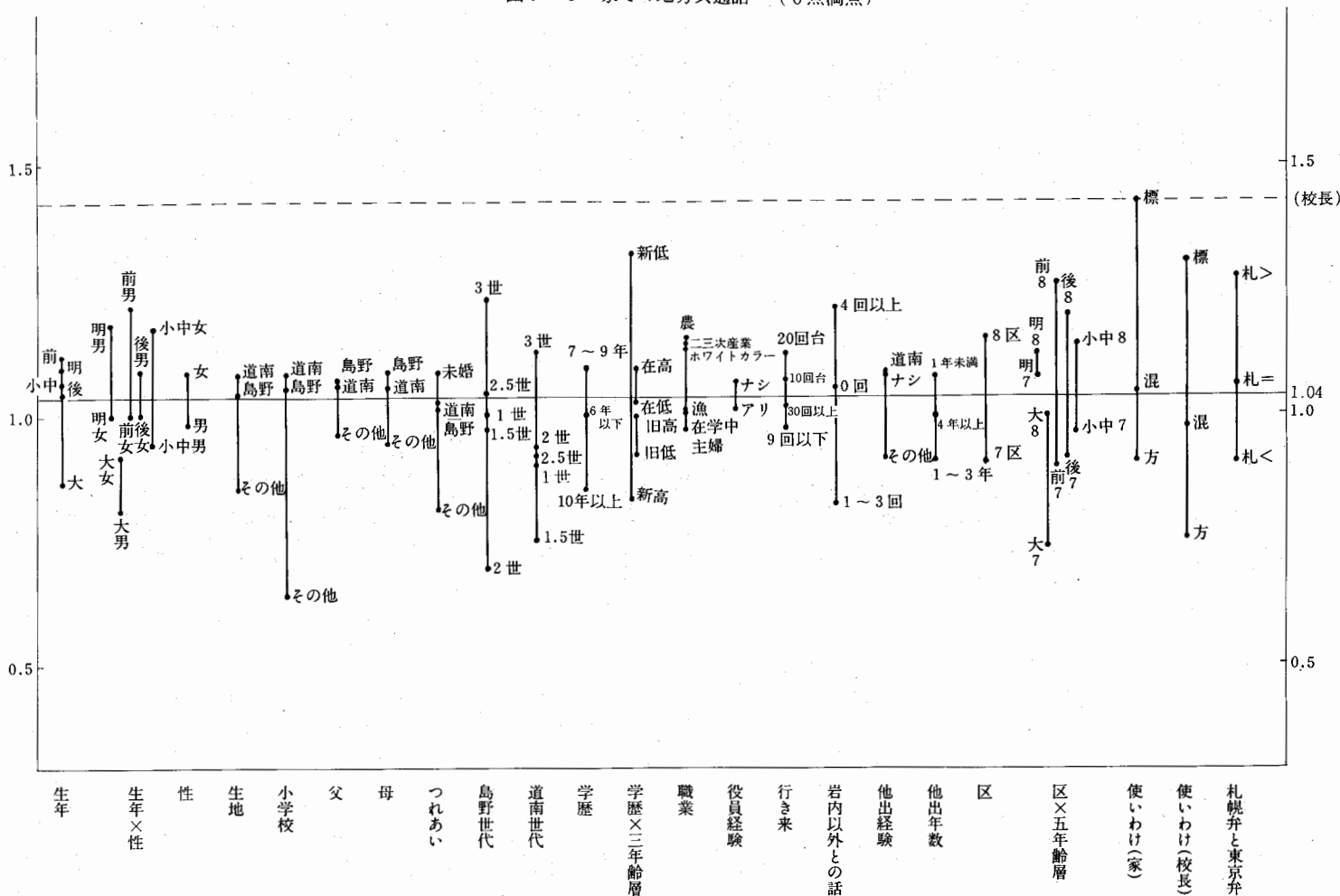


図7-7 校長との地方共通語 (6点満点)

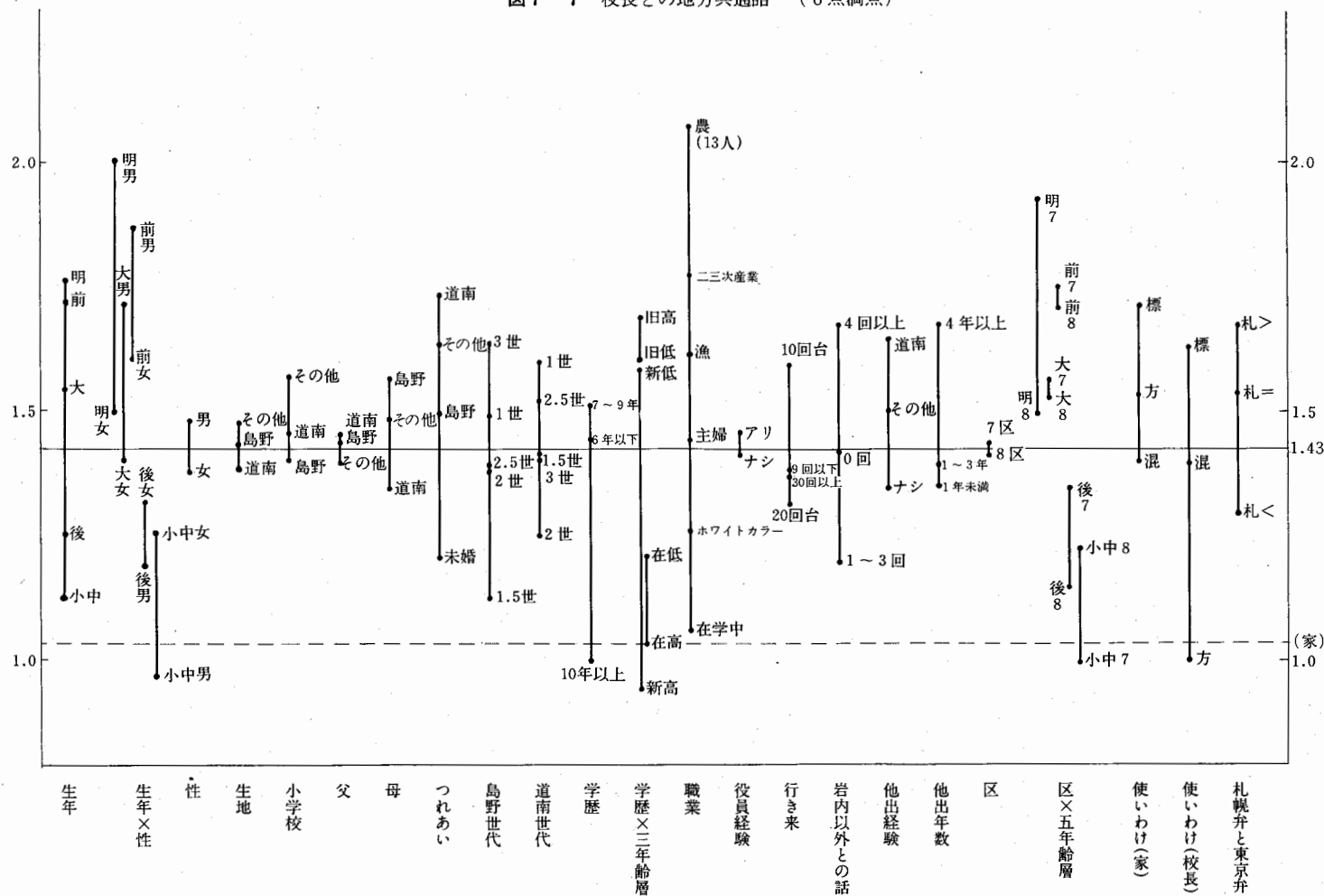


図 7-8 家での新方言

グラフにおける点数の間隔は地方共通語と同じである。わずか4語形の集計であるがカテゴリーによる点数の開きが大きい。0%から50%近い得点の開きがある。

年齢層（つれあいの出身の開きはこの反映）と職業による違いが大きい。小中学生と在学中とがきわだっている。他出経験、他出年数や校長との使いわけ意識もよく利く。学歴自体はほとんど利いていない。要するに小中学生に非常に多い言い方なのである。本人の生地や父の出身地が島野で、世代が3世、2.5世に多いというのもその反映である。

区の違いは単独ではそう大きくないが、五年齢層とクロスさせると目立つ。7区の若者に多い。平均して7区の方が1人1語近く多く使う計算になる。第9章でくわしく検討しよう。

図 7-9 校長との新方言

平均点はわずかに下がる。要因の利き方も少し弱くなる。しかし各要因の全体の様子は家ではほぼ同じである。ただ使いわけ意識で今度は家での場面の方が利くのは思わくと逆である。

各変数の内部を更にくわしく見ると、職業の所でホワイトカラーが（家ではよく使う方だったのに）校長とで平均以下になっている。ホワイトカラーには、これらの語形が（新しいにもかかわらず）「方言的」だとちゃんと知っている者がいるのだろう。

性別については単独にとり出すと全く差がないのに、5年年齢層別に見るときわだった差が出てくる。小中学生（と例数の少ない明治生れ）では男が多いのに、他の年齢層では女が多いせいである。

学歴自体はほとんど利かない。在学中の低学歴の点数が高いとは、小学生の点数が高いということである。そのほかの要因の働き方は少ないし、しかも年齢差の反映ととらえる。

要するに小中学生に多い言い方なのである。

図 7-10 家での中興方言

12点満点で、平均点は26.9%である。単独で一番よく利いている要因は職業、次が年齢層である。クロスさせた条件では性や区も利く。

各条件（要因）の内部をよく見ると、全国共通語や新方言とは様子が違う。戦前生れの男、つれあいが道南出身、島野三世、新制低学歴、二三次産業（か漁業）従事者に卓越する。二三次産業従事者のうち半数が戦後生まれで、戦後生れそのものの点数は大して高くないことから、職業（と性）の働きが相当に大きいと思われる。もっとわずかな差も考慮に入れると、役員経験があり、岩内との行き来が月に30回以上、道南に4年以上出たことのある者に多い。要するに島野の中堅層として、経済的にも社会的にも活発に活躍している人たちに目立つ言い方である。実際、中興方言の語形の多くは、道南全体に広く使われる方言形が多い。

図 7-11 校長との中興方言

平均点が1点以上さがる。各要因毎の点数の開きはそう変わらない。職業・年齢層・学歴が利き、複合要因では戦前の男、新制低学歴に卓越する(明治生れの8区にも多い。)中興方言の荷い手の言語外の要因は家でと全く同じである。

図 7-12 家での古方言

当然予測されるように、年齢層による違いが最も大きく働く。年齢層順にきれいに並び、大正以前の者にきわ立つ。つれあいの出身が(未婚を考慮外にしても)かなり利いており、本人や親の出身地よりも利く。つれあいが遠い所の者ほど古方言を多く使う。これは年齢差の反映なのかもしれない、検証が必要であり、このままだと受け入れがたい。職業の差も大きい。年齢差の反映なのかもしれない。そのほかほとんどすべての要因の利き方、順序は、ほぼ全国共通語のうら返しと言ってよい。

これは他の地域の調査で方言の衰退を扱う時によく得られるパターンである。普通は、全国共通語化と方言の衰退という二つのタイプしか見ていなかったためである。

図 7-13 校長との古方言

平均点は2.5点近く下がる。13点のうち8.8%にすぎない。0点近いカテゴリーも多く、各要因の点数の開きも小さくなる。年齢層の働きの相対的に一番強くなる。性別をかみ合わせると明治生れの男は4点以上なのに、小中学生や戦後生れの女は0点ぎりぎりである。職業・世代・学歴もやや働く。

以上の六つの分類を、目立つ非言語的要因によって特徴づけてみると、次の表のようになる。使用者の層から言うと、全国共通語と文法共通語が近く、新方言もこれに似る。これと正反対になるのが古方言で、地方共通語と中興方言は中間的存在である。地方共通語は要因の働き方において方言に近い点があり、新方言は同じく、共通語に近い点がある。

	全国共通語	文法共通語	地方共通語	新 方 言	中 興 方 言	古 方 言
校 長 と の 平 均 点	+	+	+	-	-	-
年 齢 層	戦後・小中	戦後・小中	戦 前	小 中	戦 前	明 治
性	女	女	—	—	男	男
つ れ あ い	未 婚	未 婚	—	未 婚	道 南	内 地
島 野 世 代	—	—	三 世	二・五世	三 世	三 世
学 歴	高	高	(低)	—	低	(低)
職 業	ホワイ カ ラ ー	ホワイ カラ ー	農 業 二三 次産業	在 学 中	二三 次産業	漁 業
校 長 と の 使 い わ け	標	標	標	標	方	方

図7-9 校長との新方言 (4点満点)

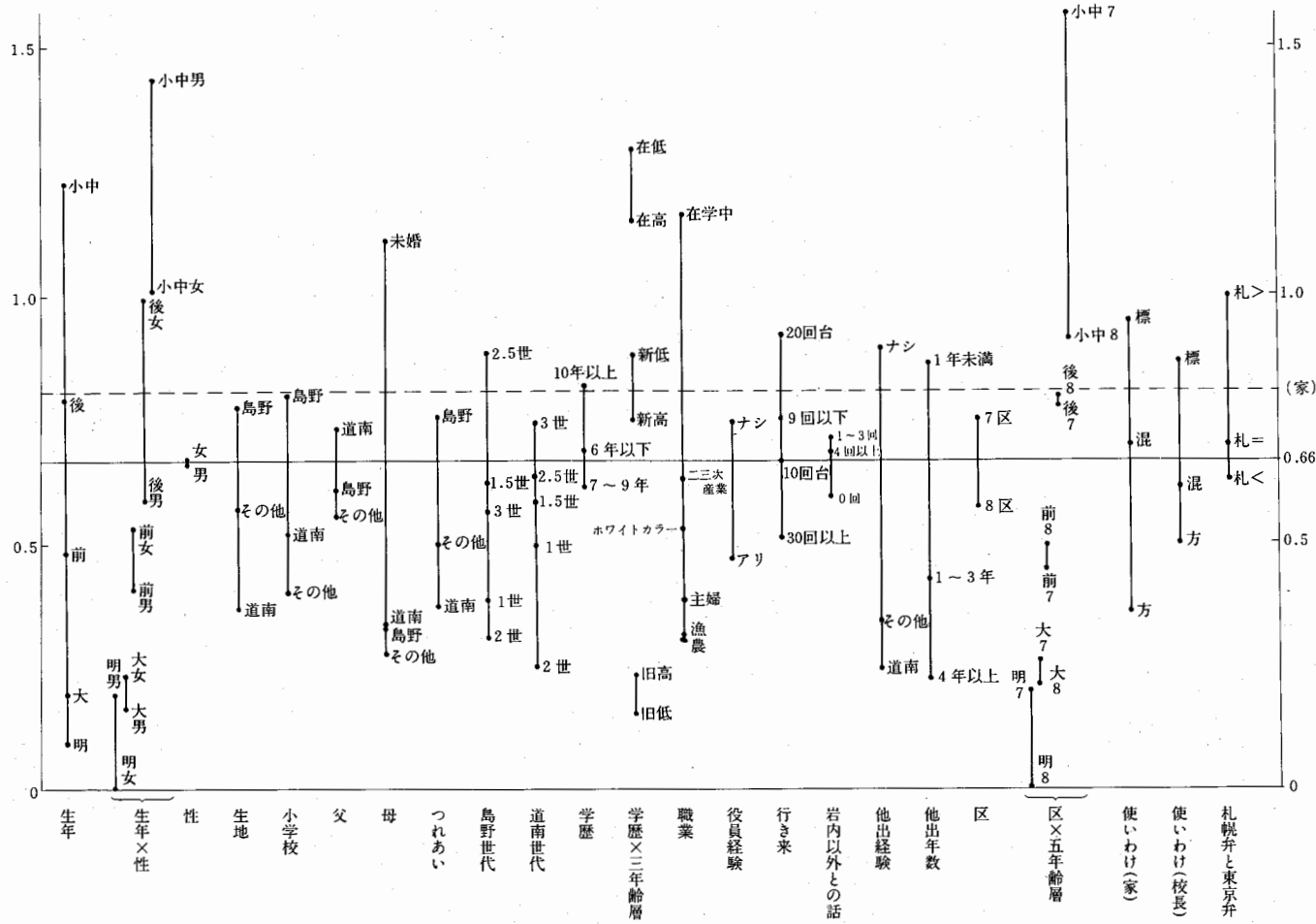


図7-10 家での中興方言 (12点満点)

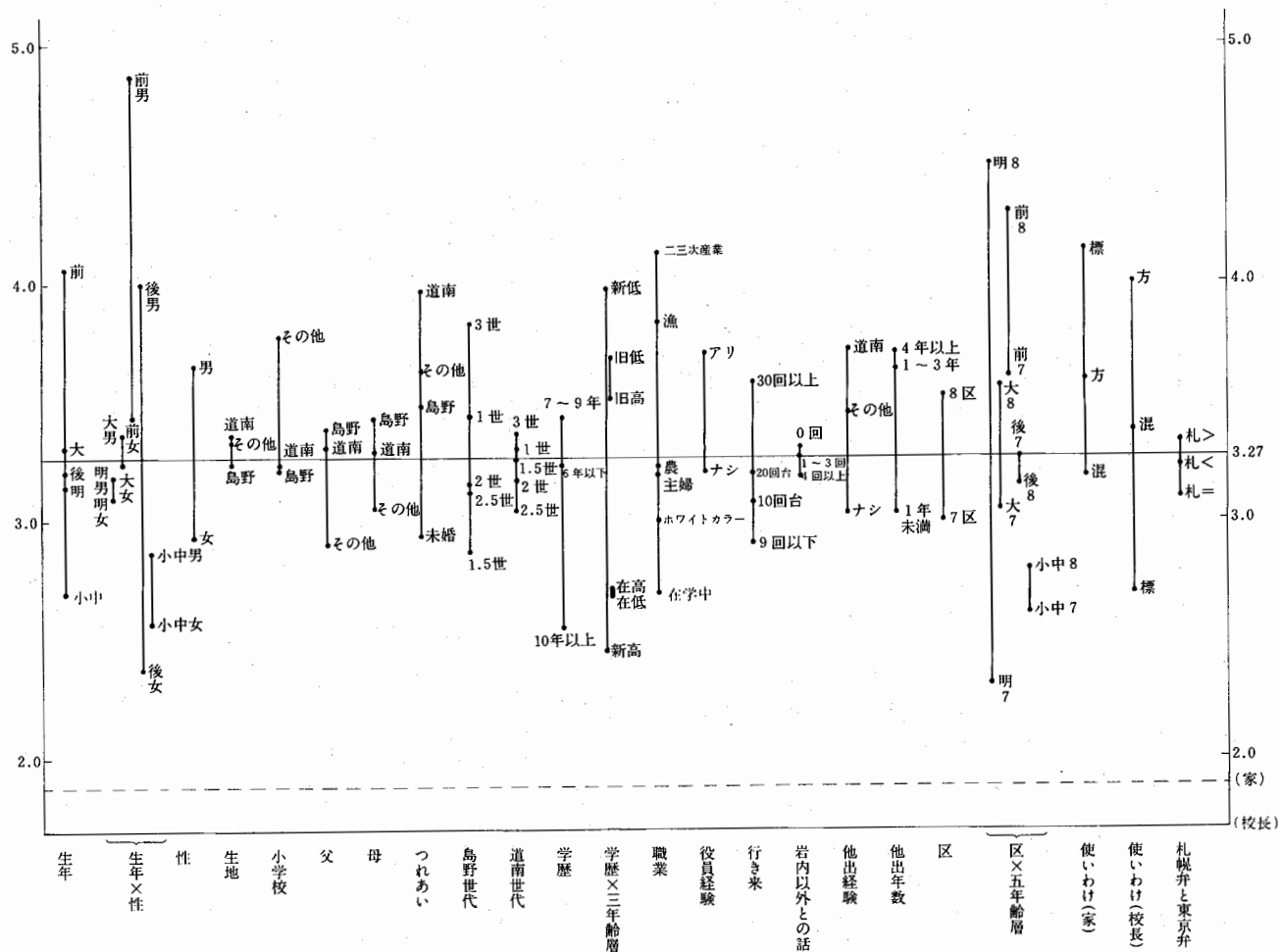


図7-11 校長との中興方言 (12点満点)

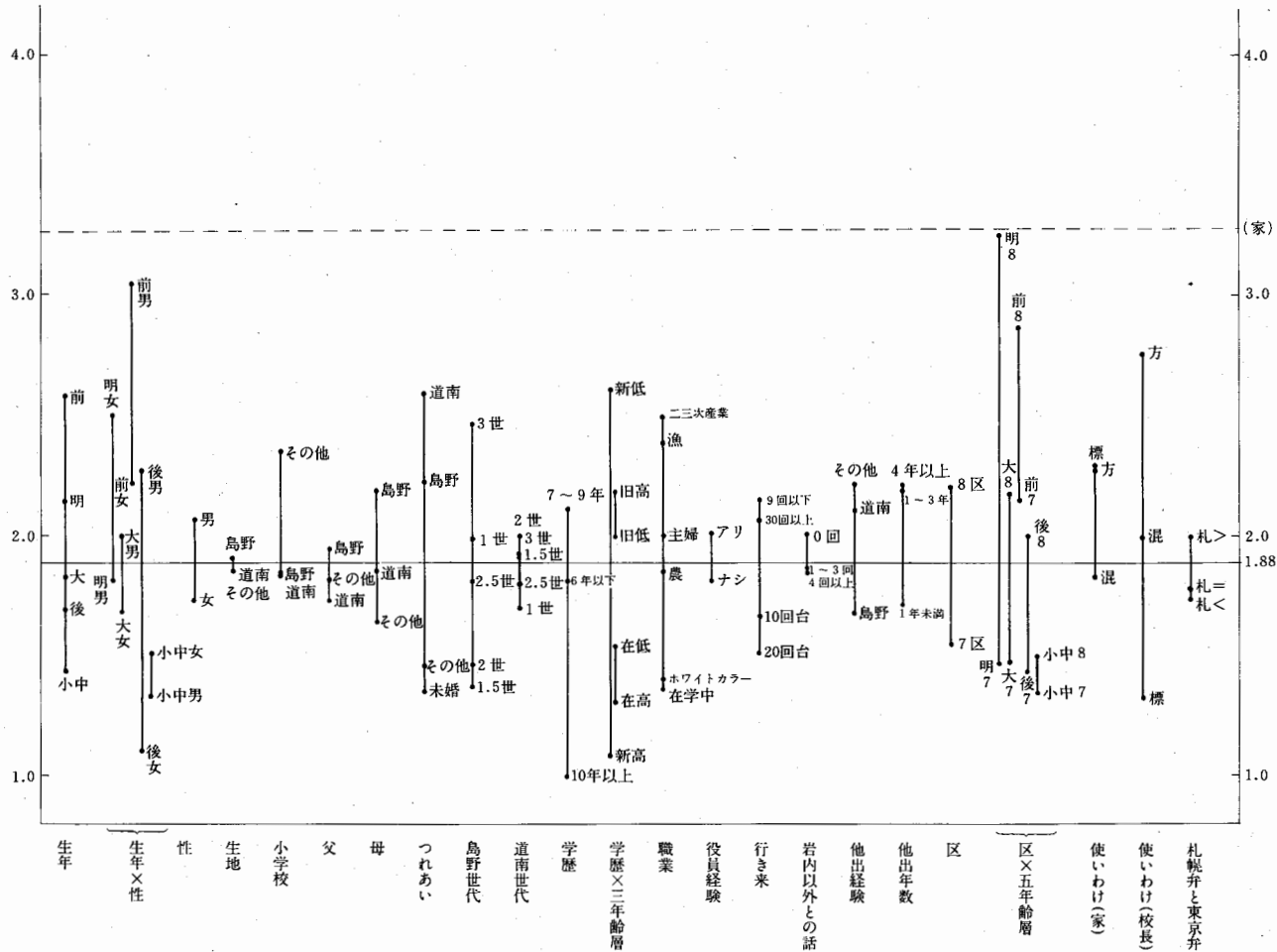
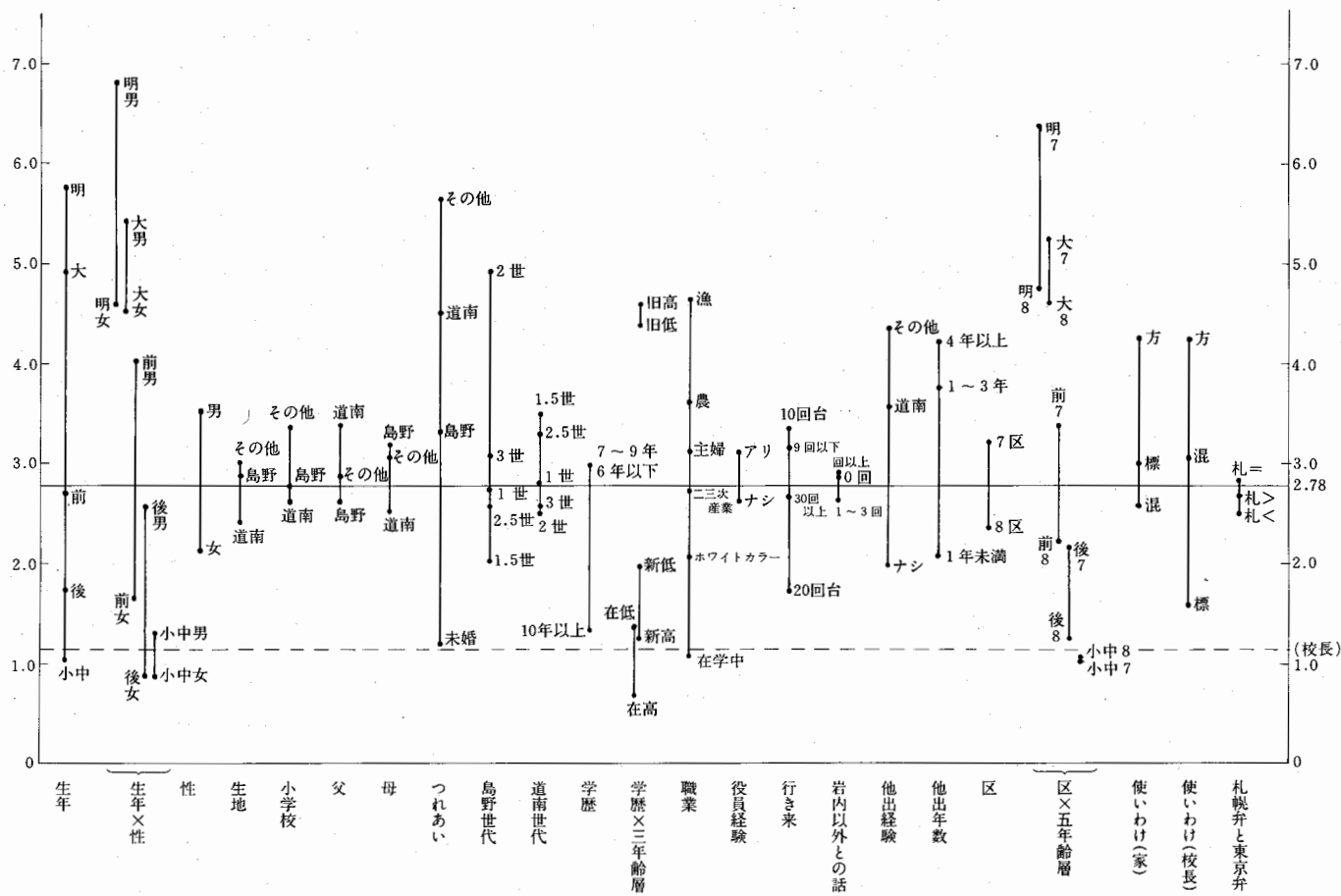


図7-12 家での古方言 (13点満点)



最後に話者の意識に関する所をもう一度通覧しよう。方言・共通語の使いわけに関する意識では、どの場面の点数も、校長との使いわけに関する質問の方が開きが大きく、よく一致した傾向を示す。これは、調査を通して得られた答が、実はふだんのありのままの言葉ではなく、むしろかなり改まった場面での半ば自動的な反応であることを示すのだろう。調査員と共通語でやりとりしつつ、家での言い方と校長との言い方をかわるがわる答えるという、この調査の方法が、最良のものではない。W. Labov のような巧妙な方法を用いるべきであるが¹⁾、語彙に関しては今の所難しい。

また、札幌弁と東京弁への評価をみると、全国共通語・文法共通語では東京の方が標準語に近いとする者の点が高く、地方共通語・新方言・中興方言では札幌の方がよいとする者の点が高い。(古方言では同じとする者の点が高い。)これはそれぞれの語形の性格とよく符合する。点数の開きの小さいものもあることから危険ではあるが、このコンスタントな傾向から、札幌(と東京)の言葉への主観的評価が実際に用いる語形の性格とかなり対応すると言えそうである。

以上は、語形の分類毎に非言語的要因の働きをいわば静態的に考察したものである。従来の研究は、ともすればここでいう古方言と全国共通語の二つの交代にのみ目をうばわれる傾向があったが、そのほかにも様々な中間のカテゴリーがあることを示し得た。これが新形の伝播、共通語化の進展などの動態的現象と関わりを持つことは当然予想される。ことにこの地域社会にとっての新形の一種である中興方言と新方言の荷い手が、全国共通語のそれとかなり違うことがわかったのは面白い。島野への新形の導入は色々な人により色々なルートから行なわれていると推測することができよう。日頃のコミュニケーション行動、接触行動が異なるから、当然である。そして、話し手は自分の社会的地位や役割の自覚から、最もふさわしい言い方を採用して周囲の人に同化して行くようである。(交際範囲については岩内町島野では困難を慮って調査しなかったが、他の調査から²⁾、地域・年齢層・職業等に大きく規制されることが知られている。)コミュニケーションの流れにおけるオピニオンリーダーがその分野その分野によって色々いる(その道の権威が居る)ように、言葉についても色々なルートから伝播しうるのである。

なお以上の結果から、方言調査(言語地理学的調査)、言語調査一般における被調査者(話者・インフォーマント)の選定にも提言をなす。老女はよく方言を使うといわれるが、このような調査における答では、かえって共通語化しているようであり、男の方がよさそうである。また中年層が物おじせずに方言形を答えてくれる傾向も見られる。ただし中興方言などを答え

1) W. Labov, *The Social Stratification of English in New York City* (Center for Applied Linguistics, 1966)
W. Labov, *Sociolinguistic Patterns* (Univ. of Pennsylvania Press, 1972)

P. Trudgill, *The Social Differentiation of English in Norwich* (Cambridge, 1974)

2) 小川文弥「日本人のコミュニケーション(1)~(3)」文研月報, 昭48, 9, 10, 12月。

ることもある。若年層では性のほか職業による差も大きくなる。全国共通語化は小中学生より高校生の方が進んでいることがある…等々。

筆者は地域差・年齢差を微視的に考察するために山形県をフィールドに地理×年齢 (glottogram) 調査を行なっているが、地理的位置と年齢のみを考えるのでは不十分なようである。Glottogram における等語線が往々にして乱れるのは、上記のような要因が介入したためと考えられる。また地理的分布の調査における (一年齢層の) 分布の乱れも、同じように説明できよう。ことに共通語形を使うかどうかには (地理と) 年齢以外の要因が大きく働くようである。きれいな地理的分布を求めるなら、言語外の要因の均一な話者を探し出して対象とする³⁾とか、項目・調査地域の (の大きさ) の選定に配慮するとかが、必要であろう⁴⁾。

8. 極限のグロットグラム

上で「新方言」使用の非言語的要因の一つとして、7・8区の差が目についた。五年齢層とクロスさせると、各年齢層とも7区の方が高い値を示した。ところが「全国共通語」を見ると8区の方が点数が高い。更に先に見た林3類の属性変数の軸の値 (図6-11, 12等) でも7・8区の違いが出た。一体これは何を意味するのか。この道路ぞいの村のはずれの2区画で出た違いは、果して「地域差」と言えるものなのか。

これを追求するために、今度は島野の地理×年齢図 (glottogram) を作製して考察しよう。縦軸に年齢、横軸に家の位置を取り全員をプロットする。地理×年齢図としては極限を示すものと言える。この島野は海に面して道路の片側に家が並び、山側には集落もないので、家の位置を一次元で表示しうる。地理×年齢図には最適の集落と言える。

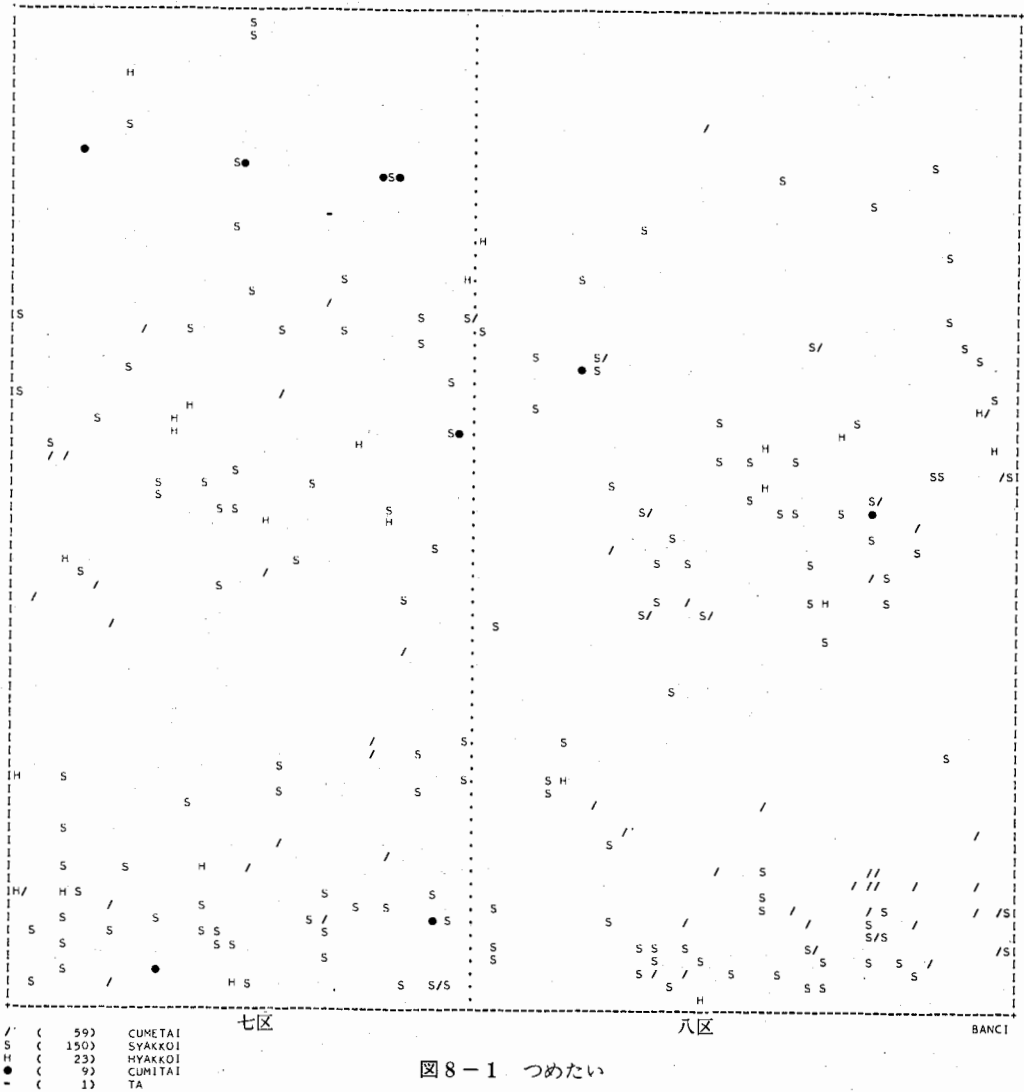
図の作製には荻野綱男氏提供の言語地図作製用公開プログラム GLAPS (Generalized Linguistic Atlas Printing System) を用い¹⁾、北大大型計算機センターを利用した。(ラインプリンタで出力された図の中で、目立たせたいものには Letraset の記号を貼りつけた。)

なおここで念のため7・8区の成員の言語外の属性をくらべると、7区に多いのは明治生れ (老・男)、漁業、母は道南以外 (内地)、本人島野2.5世。岩内の行き来は少ない。(なお中学生・小中の女子も多い。) 8区の方が多いのは小中学生 (男) と主婦。母は島野。本人は1.5世

3) 徳川宗賢「方言の地理的分布 —— 特に分布の内容について ——」(大石初太郎・上村幸雄『方言と標準語 —— 日本語方言学概説 ——』筑摩書房、昭50)

4) 拙稿「地理的伝播の調査規模」国語学 101 集 (昭50)

1) 荻野綱男「一般的言語地図作成プログラム (GLAPS) の使い方(1)~(3)」, センターニュース (東大大型計算機センター) Vol. 8, No. 9-11 (1976)



か 3 世。低学歴で岩内との行き来が多く、役員経験も多い。

以下の図のたて軸は年齢を示す。下端が小学校 3 年生 (1967 年生れ)、上端は 1891 年生れである。横軸は島野小学校で作った住居配置図により、家の配置を示す。1 カラムおきに描いた。(転居したため空白になった家もあり、夫婦が同じ年とか、二世帯が同番地・同じ家のため 1 カラムに重なった所もある。) 一個人が併用を示した時は第 2 の語形は右側に、第 3 の語形は左側に出る。なお図の左下に凡例と共に各語形の使用人数が出る (併用も 1 人と数える。)

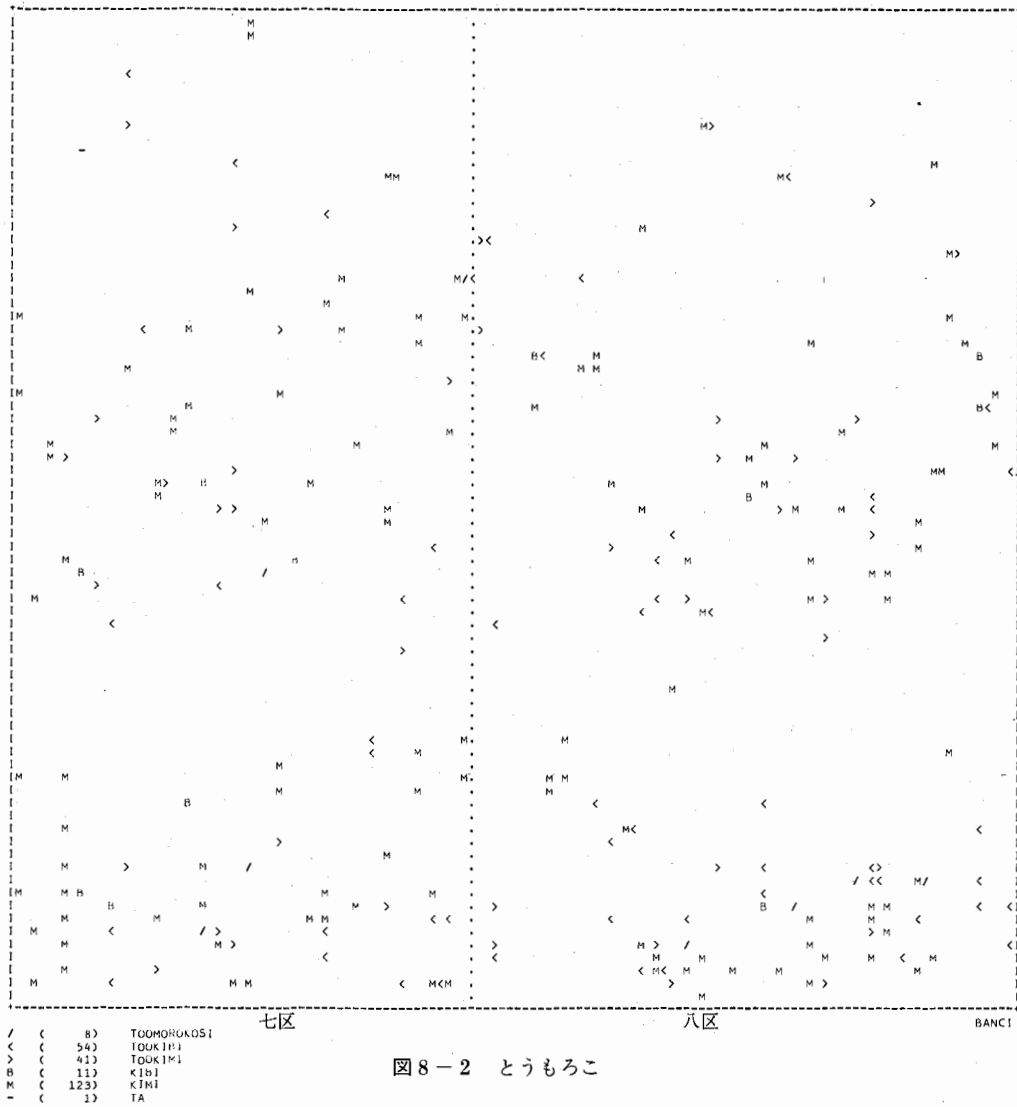


図 8-2　とうもろこ

調査票番号順に、1 ツメタイから、9 クスグッタイまでを示す。原則として林3にかけた語形(5章のグラフに描いた語形)を別々の記号で示し、その他の語形は目立たぬ記号で示した。一般に年齢差はよくわかる。区の差と近隣のまとまりに注目しよう。

1 ツメタイでは、ツミタイが7区に多く、小中学生で8区の右端にツメダイが固まるのが目立つ。

2 トーモロコシでは、語形の数も多く、地理的には特にまとまった傾向を見せない。

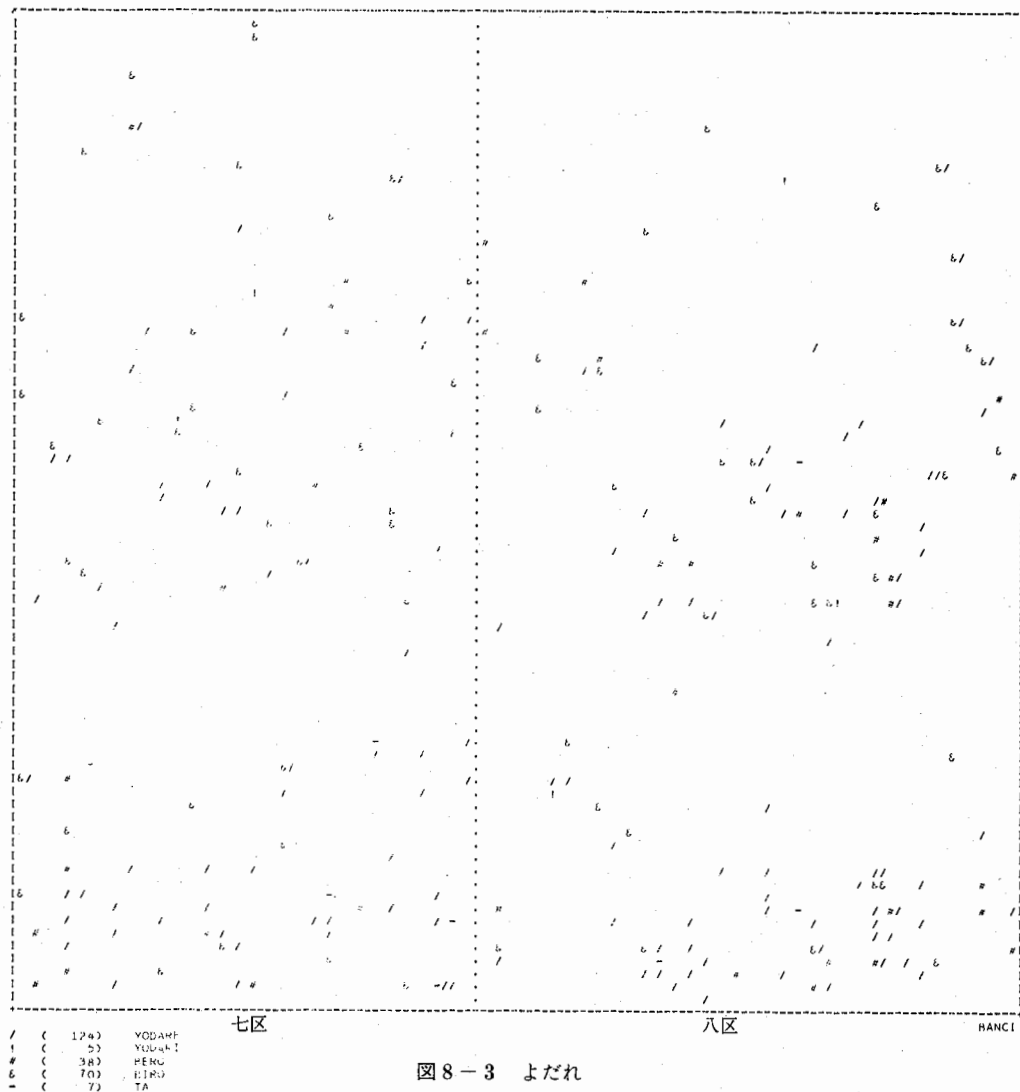


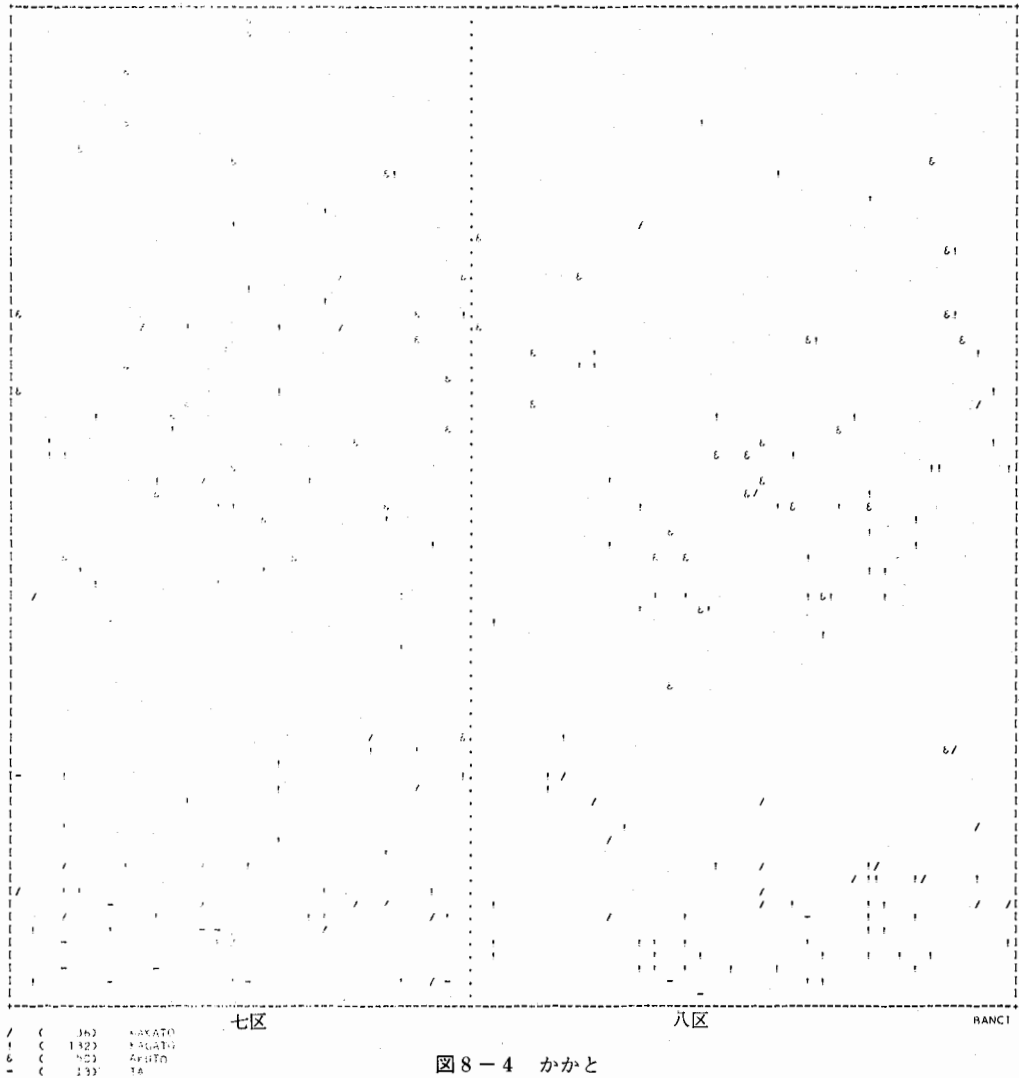
図8-3 よだれ

3 ヨダレにおいても事情は同様である。

4 カカトにおいては、8区の小中学生に地方共通語形カガトが集中し、7区は少ない。

5 アザガでは、8区に中興方言ブスクロク(とアザ)が多く7区には新方言アオタンが多い。アオタンの使用者の大部分は7区(の若年層)であり、区の差が非常にはっきりしている。

6 デキタでも、8区にはブスクロクと対応するナツタとアザに対応するデキタが多い。7区



の方を見るとアオタンに対応するデキタも多いが、「他」も多い。動詞にあたる部分を答えなかった人である。

7カタグルマにおいては、新方言形カザグルマが地理的・年齢的に固まる傾向が見られる。しかし成人に見られるものは学童のものと直接結びつかないようである。カザグルマというのは覚え違いと考えられ、成長に従い修正をうけるためだろうか。

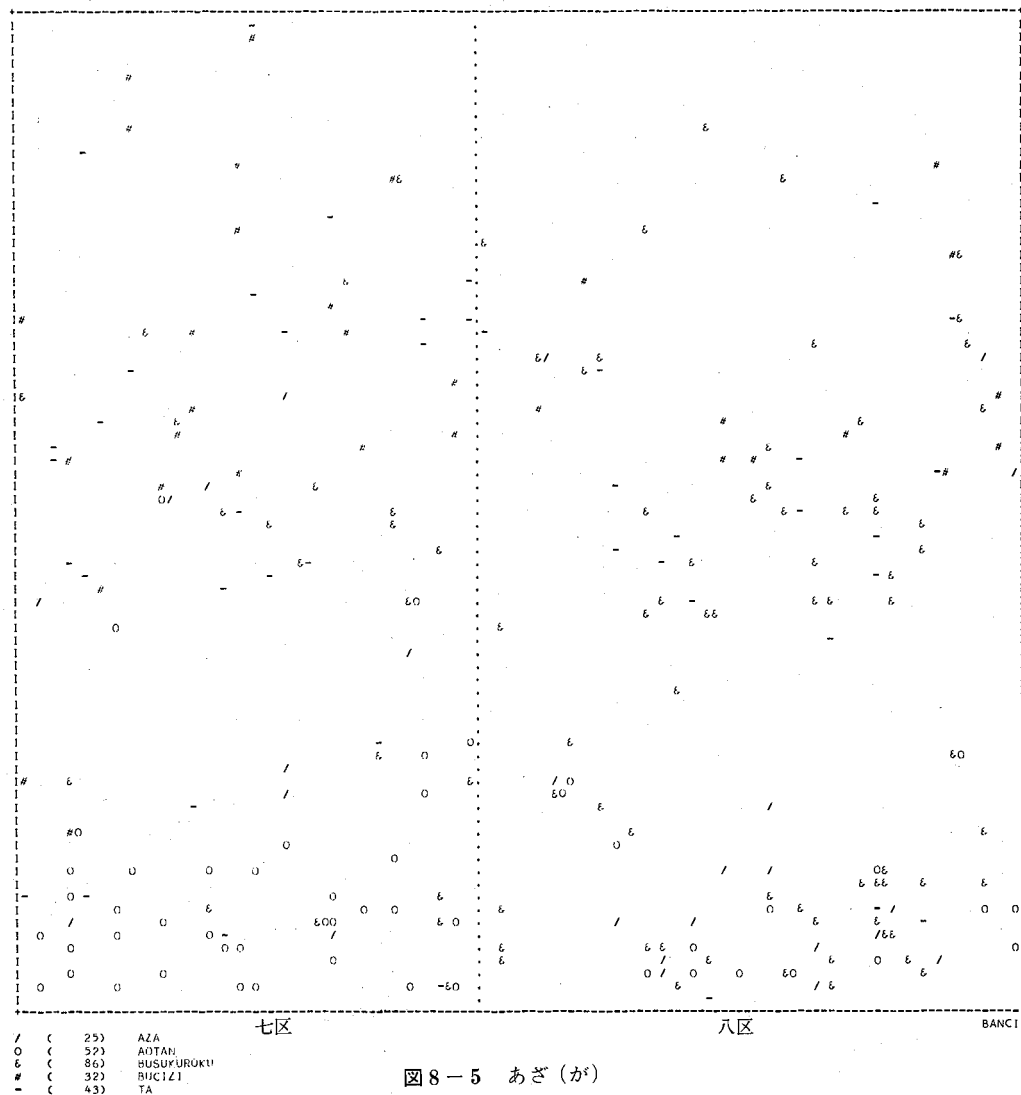


図 8-5 あざ (が)

8 ツムジでは、これまでの図と違って年齢による変化がはっきり出ている。中年層あたりで新方言ウズマキを使う人は8区の一部に固まっているのだが、偶然かもしれない。マキメを使うのが7区に多く、同一家族に固まっている。

9 ヤブニラミでは若い層に「他」が多い。実は無回答による。語形の種類が多い。同じ言い方が近所の同年輩の者に固まる傾向が見られる。新方言アッチャメ（等）は7区では小中学生

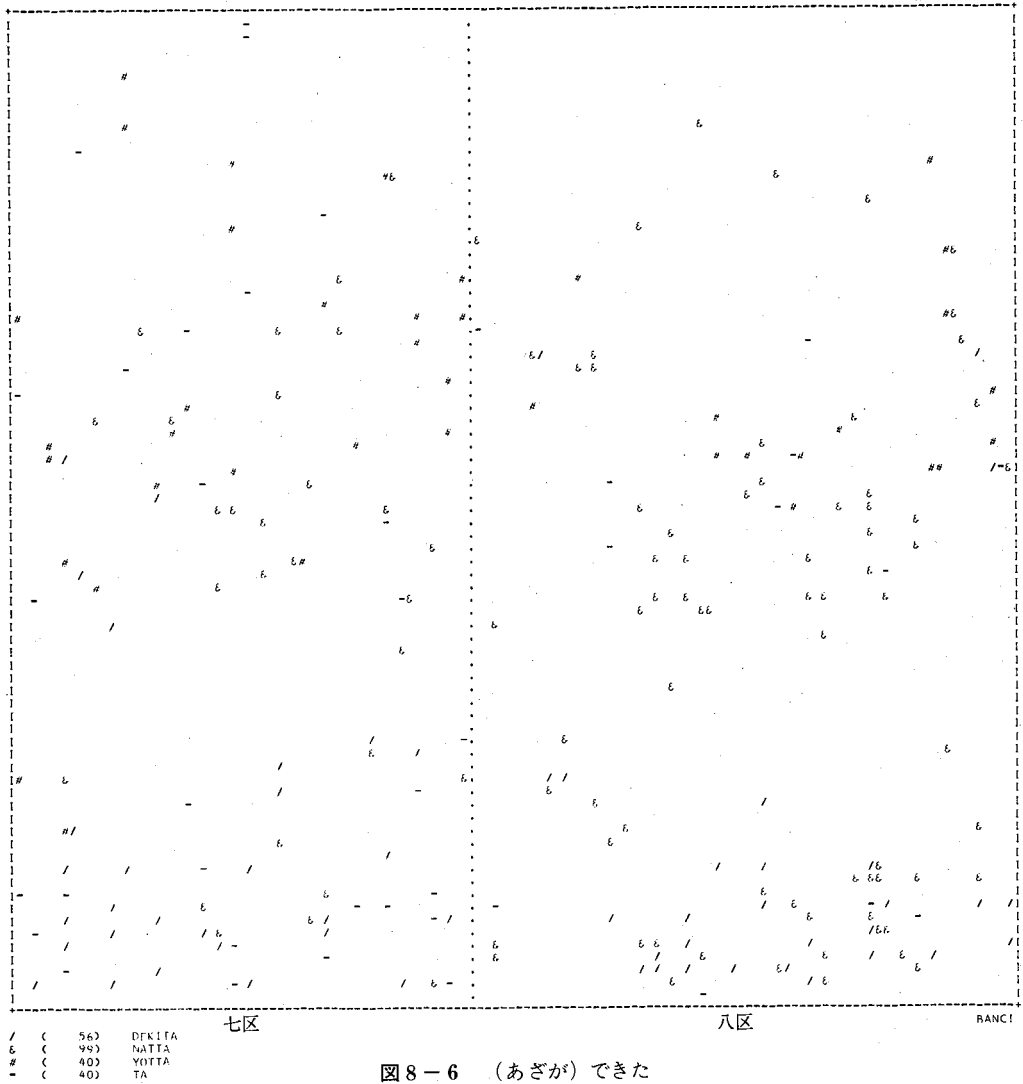
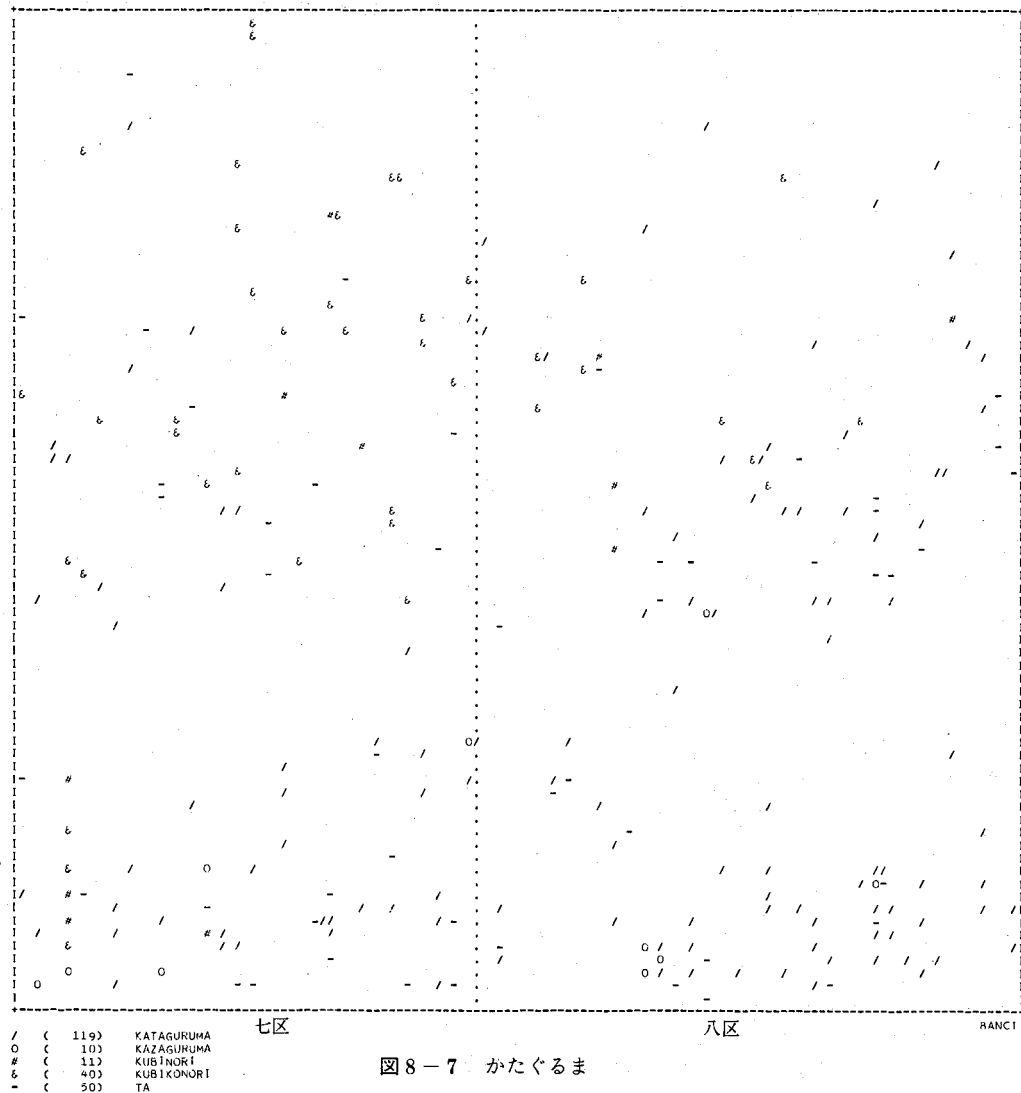


図8-6 (あざが) できた

に目立ち、8区では中年にも多い。古方言ダーメは7区に多い。

10 クスグッタイは、語形の数が多い。林3類にかけなかった語形をも「他」とせずに細かく示して見たためである。モチョコイが圧倒的だが、それ以外の特殊な言い方を見ると、モチャコイ(G)モチャコチョイ(●)はじめ家族内や近所の同年の者に固まる傾向が多く見られる。モチョコチョイとモチャコチョイは8区の中年にしかない。モチョクチャイは7区の中年に多



い等、区の差と言えそうなものもある。

こうして通覧すると、7・8区の違いを形成するものは、実はごくわずかの語形（たとえば、アオタン、アッチャメ等）のかたよりと言えそうである。もっと調査語彙が多ければあるいは埋没してしまうようなものかもしれない。しかし、たった一語でも明らかに区の違いを示すとすれば、それによって区の間言葉の違いがあると結論しうる。言語地理学なら等語線を一本

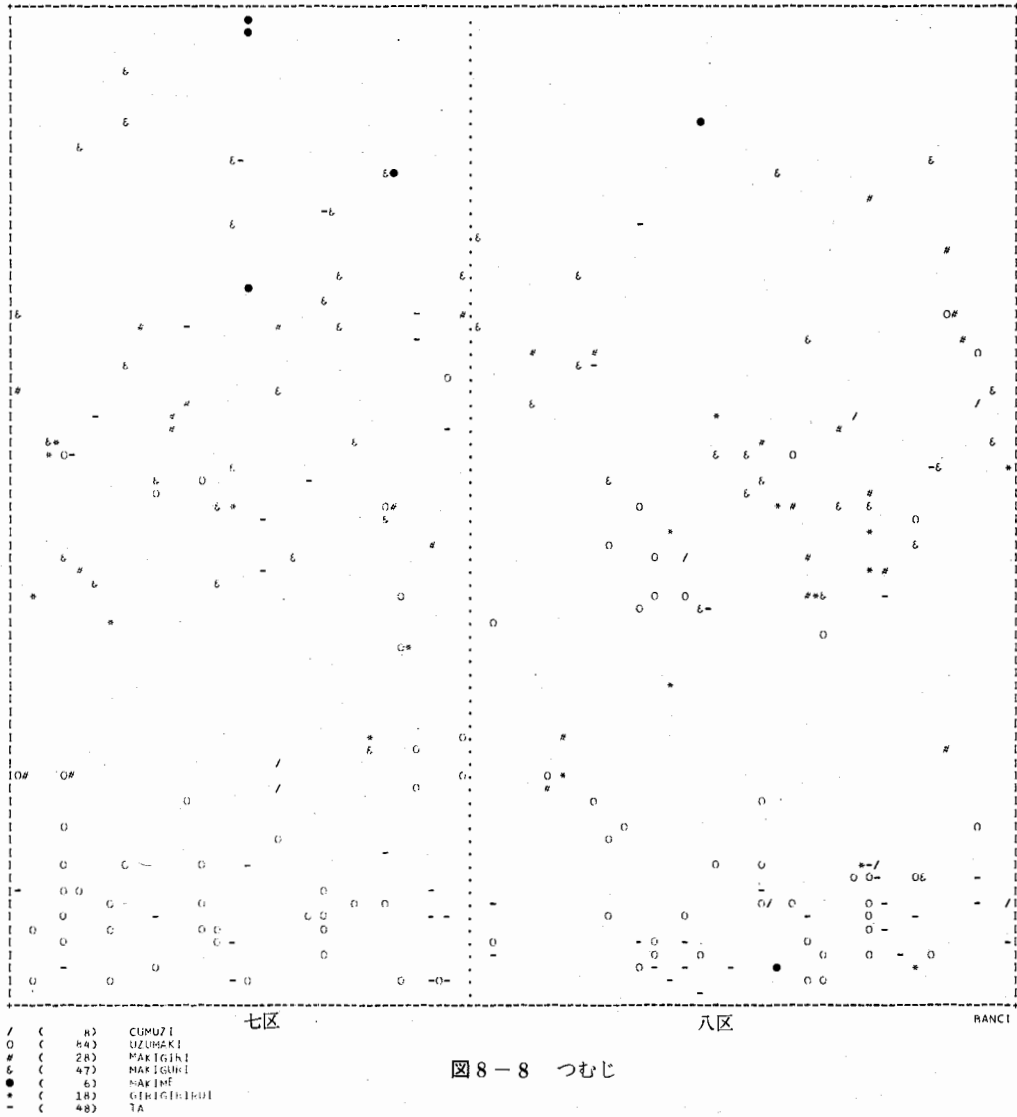


図 8-8 つむじ

ひく所である。

ところが、再訪して地元の人に聞いて見ても、7・8区の方に言葉の違いがあるとは思っていない。(年齢差・個人差の方が大きいのだ。)しかし一方では、日頃の交際範囲が地理的・年齢的に限られていること(これは小集団におけるコミュニケーション研究でわかっていたことであるが)は、住民の認める所である。

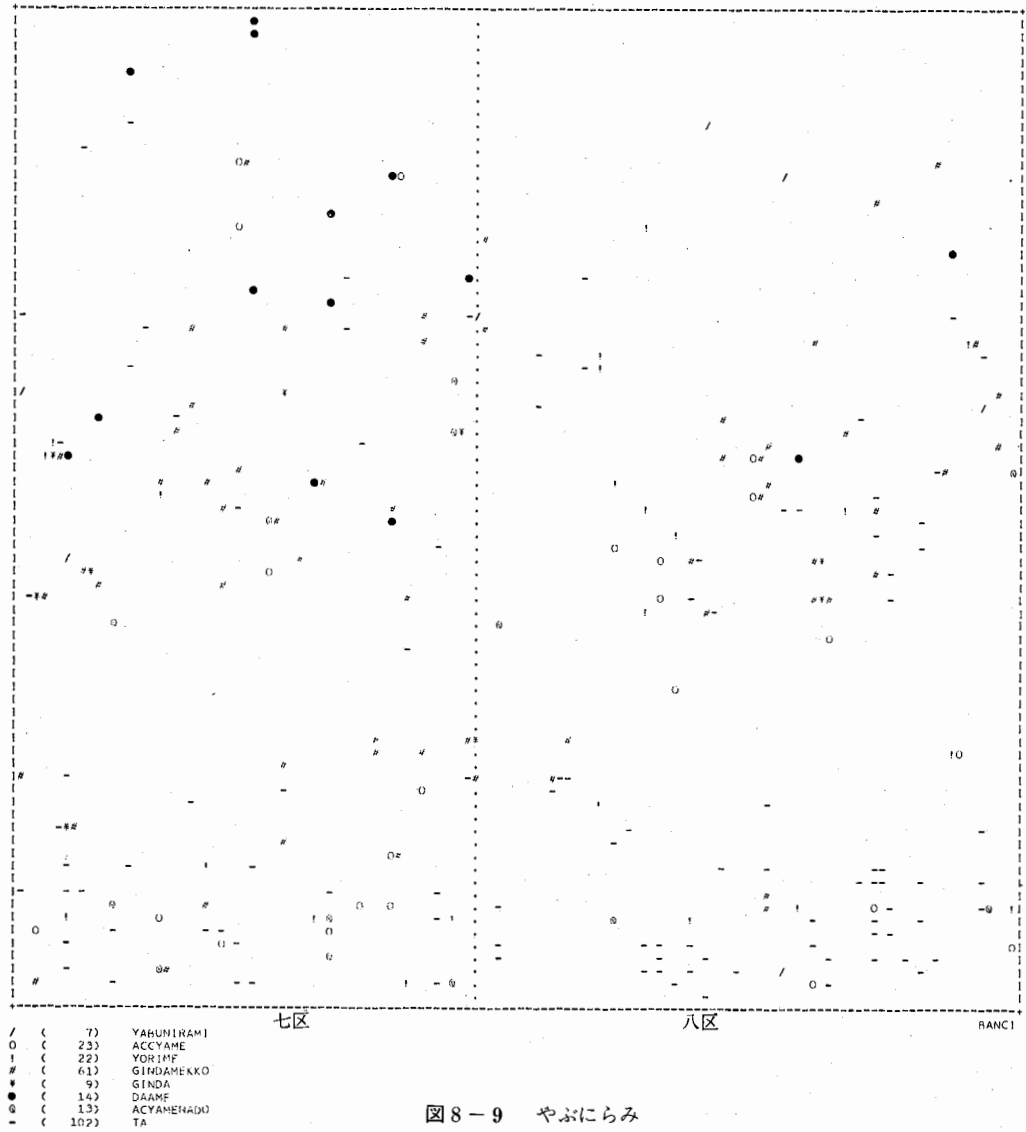


図8-9 やぶにらみ

島野調査では個人名をあげてのソシオメトリックな調査項目を採用しなかったため、実際に7・8区のコミュニケーション構造がどうなっているのか不明である。しかし、一般論から言って、上の glottogram における語形の固まり具合は、住民の交際範囲、そして語形の伝播過程をかなり反映しているように思われる。

単語により、その使用場面や使用頻度等は異なり、語形伝播の過程にもかなりの影響を及ぼ

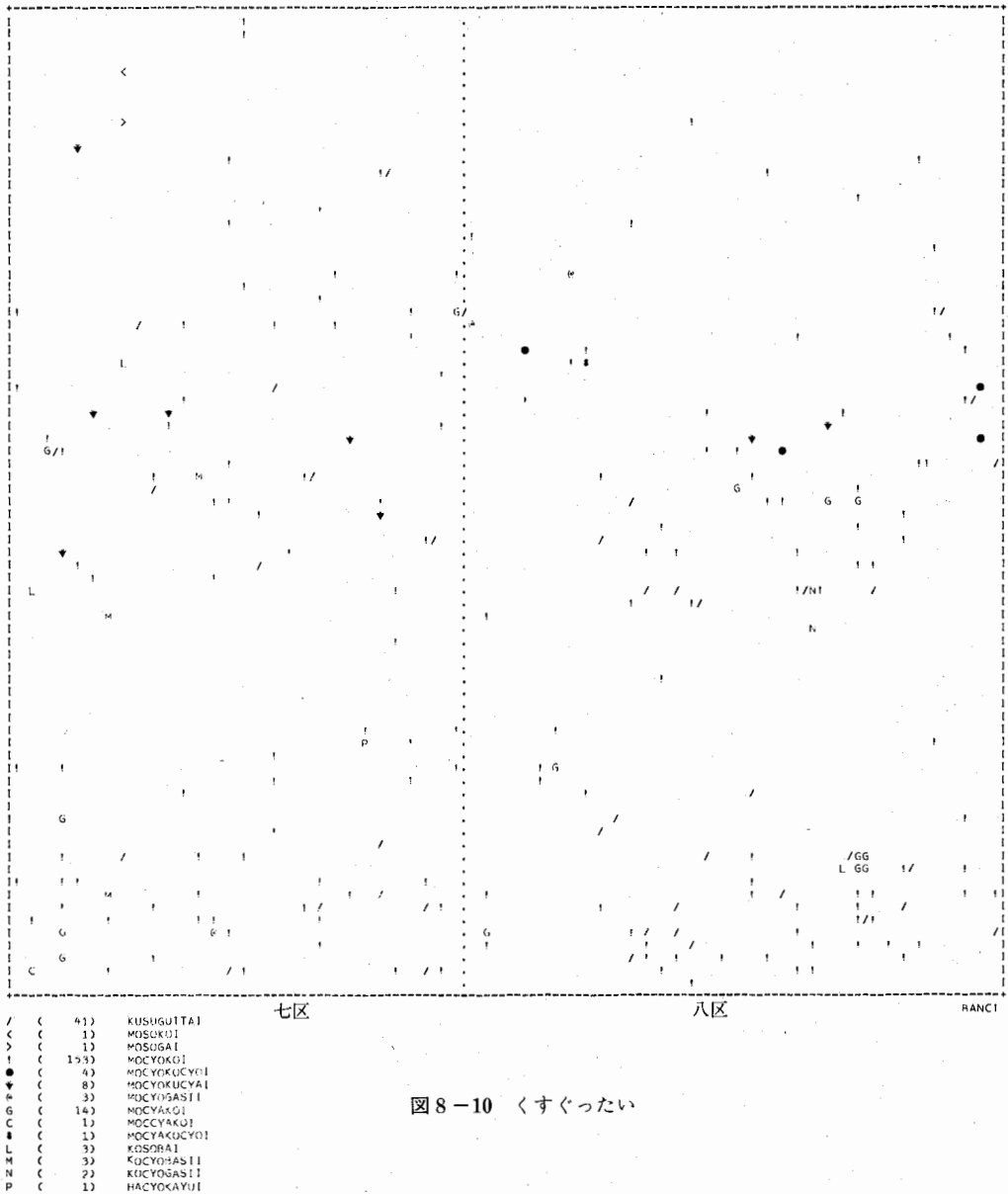


図 8-10 くすぐったい

すと思われる。この調査にとりあげた9語のうちいくつかは、ごく内輪の場面でしか出ず、使用頻度もそう高くない。だからこそミクロな地域差・年齢差が出たのだろう。

1976年8月の補充調査で、7区の中学2年生から印象深い報告を得た。本人は「あざになった」を「ブスクロクナッタ」と言うが、「アオタンデキタ」も聞いたことがある；7区の近所の女の子が実際そうだったし、アオタンと言っていた、というのである。その女の子はまさにア

オタンデキタのひろまっている中心部に居る。あるいは周囲の友人にそれを機会に新語形（新方言形）をひろめたのかもしれない。この語形は児童期に遊び仲間から習得することが多いのかもしれない。

クスグッタイの諸語形で、親子・夫婦・近隣の同年輩の者に共通なのが見つかるのも、マイクロな伝播の一例であろう。このようにマイクロなコミュニケーション構造が地理的・年齢的な偏りを見せることを考えると、前出の glottogram でいくつかの語形が固まって出たのも、偶然とは言いきれないようである。

このような偏り・固まりを示す語形が多くは「新方言」で、ことに小中学生に多いのは、言語変化の一般パターンから言っても、住民のコミュニケーション構造から言っても、当然と言える。成人以降は交際の範囲が広がり、近隣や同年齢の者に限られなくなる。また全国共通語形はミニコミ・クチコミ以外のルートから知識として入って来る。中興方言もよそから入ることが多いらしい。古方言・地方共通語は減びる一方で、残存の様相はランダムになると思われる。結局、ある個人がどういう語形を使うかは、確率論的な過程とみなすことができる。ただ小中学生など、そして新方言などについては、伝播過程にかなりの制限が加わり、glottogram などでもとらえうる形になるのであろう。

これはまた、地理的伝播過程とも密接にからむと予測される。これまでの言語地理学の成果によれば、全国共通語形は「空からばらまいたように——一定地域に固まることなく——分布する」と表現されている。これは島野の中でも、年齢もさることながら、職業や性別による使用率の振幅が大きかったことと関連する。同じ（年齢的）条件の人を選んだとしても、実は他の条件のコントロールがきいていないわけで、言語地理学的推定に際し方法論的前提となる同一条件下におけるインフォーマントの答を得ることは、困難ということになる。

それに対し「新方言」の方は島野7・8区の中にさえ家族・近隣集団・年齢階層による偏りが見られた。遠く離れた集落間だともっと違いは大きくなりうる。しかし、隣接する2集落間に all or nothing の画然たる等語線をひきうるようになるかについては、もう少し検討が必要のようである。

ここに提示した極限の glottogram は、語形の伝播過程の研究に貢献する所大であり、言語地理学と、言語社会学・言語心理学の接点となりうるものである。この効率的な運用のためには、成員間の言語差の激しい項目を選ぶことが望ましい。また小集団の中でよく使われる単語の方が好都合である。

上に現われたいくつかの語における7・8区の違いは、地域差・集落間の差と考えてよいだろうか。言語地理学では、すべての集落間には最低一本の等語線をひきうるという。一集落一人のインフォーマントの時は作業上確かにひきうるが、複数（多勢）調べたらどうなのか。この島野の例は年齢層を限れば、全員調べてなお7・8区の間にわずかに差が出たわけである。

この島野は、昭和 30 年までは独立した一つの村だった。7 区・8 区もそれぞれが一つの集落であると言ってよい。(違うのは人家に切れ目がなく、神社も別々に持っているわけではなく、集会所は 7・8 区共同のを最近建てており、人為的・行政的な切り方による集落ということである。)

もしアオタンその他の例が調査上の誤差でないとしたら、この語において、ある年齢層を限れば、確かに等語線はひかれると言ってよい。しかしこれは伝播の一時点の様相を示すのみで、少し時がたてば区の違いは消滅してしまうのかもしれない。

以上を「地域差」「集落間の差」と呼びうるかどうかについては、もう少し広い目で見直す必要がある。島野付近の全体状況の中に位置づけることも必要であり、また他地域(ことに定住の歴史の古い内地)の、もっと地理的に離れた 2 集落間でも同様の調査を行なう必要がある。

それにしても「新方言」は、一体いかなるメカニズムによって普及・伝播したものなのか。音韻変化のみならず²⁾、語彙変化についてもいかなる過程を経るのか考えておく必要がある。全国共通語の普及には、いわゆる prestige が強く働いていると思われる。その使用者層、使用文体等によって、地域社会に勢力を拡大するのであろう。しかし「新方言」ではどうなのか。言語地理学において観察される都市から辺境への伝播の一部は、この新方言の場合に近いのではないと思われる。この島野の新方言に見る限りは、その語形の用いられる文体がことに高いとは思えない。また社会的地位の高さというような威光を持った人がひろめたとも思えない。むしろスラング・流行語に近いひろがり方を思わせる。

同様に、「中興方言」は一体いかなる勢力を背景にして「古方言」と交替しつつあるのか、また「地方共通語」は、いかなる背景によって「共通語」たり得たのか。

このような問題に一步踏み込もうとすると、島野での調査が不十分であったことに気づかざるを得ない。周囲の地域を調べていないのみならず、語形の伝播・受容の際に働くであろう心理的・社会心理的要因に何もふれていないからである。今後の研究を待たなければならない。

なお、この glottogram は、もっと色々なことを物語る。たとえば同一家族内で、下の世代の答が常に上よりも新しいとは限らない。もし下が常に新しい形を答えてくれていたら、年齢変化はもっとはっきりしているはずである。老人の方が新しい言葉を使うとか、若い(幼ない)者が古い言い方をすることも確かに実際にありうることだが、調査の誤差もありうる。ほんの数人だけの資料からの結論は、時により危険でありうる。

2) U. Weinreich, W. Labov, M. I. Herzog, Empirical Foundations for a Theory of Language Change, *Directions for Historical Linguistics* (W. P. Lehmann, Y. Malkiel eds., Austin and London, 1968) pp. 95-195.

9. 集落内の言語差

この研究の目的の一つとして、道南（ひいては北海道）で分布調査等を行ない、道内の方言差を論じる時に、定住の歴史の古い道外と同じような考え方をとりうるかを検討することがあった。これはむしろ、道内各地での同様のミクロな調査の結果とも照合してから論ずべきテーマである。ここでは、今回の調査でわかったことのみを記す。

第5章の各語のグラフを、下北半島上田屋のはえぬきの集計結果¹⁾と比較すると、島野の方がずっと集落内の言語差の大きいことがわかる。得られた語形の数も多いし、各語形の占める割合も小さい。

この場合の島野の「はえぬき」とは生地も小学校も島野という者であった。更に条件を厳密にして、親をも考慮に入れよう。ただ本人も両親も島野生育の者（島野3世）となると、わずか30名である。村内の結婚が少ないためである。本人と片親が島野生育の者（島野2.5世）をも入れると138名になる。島野には祖父母の代から居住しているわけで、三代目とみてよい。（なおこれは道南3世136名と数の上ではほぼ一致する。島野2.5世の片親の大部分は道南出身である。）

この138名から得られた語形の数はい次のようである。なお10名以上が答えた語形をも、コンマのあとに示す。（家ででの場面で単用で得られた数のみ。細かい音声の差は無視。）

つめたい（6, 3）、とうもろこし（5, 3）、よだれ（5, 3）、かかと（4, 3）、あざ（が）（17, 4）、できた（7, 3）、肩車（11, 2）、つむじ（10, 3）、やぶにらみ（24, 3）、くすぐったい（12, 2）。項目によっては、使用人数9人以下という弱少語形が相当多い。調査項目選定の際に、語形の数が多いものを選んだせいでもあるが、数の多さは予想外であった。

下北半島上田屋での調査結果と直接比較することは危険である。調査項目自体もクスグッタイが一致するのみである。しかも一致する調査項目においても、変化過程にあるか否か等、置かれた条件が違いうるため、やはり比較できない。

北海道の共通語に関し、音韻・アクセント・文法に比し語彙は比較的早く共通語化が進むと言われるが、少なくとも、上記のような、使用頻度数の少ない、使用場面の限られる、方言量が多く方言差の大きい項目では、集落内の差が大きいと言える。もちろん、基本語彙等においては、言語差がほとんどなかろうとは十分に推察できる。しかし、道南の漁村の調査では、ごく少数のインフォーマントの答から全体をおしはかたり、その相互比較から地域差を論じるのは、場合によっては相当に危険であると、言えそうである。これについても、島野の周囲の地

1) 第6章注12)の拙稿参照。

域との対比が必要である。

同じ調査項目を用いて島野の東隣の岩内町市街地、西隣の蘭越町港町でも調査を実施中である²⁾。道内各地の資料も収集中であり、これらを用いれば、島野の位置づけはもう少し確実になるものと期待される。

10. 島野方言の位置づけ

第9章では島野7・8区の中の差が大きいことを指摘したが、すでに第5章で見たように、各項目毎にLAJや20年前の高校生の調査や現在の短大生の調査とを比べてみると、大きくいちがいは見られなかった。

道内にも地域差があることはLAJから見ても明らかであり、20年前の高校生の調査でも残っていたし、現在も残っている。更に現在新たな地域差が形成されつつある。島野の情勢も、直接道内全体とつきあわせるのではなく、まず道南または岩内付近の状況とつきあわせるべきである。そうするには今の所資料は余りにも貧弱であるが、いくつかの事実を指摘することはできる。

大まかに言って、島野の老人層に現れる語形はLAJで道南に盛んであるか道南のどこかに見られる形で、ひいては東北地方（ことに青森県や秋田県）と結びつくものだった。また島野の中年層・壮年層で勢力をひろげる語形のいくつかは、LAJで北海道内陸部に盛んなものだった（トーキビ、カガト、ブスクロクナツタ。）若年層で増える語形は大部分全国共通語形と一致する（一部、道内若年層と共通な「新方言」がひろがっている。）わずかの項目からの結果ゆえ改めて検証は必要であるが、ここ島野では、まず道南方言に同化し、次いで北海道共通語化が進み、今更に全国共通語化しつつあると、概括できる。

恐らく、この結論は道南のかなりの部分にも適用可能なものではあるまいか。集落内の差が大きくとも、かなりの人数の調査結果から大勢を見る限り、島野はある程度道南の状況を代表していると言える。

ただし、いくつかの語形の普及については島野の特殊性と思われるものもあった。これが島野（7・8区）だけの特殊事情なのか、岩内近辺に共通なのかは、解明されていない。もう少し広い範囲で同様の調査を行なって考察することが必要である。北海道全体の言語状況を考察するにも、まず狭い地域での実態を把握する必要がある。

2) 1976年末現在、島野の東の岩内町市街地の一部、島野の西の蘭越町港町において、島野と同じ語彙項目の調査を終え、整理中である。また1977年1月の増毛町の三ヶ所（漁村、市街地、農村）における調査にも同じ項目を入れる予定である。

ここで、第5章に引用した短大生のアンケート結果を別の観点からまとめなおしてみよう。場面の使いわけに着目して、分布タイプを次のように分類できる。(カッコ内の数字は島野調査票の番号。)

- a. 両場面ではほぼ全国共通語化(使いわけが少ない) — (3) よだれ(一部ベロなど), (4) カカト(一部カガト), (6) カタグルマ, (8') ヨリメ。
- b. 場面によってきれいに使いわけ(；の左が家, 右がテレビでの語形) — (1) シャッコイ; ツメタイ, (2) トーキビ; トーモロコシ, (9) コチョバシイ, コチョバイ, モチョコイ; クスグッタイ。
- c. 場面による使いわけわずか(；の左が家, 右がテレビの場面でやや多い語形) — (5) アオタン, ブスイロ; アザ, (7) ウズマキ, グリグリ; ツムジ, (8) アッチャメ, アチャメ, ガチャメ, ロンバリ; シャシ。

以上はもちろん大まかな分類であり, 中間タイプがもっと増えるはずである。aに入れたカカトはcに近いとも言えるなど。

全国共通語との対比という観点から言えば, aは二場面で, bは(テレビ)一場面のみで共通語化が進行した。cは変っていない。

一方話し手にとっての使いわけという観点からは, bではきれいに使いわけられており, 方言・共通語の意識が明瞭なものと言える。aタイプでは話し手自身による使いわけは行なわれないが, 老人が使う語形を耳にして, 方言と判断できるであろう。話者にとっての共通語と言える。cは難しい。使いわけのある一部の個人にとっては方言・共通語の区別は明らかなのであろうが, 中には大勢と逆の使いわけを示す者もある。またテレビの場面で無回答となったり, 別の表現におきかえる者もある。たった一つの言い方しか知らなくて, それを全国共通語形と思っている者も, 方言と思っている者も居るわけである。

以上の三分類と島野の語彙の五分類をつき合わせてみると, 島野における新方言のうちカザグルマを除くものが短大生のcに一致することに気づく。アオタン, ウズマキ, アッチャメである。「新方言」は, 短大生の調査を行なう前には, あるいは島野だけの特殊な言い方かとも思えたのだが, 道内の若い層の変化状況を忠実に反映するものであることがわかった。

この「新方言」のあるcの三項目では, 全国共通語形の普及が遅れている。競合しつつあるわけだ。これらの語が, 公的な場面では余り使われず, 子供の間ではかなりよく使われそうな語であることと, 何らかの関係があらうか。

ところが「新方言」と言えそうなものは, 島野で見つかったもののほかに, 短大生の調査でもいくつか見つかる。ことにクスグッタイにおけるコチョバシイは全くの「新方言」である。LAJでは全く見当らない語形である。北海道北半でこの数十年の間にひろがったのだろう。しかも短大生自身もテレビでの場面となるとクスグッタイへと切りかえる。このほかに「つむじ」

のグリグリなども LAJ ではわずしか見えなかったもので、急速にひろがったものである。

このような「新方言」の誕生、普及は北海道だけの現象ではなく、前述のように各地から類例が報告されている。日本の方言は、マスメディア、人的移動、教育の普及・拡大によって今すぐにでも減びるかのように言われる。確かに古くからの言い方が廃れて行きつつはあるが、一方で新しい地域差が生まれつつあることも見逃してはなるまい。

この稿をなすにあたっては、多くの方々のお世話になった。七区自治会長対馬清勝氏、八区自治会長樋口修三氏はじめ、地元の調査対象になった方々の協力に、まず心からの感謝を捧げる。庄崎之男氏（岩内町教育長）、長尾康治氏（島野支所長）、倉島義昌氏（岩内第二中学校長）、宮博氏（島野小学校長）、白尾忠悦氏（岩見沢市志文中学校教頭）、高井清一氏（ホテル雷電相談役）には、企画、実施に際して様々御助力頂いた。調査結果の電算機処理にあたっては、小野米一氏（北海道教育大旭川分校助教授）、中野嘉弘氏（北海道教育大札幌分校教授）に御助言頂いた。最後に、寒風の中で調査に携ってくれた方言研究ゼミナールの学生諸君に感謝を捧げ、将来の健闘を祈る。

調 査 票 (注 中舌母音等はこの稿では簡略に表記する)

北大文学部 島野調査

1976 3月 13・14日

*自 己 紹 介

*未 調 査 確 認

開始 13(土) 14(日) 午前・午後 時 分 Inf. 名

これから物の名前などをいくつか聞きますので、自分がふだん使っていることばを教えてください。家の中で使うことば〔で囲む〕と、校長先生と(or テレビスタジオで)話すことば〔で囲む〕は違うでしょうか、両方について聞いて行きます。よろしく。

1 CUMETAI お湯は熱いですが、氷にさわったらどんなだと言いますか。

まず家の中では?→次に校長先生と校長室で(or テレビスタジオでアナウンサーと)話す時は?

1. tsumetai 2. tsumitai 5. sakko 6. jakke 7. hjakkoi 9. NR

2 TOOMOROKOSI 秋に取れて、ゆでたり焼いたりして食べるこういうのを家の中(→校長と)では何とい

いますか。

1. to: morokoji 4. to: kibi 5. to: kimi 7. kibi 8. kimi 9. NR

3 YODARE 赤ん坊や牛がよく口から水のようなものをたらしませんが、それを家の中(→校長と)では何とい

いますか。

1. jodare 2. jodari 6. biro 7. bero 8. tsuba 9. NR

4 KAKATO 足のこのへんのことを家の中(→校長と)では何といいますか。

1. kakato 2. kapato 3. kakado 6. agudo 7. aguto 9. NR

5 AZAGA DEKITA 足をぶつけたりすると、そのあとが青黒くなって、二三日消えないことがありますか、家の中(→校長と)では(何が)どうなったといいますか。

01. aza	10. aotan	20. buzizi	}	{	+ 0-無-	{	1. dekita, dekimaſita
26. busizi	40. aoku	46. dosukuroku					2. deta
50. busukuroku	53. busukkuroku						3. joru, jotta
63. busukurogu	80. busukuroi						4. naru, natta
85. busuiro	99. NR						5. utta 9. NR

6 KATAGURUMA こどもを首にまたがらせて肩に乗せることを、家の中(→校長と)では何といいますか。

10. kataguruma 70. kubikonori
19. kadaguruma 80. kubikkonori
30. kazaguruma 85. kubinori 99. NR

7 CUMUZI 頭のとっぺんの毛がうずになっている所を、家の中（→校長と）では何といいますか。二つあるとか右に巻いているとか言いますか。

- | | | | |
|--------------|------------|--------------|--------------|
| 10. tsumuzi | 39. giri | 60. makiguri | 70. uzumaki. |
| 30. guriguri | 40. magime | 61. magiguri | 71. uzumagi |
| 35. girigiri | 45. makine | 65. makigiri | 80. uzu |
99. NR

8 YABUNIRAMI 黒眼がずれていて、まっすぐ見えても別の方を向いている人が居ますが、それを家の中（→校長と）では何といいますか。

- | | | | |
|----------------|-------------|-------------|-------------|
| 10. jabunirami | 62. gatjame | 71. atjame | 85. jorime |
| 40. gindamekko | 70. attjame | 72. attjime | 88. jokome |
| | 93. da : me | 77. ajame | 90. rompari |
99. NR

9 KUSUGUTTAI 足のうらとか、わきの下にさわられると、笑いたような妙な感じがしますが、家の中（→校長と）ではどんなだといいますか。

- | | | | |
|----------------|-----------------|--------------|-----------------|
| 10. kusuguttai | 40. motjokoi | 50. motjakoi | 65. kosobai |
| | 44. motjokutjai | 52. motjake | 78. kotjobaji : |
99. NR

30 IKA 干したものはスルメとありますが、生のものは？ 家の中（→校長と）では。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|-------|
| 1. ika | 2. eka | 4. iga | 5. ega | 9. NR |
|--------|--------|--------|--------|-------|

31 HISIGATA こんなかつこうを何ガタとといいますか。おひな様にあげるもちの形です（家の中のみ）。

- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. hiigata | 3. sijigata | 5. sisigata | 7. hihigata |
| 2. hiijigada | 4. sijigada | 6. sisigada | 8. hihigada |
9. NR

10 SUKE わけ・理由を言う時に、イクカラとかイクスケといういい方がありますが、家の中（→校長と）ではスケを使いますか。

- | | |
|-------|---------|
| 1. 使う | 2. 使わない |
|-------|---------|

10 KARA それでは、家の中（→校長と）で、カラを使いますか。

- | | |
|-------|---------|
| 1. 使う | 2. 使わない |
|-------|---------|

11 KAKERERU 「書くことができる」という時に、家の中（→校長と）でカケレルとといいますか。

- | | |
|-------|---------|
| 1. 使う | 2. 使わない |
|-------|---------|

11 KAKERU 同じように「書くことができる」という時に家の中（→校長と）でカケルとといいますか。

- | | |
|-------|---------|
| 1. 使う | 2. 使わない |
|-------|---------|

12 IKABE この位でいいだろうなどという時にイカベとかイーベとかイーッショとか色々の言い方があるようですが、家の中（→校長と）ではイカベとといいますか。

- | | |
|-------|---------|
| 1. 使う | 2. 使わない |
|-------|---------|

12 IIBE では同じことを、家の中（→校長と）でイーベと言いますか

- | | |
|-------|---------|
| 1. 使う | 2. 使わない |
|-------|---------|

12 IISSYO それでは、家の中（→校長と）でイーッショとは言いますか

- | | |
|-------|---------|
| 1. 使う | 2. 使わない |
|-------|---------|

- 13 KOBA 人がなかなか来ない時に「早くクレバイーノニ」とか「コエバイーノニ」とか「コバイーノニ」とか言いますが、家の中（→校長と）ではコバイーノニといますか。

1. 使う 2. 使わない

- 13 KOEBA では、同じことを、家の中（→校長と）で、コエバイーノニといますか。

1. 使う 2. 使わない

- 13 KUREBA それでは、家の中（→校長と）で、クレバイーノニといますか。

1. 使う 2. 使わない

- 14 SIRE シナサイ！と強く言いつける時に、家の中ではシレといますか。〔校長と→不要〕

1. 使う 2. 使わない

- 14 SURE 同じことを家の中でスレといますか。

1. 使う 2. 使わない

- 14 SIRO それでは、家の中でシロといますか。

1. 使う 2. 使わない

- 15 GOHAN O TABETA 「食事をすませました」「ごはんを食べました」ということは、ママクッタとかメシクッタとかゴハンタベタとか色々な言いますね。〔○で〕

1. 家の中ではどういいますか。

1-ママ 3-メシ 5-ゴハン $\left\{ \begin{array}{l} -2オ \\ -3ガ \end{array} \right\}$ 1クッタ 2タベタ 9NR

2. 近所のしりあい（友達）とでは？

1-ママ 3-メシ 5-ゴハン $\left\{ \begin{array}{l} -2オ \\ -3ガ \end{array} \right\}$ 1クッタ 2タベタ 9NR

3. 島野でもよくしらない人とでは？

1-ママ 3-メシ 5-ゴハン $\left\{ \begin{array}{l} -2オ \\ -3ガ \end{array} \right\}$ 1クッタ 2タベタ 9NR
5スミマシタ 3タベマシタ

4. 旅の人・よその人とでは？

1-ママ 3-メシ 5-ゴハン $\left\{ \begin{array}{l} -2オ \\ -3ガ \end{array} \right\}$ 1クッタ 2タベタ 9NR
7-ショクジ 5スミマシタ 3タベマシタ

5. 校長先生と校長室で話す時は？

1-ママ 3-メシ 5-ゴハン $\left\{ \begin{array}{l} -2オ \\ -3ガ \end{array} \right\}$ 1クッタ 2タベタ 9NR
7-ショクジ 6スマセマシタ 3タベマシタ
5スミマシタ

- 16 NEE アノナーとかアノネーのように、ことばの最後にナーとかネーとかつづけますが、家の中で話す時はナーとネーのどちらを使いますか〔番号を書きこむ〕

1 家の中 2 近所のしりあい 3 島野しらない人 4 旅の人 5 校長先生

--	--	--	--	--

$\left[\begin{array}{l} 1 \text{ ナーだけ} \\ 2 \text{ ネーだけ} \\ 3 \text{ 両方使う} \\ 4 \text{ 使わない} \end{array} \right]$

- 17 CUKAIWAKE 自分のふだんのことば使いを、標準語だけ〔5〕から方言だけ〔1〕まで五つ(の段階)に分けて
エ
るとしたら、どのへんになりますか。〔番号をかく、例4.5〕

1 家の中	2 近所のしりあい	3 島野知らない人	4 旅の人	5 校長先生	6 テレビスタジオ	7 札幌で道をきく時

- 18 HOOGEN HYOOKA 日本のあちこちのことば(方言)のうち、標準語を使うものに10点、標準語から
エ
一番遠いことば(方言)に0点をやると、次のことばは何点位ですか。

1 札幌のことば	2 小樽のことば	3 岩内の町のことば	4 島野のことば	5 倶知安のことば	6 東京弁

- 41 岩内の町に出るのは、月に何回位ですか〔通学も含め〕 月に 回位

- 40 岩内以外のよその人と話すことは月に何回位ありますか 月に 回位

- 51 お名前は？ 島野 $\left\{ \begin{smallmatrix} 7 \\ 8 \end{smallmatrix} \right\}$ 区 敷島内 ____ 番地

フリガナ	
漢 字	

- 52 何年うまれですか M T S ____年____月____日

- 53 島野の生まれですか？ 0 Yes No () 町村

- 54 島野の小学校に通いましたか？ 0 Yes No () 小学校

- 55 小学校には何年間通いましたか？〔〇で〕 4年 5年 6年 年

- 56 小学校を出たあとは？〔〇で囲み、数字をかく〕

$\left\{ \begin{smallmatrix} \text{岩内(第2)} \end{smallmatrix} \right\}$ 中学校 年 → $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{岩内} \end{smallmatrix} \right\}$ 高校 年 $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{岩内の商業科} \end{smallmatrix} \right\}$ 年 すぐ就職 or 家業

- 57 卒業後どんな仕事につきましたか？(～現職)

1 漁業 2 農業 6 在学中 他 ()

58 よその土地に住んだことはありますか〔3ヶ月以上〕〔○で囲み、記入〕

ア	リ	→	{	0 ナシ	
				出稼ぎ へ、今まで 回位	
				40兵隊 才 ~ 才	
				他 (ドコ) 才 ~ 才	

(結婚前の居住地も記入) ↑ 才 ~ 才

59 村や町や学校の役員をしたことはありますか

{	0 ナシ	
	1 生徒役員 ()	
	5 成人役員 ()	

60	父 (親) おとうさん	も島野生れですか	{	0 Yes	No ()	
61	母 (親) おかあさん	は "		[育ての親]	0 Yes	No ()
				[里の親]		
62	つれあいの方は	"		0 Yes	99 未婚 No ()	

どうも有難うございました。

終了午後 時 分

調査者 No

* 家族の様子

* 調査の目的・経過

協力度 (10点)

Pattern Analysis of Language Standardization in the Coast Dialect in Western Hokkaido

Fumio INOUE

This is a report of an all-resident language survey in a fishing village in western Hokkaido, which was formed in the late Yedo era by immigrants from the Northern Tohoku district.

Social composition of the speakers and psychological aspects of the dialect are examined, and frequencies of usage of main word-forms obtained in the research are shown, dividing the speakers by age-groups, sex and native place.

A technique of multivariate analysis called Hayashi's Quantification Theory Type 3 (the Quantification of Pattern Analysis) is applied to the same data, and the word-forms are classified into five groups.

Then the relationship between these five groups and nonlinguistic factors (properties) of the speakers is examined. The following tendencies are found : Typical users of Standard Japanese (zenkoku-kyōtsūgo) are young, female, white-collar workers of good education ; Local standard (chihō-kyōtsūgo) : middle-aged workers of poor education ; New dialect (shin-hōgen) : school children ; Middle dialect (chūkō-hōgen) : middle-aged workers of poor education ; Old dialect (ko-hōgen) : old fishermen of poor education.

Glottograms (diagrams plotting each speaker by age on one axis and the location of his house on the other) of each word are then considered. Some word-forms are found to be used by speakers of similar ages and others are used by neighbors, showing probable routes of diffusion of words within this small community.

Some related problems, including the possibility of a combination of linguistic geography, sociolinguistics and psycholinguistics are then discussed.